

# 悠

# 遊

第十五号



企業OBペンクラブ

## 表紙の絵 「祈り」

吉田 邦彦

いつの時代、どこの国でもそうだが、シルクロードの女たちも何かしながら、おしゃべりするのが一番楽しかったに違いない。

ブハラという町は中央アジア、ウズベキスタン国の真ん中にある古代都市のひとつである。今でもやさしい大きな円屋根をもつ回教独特の青の寺院モスクの中では、祈りのあと女たちはナンを作りながらおしゃべりを楽しんでいた。

企業OBペンクラブ同人誌

《第十五号》

目次

◇巻頭言……………名誉会長 深田 祐介 4

Ⅱ特集・異文化との付き合いⅡ

- ◇宇宙開発を通じた米国との付き合い… 稲宮 健一 6
- ◇思いがけない海外での体験…………… 今川 確郎 8
- ◇異文化としての母国日本…………… 岩崎洋一郎 10
- ◇ラグビーお国振り…………… 大泉 潤 12
- ◇海外駐在員のひとりごと…………… 大塚 滋 14
- ◇日本語イマージョン教育について… 大平 忠 16
- ◇私にとっての異文化…………… 大野ただし 18
- ◇逆異文化との遭遇…………… 佐久間直正 20
- ◇慣れ親しんできた英語…………… 荘司 忠志 22
- ◇カルチャーショック…………… 杉浦 右蔵 24
- ◇放談―異文化との交流…………… 関谷 裕彦 26
- ◇異文化との接触…………… 中村 将陸 28
- ◇スピードガン…………… 高橋 孝蔵 30
- ◇中国―異文化の旅…………… 垂水 健一 32
- ◇泰緬鉄道建設と異文化…………… 玉山 和夫 34

- ◇カルチャーショックよりイデオロギーショック… 都甲 昌利 38
- ◇異文化との接触…………… 橋本 政彦 40
- ◇旅に病んで夢は枯野を…………… 山縣 正靖 42
- ◇グローバルゼーションの実像を考える… 松浦 武弘 44
- ◇異文化に向うあなたに…………… 松谷 隆 47
- ◇海外を旅行して思うこと…………… 三宅 劭 49
- ◇中世フレスコ画を学ぶ…………… 吉田 邦彦 51

Ⅱ特集・嘘Ⅱ

- ◇嘘について…………… 安藤 晃二 54
  - ◇教養ある人は嘘をつかない…………… 上原 利夫 56
  - ◇ロンドン・タイムズの嘘…………… 大庭 定男 58
  - ◇七人の嘘つき…………… 西川 武彦 60
  - ◇ユーモアのある嘘…………… 森田 茂 62
  - ◇霧の彼方の山田長政…………… 浜田 道雄 65
- Ⅱ自由テーマⅡ
- ◇「ベンガルの槍騎兵」のことなど…………… 石川 正達 68
  - ◇コンサート&パーティの醍醐味…………… 阿部 洋己 70

◇「大伴家持」によせて……………上田 信隆 73

◇秋篠寺の伎芸天……………遠藤 俊也 76

◇エベレストの展望台……………大月 和彦 78

◇どうすることも出来ないはなし……………木下 洋介 80

◇デカンショ節考……………金京 法一 82

◇悠悠の記……………児玉 忠雄 84

◇帝大野球部の思い出と近未来優勝への期待……………黒崎 昭二 86

◇鷗外の処世術小説『舞姫』……………清水 勝 88

◇さらば宇都宮競馬……………田谷 英浩 90

◇霧ヶ峰吹く風になつて……………鶴飼 直哉 92

◇「のあ」とは何か……………牛坊 貞夫 95

◇生田の森の物語……………中川路 明 98

◇ファン・ボーイ・チャウと東遊運動……………中村 爽 100

◇歴史と真実……………鳥海 博 102

◇台湾再訪……………野瀬 隆平 105

◇「坂」の上に浮かぶ雲……………平尾 富男 108

◇ダイアモンドは永遠か……………藤岡 豊 110

◇屋久島を訪ねて……………吉壽 清己 112

◇鳩寿の祝い……………濱田 優 114

II 創作短編 II

◇泣き止まぬ初夜……………大西 宏 118

◇悪魔のたくらみ……………新山章一郎 121

◇危険な商い……………古川さちお 124

◇ベン俳句のこの一年 佳句鑑賞……………西川 知世 127

◇今年一年の川柳勉強会の成果……………平尾 富男 131

◇追悼 北田 純一さん……………北田 純一さん 134

◇追悼 純一さんの死を悼む……………亀井 弘次 134

◇追悼 平間真木子さん……………ニコライの鐘の下……………西川 知世 136

◇追悼 山田 春夫さん……………俳句を一から教わつて……………石川 素屯 139

◇八時半の電話……………大平 忠 141

◇企業OBベンクラブのあゆみ(年表・年史)……………平尾 富男 143

◇執筆者名簿……………編集後記……………152

表紙制作……………野瀬 隆平

表紙の絵……………カット

吉田 邦彦 児玉 忠雄・山縣 正靖  
吉田 邦彦・野瀬 隆平

## 巻頭言

### すべては「私小説」から始まる

名誉会長 深田 祐介

先日、自伝小説「歩調取れ、前へ！——フカダ少年の戦争と恋——」を上梓したのだが、出版社、作家などプロ筋にはわりと好評を頂戴して気を良くしている。しかし戦争体験は生活していた地域の条件に大きく左右されるから、同年輩の読者からはいまだに異議や質問が絶えず、応接に追われている。

そんな中で師匠筋になる阿川弘之氏がお便りを下さり「私小説にはやはりなにかある、とおもっている。なかなか面白かった」と言ってくれました。

私は若い頃から、この志賀直哉のお弟子さんから厳しく鍛えられ、電話がかかってくると「おい鉛筆をもつてこい。何ページの表現は意味が解らん」だのページに「あんな」「そんな」「こんな」が間をおかず出てくるのはどういふことだ、とよく叱られたものだ。

最近の叱られ役は誰がやっているのだろうかといつぞやお嬢さんの阿川佐和子さんに訊いたら「あたしよ、すぐ

電話と鉛筆持ってこい、が始まるの」と言っていた。

阿川弘之氏の作家としての生き方は、アマチュアから出発した場合のいい参考になるのではないかとおもう。

まず自分の海軍予備学生時代の華やかな青春小説「春の城」を書き、米國留学の体験を基本に「カリフォルニア」を書かれ、ついに予備学生同期に細かく取材されて、昭和の平家物語というべき「暗い波濤」を仕上げられる。

そして自分の海軍体験を拡大されるかたちで取材を重ね「山本五十六」以下の話題作を発表されるのだ。

「汝自身を知れ」は古すぎる格言だが、まず自分の人生を熟考し、知人友人に取材、それに小説的彩どりを添えてゆくのが、作家の「正道」のような気がしている。

私は「歩調取れ、前へ！——」の続篇、昭和三十年の大就職難の世相とそなで振り回される青年の姿を今書いている。

これもすなわち拡大版私小説である。

# 特集・異文化との付き合い



ヴェネツィア・サンマルコ広場 野瀬 隆平

## 宇宙開発を通じた米国との付き合い

稲宮 健一

マツチ箱のような玉電<sup>\*</sup>が渋谷駅から発車して間もなく、専用軌条から路面電車用線路が敷かれた道玄坂上の道路を横切るように差し掛かると、荷台に起立して並んだ多数の米兵を載せたトラックが電車待ちで停車していた。生まれて初めて見る鉄兜をかぶり、カーキ色の軍服を着た米兵、そのつばの奥の青い眼は何か強烈な違和感を脳裏に焼き付けた。そして長く残った。

それは戦争が終わり、その年のどんより曇った秋の午後、疎開先の石川県の作見村から、幸い戦災を免れた世田谷の上馬の自宅に戻る途中であった。当時、小学二年生、都会者といじめられ痩せ細り、海軍省勤めから復員してきた父に連れられ、ようやくと我が家に戻れるとほっとした気持ちでいたのを覚えている。

中里小学校を囲むように植えられた満開の桜は入学時と変わらず、淡い桜色が二階の窓の外を飾っていた。四年

の国語の教科書に、戦前の美しい日本の印象を述べたスイス人の手記があり、それが音読されたとき、教室の中から、くすくすと押しつぶしたような自嘲を含んだ冷笑が漏れてきた。当時の新聞は戦争に負け、破壊され、日本は四等国になったと報じ、皆が打ちひしがれていた。

日本航空のDC8がロサンジェルス空港に着陸前、ハリウッドの住宅街の上空を遊覧飛行するように飛び、やがて整然とした町並み、真つ直ぐ延びた広い道路に、遙か遠方から続いている車列が見えて来ると、間もなく着陸した。何だ、こんなに広い家、しかもプールもある。こんな豊かな国と戦争したのか。それは三菱TRW株式会社(MTRW社)の宇宙開発担当の社員として、提携先のTRW社への始めての米国出張であった。入社六年目、一九七〇年、米国の宇宙との付き合い事始であった。

米国随一の軍事、宇宙分野の最先端の高度な技術力を誇るTRW社はロサンジェルス郊外、海岸からさほど離れてないレドンドビーチ市にあり、近頃日本でもよく見かける郊外の大学のキャンパスのような、工場と言うより研究所のような雰囲気がある会社であった。



当初はTRW社とMTRW社の混成チームが日本の  
実用ロケットの開発を全面的に支援すると言う構想で  
あった。そのため、TRW社の会議室ではオーストラ  
リアのウーメラ宇宙基地の総てを開発した五十人程の技  
術者が我々を交え戦略会議を持った。飛び交う英語、分  
かる訳もない。やがて、一人が立ち上がり、「国防秘  
(Classified) に触れる事を外国人のいる所で喋っては  
いけない」と皆に忠告した。そうだ、我々は最高の軍事  
機密がそこかしこにある冷戦の西側の中心地に居ること  
を実感した。その当初の仕事の構想は日米双方の考え方  
の相違で実現しなかったが、代わりに、この混成チーム  
はロケットの特定な分野のみを支援する仕事になった。

仕事の範囲、日米間の分担、契約額等々は会社対会社  
の複雑な交渉によって、最終的には上層部間で調整され  
た。しかし、一旦、仕事の定義「SOW」<sup>\*＊</sup>が決まれば、  
その後は技術者達の知恵の出し合いになる。

我々と同世代の技術者が、技術的構想、技術文書、数  
式、支援ソフトウェアを間に挟み、侃々諤々の議論が始  
まった。米国側は確立した技術を伝える側で、日本側は

その受け手である。応用技術の授受がビジネスの目的  
であるが、その基礎には一般的な基盤技術があり、これ  
が両者の共通な知識ベースになる。応用技術は教科書的  
に習うとして、それを理解するため必要な基盤技術は英  
語を含めて、さほど不便を感じなかった。

具体的な内容はロケットが飛翔中に爆発した時、国内  
外の直下地域に及ぼす危険度の算定と、災害の予防措  
置技術を日本に確立することである。衛星打ち上げ用  
ロケットは外国の領土上を飛翔するから、この技術の重  
要度は自ずと自明である。この仕事を始める前提となる  
のはロケットが爆発した時の破壊状態を推定することだ  
が、いかに経験豊かな米国でも、これを確定事象で明示  
できる訳がない。しかし、彼らは実に大胆に、よく言われ  
ている独断と偏見で、この現象を推定した。多分、これが  
日本であつたら、議論百出で容易に結論に達せず、時の  
みが過ぎるのではないかと思った。その後の解析手法は  
我々に馴染みのあるものであった。大きな道筋を開くこ  
とにかけては、一枚も二枚も彼らが上であると感じた。

\* 旧東急玉川線、\*\* Statement Of Work

## 思いがけない海外での体験

今川 確郎

(一)

一九七四年夏の出張で、ベイルートからブカレストへ向かう時のことだった。前日、空港のルーマニア航空には電話して予約の確認を得ていたので、カウンターにその旨を伝えて航空券を差し出した。

ところがなんと「我が国のサッカーチームが搭乗することになったので満席だから、このフライトには乗れない。その代り、明日イスタンブールを経由するパンナムと、同地発ブカレスト行きルーマニア航空に空席がある。乗り継ぎには一時間の余裕があるので、代替の予約をするか」との臆面なき言い訳が戻ってきた。

同じ弁明を受けた米国人、印度人と共に「そんな一方的都合は承知出来ない。少なくとも一泊分のホテル代を補償しろ」と強く要求した。彼は平然として「ここでは決められないので本社に問い合わせる。但し可否は不明の上、早急な返

答は得られないと思う」と至って冷たい返答を繰り返すばかり。相手はサービスピース精神の至って希薄な共産国なので、三人とも「交渉しても無駄」と諦め、各自のホテルに戻った。

翌日のパンナムは三十分ほど遅れて出発したので、イスタンブールでの乗り換えが心配だった。果たして到着の直後、三人はトランジット用の車で、飛行場奥に駐機していたルーマニア機へ荷物と直行。やっと間に合い、共に笑顔で握手した。ヒヤヒヤした直後だけに、ほどなく眼下に見えたボスボラス海峡が特別美しく感じられた。

(二)

一九七四年七月、アムステルダムから成田に向かう際に、初めてソ連のアエロフロートを利用した。同地に一泊後、翌朝早めにタクシードで空港に向かったところ、運転手から「あなたは日本人のようだが、赤軍派か」と、突拍子もない質問を受けた。「確かに日本人だが、ビジネスマンだ。なぜそのようなことを聞くのだ」との返答に対し、驚くようなニュースを耳にした。「今朝のテレビ、新聞を見なかったのか。昨夕、日本赤軍派がハーグにあるフランス大使館を襲撃する大事件が発生した。空港で

の警戒は、特に日本人には嚴重のようだ。」とのこと。

果たして空港には警官が多数おり、乗客は長い列をなしていたので、自分にもチェックは厳しいだろうと覚悟した。ところがアエロフロートのカウンターは変わった様子もなく、スイスイと手続き、搭乗ができた。「ソ連航空」なので、オランダの官憲は特別扱っていたのか、と勘ぐりたくなる程の平静さだった。

機体は真新しい「イリユーシン」機で、乗客は三割程度のガラ空きだったので、ゆったり身体を伸ばして飛行することが出来た。その上、スチュワーデスの態度と食事は予想以上に良かった。反面、異様に思われたのは機内のアナウンスだった。アムステルダム、モスクワ間は、露、仏、独の三ヶ国語のみで英語は全くない。ところが、モスクワ、東京間は、乗客の半数以上が日本人だったせいも、露、仏、英の三ヶ国語だった。（日本語でのアナウンス対応は全くなかった）言葉の面でも、ソ連の米国への対抗意識が強く感じられたフライトだった。

(三)

今から四十年程前ミラノ赴任の途次、コペンハーゲン

の乗り継ぎ客用のトイレで戸惑った。小用の便器が高く、爪立ちしても届かない。隣の日本人は「ミサイル式でない」とダメだ」と言って、大使用に入った。「成る程ね」と、私も彼に倣って用を済ませた。北欧の人達の身長は、当時の日本人成人より平均二十センチ程高かったので、小用便器が我々には高すぎたのは当然だったのだろう。然し、子供用の低いのもあった筈。思いがけないハプニングで、二人とも気持ちの余裕を失っていたようだ。

トイレでは、モスクワ空港でも思いがけない体験をした。大使用トイレのドアの鍵がきつく、手首が痛くなる程の力を入れて、やっと閉めた。だが、出る際、鍵は何とか元に戻ったが、ドアは何回強く押ししても開かない。思い切って身体をぶつけたところ、ボタンと開いたが、勢い余って通路に倒れてしまい、恥ずかしい思いをした。

間もなく、女性用トイレから「誰か来て！ ドアが開かないの」と金切り声で叫ぶ日本語を耳にした。添乗員らしい日本人男性と現地の女性職員が急行。やがて件の日本人女性は「ああ怖かった。どうなることかと心配したわ」と震えながら、仲間の許に戻ってきた。

## 異文化としての母国日本

岩崎 洋一郎

人間、誰しも生まれ育つた国や社会で通用している考え方が、諸事に対する判断基準となり、考え方の母体となる。ただ、日本みたいに同一民族で構成される社会においては、ものの見方や判断基準が全国民に共通し、かつ、画一になりやすい。最近はグローバル化の影響で、都会では外国人の姿を見る頻度がかなり多くなったが、異文化の人と生活の場を共有する事態までは未だ至っていない。

従って、移民の国であるアメリカ合衆国は勿論、国境が事実上消滅したヨーロッパに比しても、日本国民は異文化に接する機会は少ない。髪の色も、眼の色もまったく同じな我々の社会は、西欧では考えられないほど特殊な存在であるという事実そのものを、殆どの日本人は意識していない。

その様な環境で育まれた日本の文化は、良かれ悪しかれ、日本社会にあつては正に標準であり、尺度であり、

誰もその価値観を問題にすることは稀である。

しかし、グローバルな視点ないし基準からは一寸外れている事が、日本では常識としてまかり通っていることが多々ある。この点を留意すべきであると思う。

私も、日本では、ごくごく普通であるとして受け入れられている事柄が、どうしても不思議に思えた時代があった。それは、物心ついてから九歳までアメリカに住んでいた少年として、初めて故国に帰ったときのことである。その時は、日本という新たな異文化に接したときの素直な実感であるとも言える。

一例を挙げると、私みたいな腕白が悪戯をしたとき、叱られるのに使われる言葉が、何かしつくり来なかった。その言葉は、今でもごく普通に使われ、日本人なら恐らく何ら抵抗無く聞き流す言葉である。「そんなことをしたら、笑われるよ」「家の恥だよ」「そんなことでもない」「世間様に顔向けできない」等々である。つまり、これらの言葉を分析して見ると、行為そのものよりも、外見が問題だと強調しているのである。

それまで育つたアメリカでは、そして恐らくその他の

国でも、こんな叱り方は先ず絶無であろう。「約束事を破った」「神の教えに背いた」「人間として恥ずべきことをした」というのが決まり文句であった。つまり、外観なんかよりも、人間の本質論であり、あるいは神の教えに背いたということが叱られる原因であった。つまり、そこにはいつも絶対的な「良心」と言う規範の原点が、見え隠れる。古今東西に揺るぎ無い絶対的なものの姿が、行動の尺度となっている。

後年、ルース・ベネディクト女史が、その名著「菊と刀」で明言しているように、日本では「恥」が規範である。これに対して、西欧では「罪」が規範であり、これら二つには根本的な違いがあると実証した。詳細については、この名著を繙いて欲しいが、両者の隔たりは深く大きい。

最近、色々な不祥事がメディアを賑わしている。スポーツ界のルール違反や、食物の偽装等々枚挙に暇がない。そして当事者が放つ言葉は一律に、「世間を騒がして申し訳ない」「皆様にご迷惑をかけました」といった内容の言葉の羅列である。

この言葉は、日本では謝罪にいつも使われるので、聞

き流すことが多い。しかし、この常套句が言っている真意は、「不祥事が世間に知れて、大騒ぎになったのが悔しい」「人心をかく乱したのが悪い。申し訳ない」と言った内容である。換言すれば、自分、または自社、が悪いことをしたので反省し、罪の意識に苛まれているということでは、まったく無い。こんな言葉が、謝罪として通るのが日本文化というものらしい。

これに対して、アメリカの女子陸上選手で、オリンピック金メダリストのマリオン・ジョーンズの記者会見は潔い。自分は、「嘘をついた」「規則を犯した」と罪を明確に認めた上で、祖国やファンと自分をも裏切る恥ずかしい行為を行ったと世界に向かって謝罪した。そうして「許していただけるものなら、許していただきたい」と。注目すべきは、この許すというのは、水に流すという日本的な行為を指すのではなく、法的な罰は甘んじて受けるが、「罪」を寛恕してくれという西欧的キリスト教的な意味であることである。

この差は、極めて大きい。最近の世相を見る限り、その差が広がりつつあると感じるのは、小生一人であろうか。

## ラグビーお国振り

大泉 潤

ラグビーの魅力に取り付かれて半世紀、第二の人生の日本ラグビー協会勤務時に、諸外国との交流も担当した。国際ラグビー連盟には約百の国、地域が加盟しているが、約二十の協会と接触があった。会った人達は若い頃からラグビーをプレーし愛する人々ばかりである。

英国四地域がそれぞれ代表チームを持ち、毎年冬にフランス、イタリアを加えて六カ国対抗を行っている。南半球の三カ国対抗と並んで世界最高レベルである。イタリアを除く八カ国が創立ネーションとして、世界ラグビー連盟を統べている。ロンドン近郊にあるトウィッケナムラグビー場は聖地として訪れる日本人も多い。

この英国の議会上下両院の議員が主体となり、ラグビーチームを編成し、英連邦を主に世界を歴訪し、親善試合を行っている。平成十年、十三年に日本を訪れた際は、スコットランド元代表の六十歳を越える上院議員や

駐日大使も加わっていた。日本側は超党派で首相、大臣、野党幹部、官庁OBも加わり和やかな試合であり、準備を担当した小生も出場の榮に浴した。

英国大使館ではこの議員ラグビーや日英大学対抗戦のファンクションが行われる。広い芝生の庭を取りまく広間でラグビー大国の外交官が招かれ、飲み物が提供される。政界や世界のラグビーの大物が居並んでいて、さながらラグビー外交の大舞台である。この席での会話が契機となって、外国チームの招待や日本ラグビー施設の改修のきっかけとなったこともある。

今年のワールドカップで三位になったアルゼンチンとは、日本との修好百年を記念して様々な催しが行われ、一環としてラグビー代表チームが来日した。試合終了後、広尾の大使館で行われたパーティで正規の国際試合の出場選手に贈られる初キヤップを得た選手が感涙にむせんでいた。

隣国韓国は、登録選手数が数千人で、財政規模も小さい。約十年前からの日韓定期戦は当初拮抗していたが、最近では、日本はプロ化により強化が進んでいて、

社会人、軍人、学生主体のアマの韓国との力の差が出てきた。また韓国側の役員は少数の方を除き、韓国語オンリーで日本語も英語も話さない。懇親会の席上でも話が通じないのが悩みである。しかし韓国選手はグラウンドでも、宿舎でも礼儀正しく、昔の伝統を守っている。

アジアでは、韓国、中国、香港、シンガポール、タイ、台湾、マレーシア、インド、スリランカ、カザフスタン、UAEなどとアジア協会を組織し、定期的に大会と会合を開いている。回り持ちの大会を青森で主催したとき、大会参加費用約五十万円を役所からの予算が入金しないからと半年延ばす国や、家族と一万円で東京に泊まりたいという役員もいた。また香港に事務局があり、ニュージーランド出身の裁判所勤務の巨漢が事務局長を務めていた。会議の都度立派なファイルを用意し、議事進行を図っていた姿が印象的である。香港はまた七人制ラグビーの大会を毎年開催し、世界の一流選手が一同に会し、五万人収容のホンコンスタジアムを満員にしていた。

オリンピック委員会役員も兼ねる中国協会会長は、ラグビーをオリンピック種目に含めることは賛成だが、中

国の若者はアメリカで活躍できるバスケットボール、バレーボール、サッカー、野球を好む傾向があり、力が入れているが興隆が難しいと悩みを語っていた。

南半球では南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランドがラグビーの三強である。スーパーチームを組織し、約百試合を全世界に放映している。いずれも数万人収容の観客席がほぼ満員になる。チームの役員、選手はラグビーの興隆に熱意を払い、質素な事務所、木造の宿舎、森に囲まれた郊外のグラウンドで練習に励んでいる。現在の巨漢のパワーゲーム一辺倒は世界の数チームに有利であることから、体重制の提案も生まれてきている。日本ラグビーとの交流が盛んで、合宿のために毎年数千人のプレーヤーが南半球を訪れている。

ラグビーの仲間はいつどこで会っても、真直ぐ目を見つめ、話を真剣に聞く。そしてやおら自分の経験に照らし、ゆっくり自分の持論を控えめに述べる。永年の肉体の鍛錬と自分のベストプレーを思い出しながら、自信に溢れた口調でラグビーを語る。共通語ラグビーに国境はない。

## 海外駐在員のひとりごと

大塚 滋

長い海外駐在中、日本からの出張者やお客さんが見えると、空港の出迎えに始まって、ホテルへのチェックのお手伝い、食事、観光への案内、そして相手側のアポイントをとり、面談のセット、立会い、場合によっては通訳まで、何でもこなさなければならなかった。

だから、当然のことながら多くの場面と場所で彼らのしゃべる英語を聞き、英語の能力に接することとなる。結果を先に言うなら、私の場合、出張者は技術屋のため、ごく一部の例外を除いて、会話は全く駄目か、非常に下手であった。

最初から、「英語は駄目よ」と言われている人は諦めているから、驚くことはない。文字通り手とり足とり、食事のメニューも必ず、

「君と同じでいいよ」

となる。メニューから希望の食事を選べないのだ。

問題なのは同じ会社や同業他社の連中で、「英語が上手い」と言われている人が実はそうでなかった場合だ。

もうこの人には二度と出張して来てほしくはないと思うのだが、東京では英語ができるという評判がある以上、そしてその人の将来を考えると、そのとおり言うことがどうしてもはばかられる。

「どうだい、彼の英語はたいしたもんだらう」

などと東京から電話で聞かれると、つい、

「ええ、そうですね」

と言葉を濁してしまう。

ここが日本人の、そして会社人間の悪いところとよく分かっているのだが、

「彼の英語はダメです。二度と海外へ出さないでください」

とは、どうしても言えない。

その彼が日本へ帰り、上司から、

「君は英語が上手いんだね、現地でもほめていたよ」とかなんとか言われると、出張先ではすっかり自信をなくし、もっと勉強しなければと落ち込んでいたのが、途端



に、あれでいいのか、そんなものかと安心する。

上司にしても、東京にいる限り、部下の英語の能力を正確に把握することは非常にむづかしいので、次の派遣のときも前回の現地とのやりとりを覚えていて、

「君の英語なら大丈夫だよ」となる。

かくて彼の考課表、英語の欄は『A』と記入される。

こうなってしまうと本人も困るが、現地にとつても迷惑千万、もとはといえば当方に原因があるのだが今更、

「駄目です」

とも言えず、次の出張も彼が来る。すべての面倒を丸かぶり、ほぞをかむこととなる。

現地での同業連中の集まりで、この種の話題をだしてみると、どこの社でも似たり寄つたりのケースで悩むことが多量のこと。

もつとも、商社など事務系のところではこんな話は無縁のようであるが、技術系で高度の専門技術と英語の両立した技術屋なんてそうそういるものではない。通訳の両を買ってでも技術の確かな方が有難いのは当然。

アメリカ運輸省で延々と会議が続く、昼前に終わる予定が、とても終わりそうにない。

幹事役が地下のカフェテリアからサンドイッチを買ってくるから、希望の種類を言えとメモをとりだす。

「チーズエッグ」

「ツナ」

「ハム」

「デイトー」

「デイトー」

会議に参加していた『英語の上手い』日本人の番だ。

「デイトーとはどんなサンドイッチか？」

と聞いたから途端に全員爆笑、拍手までおこつた。

「デイトー」とは「前に同じ」「同上」という意味。

以後、彼は「ミスターデイトー」と呼ばれ、一躍人気者になった。こうなると現金なもので、次も彼でよさそう

だ。

## 日本語イマージョン教育について

大平 忠

アメリカ、オレゴン州ポートランド市の公立高校で、私の娘は日本語イマージョン教育の教師をしている。私は迂闊な父親で、娘が日本語を高校で教えているとは知っていたが、イマージョン教育と名のついたやり方を教えていて、単に日本語を教えるだけではないことを、つい最近まで知らなかった。

娘の教えている内容を聞くと、日本とアメリカとの係わり合いの歴史と、日本文化全般についてである。ペリーの来航から始まり、日系移民の歴史、第二次世界大戦、日系アメリカ人収容所、戦後の占領から今日の復興まで、娘なりに工夫して教えている。日本については、家庭での暮らしぶりから近所づきあいなど、古くは『サエさん』、新しいのでは『ちびまる子』の漫画を使ったりして紹介している。日本人のものの考え方や習性まで分ってもらいたいが、そこまでは難しいと言っていた。

私が感心したのは、このイマージョン教育の目的が、第二外国語の徹底的習得に加えて、異文化に対する寛容度を持った人間をつくることにあると知ったときである。そこで、イマージョン教育についての娘の話聞いた。

イマージョン教育なるものは、一九六五年にカナダのケベック州で始まったという。フランス語を教えるのに、幼稚園、小学校から、普通科目を英語ではなくフランス語で教え、これを中学、高校と続けていく教育法で、学ぼうとする言葉で学習生活を浸して（イマージ）しまおうというところからイマージョン教育と名づけられた。

アメリカでは七十年代から取り入れられ、日本語については、一九八八年にアラスカ州、翌年オレゴン州ポートランド市でも、リッチモンド小学校に教室が開設され、やがて中学校、高校と教室が誕生した。生徒は、小学校で全教科の五十%、中学校で三十%、高校では約十四%を日本語で学ぶ。娘の勤めるグラント高校では、二〇〇二年六月、小学校入学以来日本語イマージョン教育で学んだ初めての卒業生十八名を送り出した。二〇〇七年の卒業生は二十七名。卒業式にはポートラン

下日本総領事も招待され、小学校、中学校の先生、保護者と、卒業生をはるかに上回る来賓の数だったという。

ポートランド市では、メキシコ系の人々の割合が多く、それも年々増えているため、日本語よりも早く、スペイン語のコースが先ず設置された。

日本語との取組みは、八十年代、日本が経済的に興隆し、ポートランド近郊にも、日系企業の工場が次々作られるという時代環境から生まれたらしい。しかし、日本経済もバブルがはじけて、日系企業の工場も撤退し、日本の存在感が総じて落ちていく傾向に、一時期、娘は心配したそうである。そこへ登場してきたのが、日本の漫画、アニメーションで、今度は子供たちの関心が深まり、日本語を学びたいという風潮を高めてくれたという。

いま、アメリカ全州でどれだけ日本語イマージョン教育が実施されているのか、正確には把握できていない。一昨年、お互い分っている六州七コースの代表が集まって会合が開かれ、娘も出席した。娘の話では、この会議で話された一番の問題は、イマージョン教育をできる相応しい教師を見つけれない現状である。イマージョン

教育の教師は、アメリカ定住の日本人か（国籍は日米どちらにしても）、日本人と同じように日本を理解しているアメリカ人で、教師の資格を持つていることが必要である。そういう人が減多に見つからない。第二の問題も深刻である。教科書というものが無いので、教科内容も自分で考え、乏しい予算で資料を集めて教材を作らねばならない。そのため時間外の仕事が増え教師の負担が大きき、疲労で辞める人が出てくるという。高校在学中に生徒たちを日本に連れて行ってやりたいが、到底それも叶わないと、悩みの深い結論で終わったという。

せつかく、日米間にとつて将来よかれという制度がアメリカにありながら、十分に生かされていない実状は、たいへん残念だ。最近、アメリカは中国を意識し、国防の観点からも連邦政府予算を大きく投入して、中国語イマージョン教育を全米各地で開始した。

娘のことはさておいても、日本の中で、アメリカにおける日本語イマージョン教育の存在をPRし、これの発展を官民あげてもっとバックアップできないものか、何か智慧はないかと考えているところである。

## 私にとっての異文化

大野 ただし

十月十日（平成十九年）から上野の東京国立博物館で開催されている「大徳川展」を見る機会があった。

偶々日曜日だったせいも超満員の盛況で、それも朝十時を少し過ぎた時間である。ここに今来ている人たちは、恐らく家を九時前には出ているはずであり、休日というのに七時前に起きている、と考えると、一体なぜ「大徳川展」はこんなに人気があるのか、と考えさせられた。

最近になって「江戸しぐさ」が見直され、江戸を舞台にした北原亜以子や宮部みゆきの小説がロングセラーを続けている。

明治維新によって全面否定されたはずの徳川というか江戸の文化が見直されている。私たちはそのことを全く見過ごしているが、敗戦後、ただちに武器を捨て平和国家を叫んで、何の違和感もなかった一般庶民の心の中には、徳川三百年の平和な時代の遺伝子が刷り込まれてい

たのではなからうか。

江戸時代の三百年の平和は、恐らく世界のどこの国にもない平和の最長記録であろう。その泰平が、私に言われれば、黒船でなく、後醍醐天皇以来の天皇親政の形で破られたのが明治維新である。これはフランス革命と並ぶ人類歴史上の最大愚行の一つである。

フランス革命については、革命二百年を記念した一九八九年のアルシユ・サミットに、サッチャー英国首相がフランスのミッテラン大統領への引出物として、チャールズ・ディッケンズの『二都物語』の初版本を贈ったことに象徴されるように、欧州では、フランス革命全面否定の風潮が主流となっている。それを歴史上で証明しているのが、同じ八九年に起こったソ連・東欧の崩壊、つまりフランス革命の鬼子といえるマルクス・レーニン主義国家の否定であった。

わが国の明治維新は過去を否定するあまり、大きな歪を残した。特に私のような理科系の学生は、自分が今学んでいる学問を育てた土壌を日本の中に見いだすことが難しかった。

私がハイデルベルクのお城に登ろうとして、道端にブ  
ンゼン教授の銅像を見つけたときの感激は、終生忘れえ  
ぬものとなっている。化学の実験でブンゼン・バーナーに  
いつもお世話になっていた。私の大学で学んだ事柄は、  
ここドイツに故郷があったのだ、という感激であった。

ここまで書けばお分かり頂けると思うが、一体異文化  
とは、というターミノロジーで、私は考え込んでしま  
う。何故なら「一体日本の文化とは何なのですか」とい  
う問いがまず私にはあるからだ。

明治維新と敗戦後の中国との没交渉の時期が、我々  
の歴史観、或いは文化に対する見方に与えた影響は大き  
く、何か大きな断層を作っているように思えてならない。  
日本固有の文化は、元来が中国の文字を入れるところ  
から出発している。私の世代は、その漢文を、国粹思想  
を鼓舞するものとして、習うことができなかった。漢文  
が正しく読めなければ、江戸以前の、いや明治の文献す  
らも理解できない。『米欧回覧実記』を現代語訳するな  
どということんでもないことが行われている。

日本固有のアイデンティティは、明治維新と敗戦に

よってずたずたにされた、と思っている。

だから私個人を例にして考えると、少なくとも西歐文  
化は異文化とはいえない。

私はあえて欧米とは言わない。米国では西歐文化の土  
壤の中から、一種の物質文明を生み出している。一口に  
いうと広告という手法である。金という手段で、あらゆる  
言論をコントロール、いや金縛りにするシステムだ。

「使い捨て」や生産者側の意向で経済をコントロール  
できるのも、広告あればこそである。わが国も今やどっ  
ぷりとこの米国文明に浸かっている。

しかし、私のような旧式の人間には、やはり西歐文化  
の方が親しみ易い。昨今西欧では、スーパーに買物袋を  
持参するようになった。戦前の日本に近く、江戸時代の  
「循環型社会」を理想としているのではないか、とさえ  
思われる。

つまり私にとっては、欧米の米が異文化であり、戦後  
のアメリカナイズされた日本も異文化圏ということにな  
るかもしれない。この異文化圏との付き合い方は近親憎  
悪もあってなかなか難しい。

## 逆異文化との遭遇

佐久間 直正

今週（平成十九年十一月）の話題の一つに、日本のレストラン、料理屋が初めてミシエランから三つ星や二つ星を貰ったというのがあった。そこから困っていたこの作文のテーマを思いついた次第。ロサンジェルスでクルーズ会社の会長をしていた時のお話です。このクルーズ業界にも世界で百五十隻以上運航されている船のサービスを格付けする会社があるわけであり、これで高い評価を得るために各社は努力するわけです。私のいた会社でもそのために、S I X・S T A R委員会なるものを設けて、どの航路がお客の評価を得るか、乗船地、飛行場での出迎えは更に改善の余地があるかなど、いろいろな知恵を絞っていました。私の在任期間の大部分は米国の好景気に恵まれて、毎年の業績は、ほぼお堀端の御本社が満足するものでしたので、会長さんは暇でした。という訳でこの暇な会長に何か喋らせろと言う事になり、困った

私は地球の裏側を知らない彼らに、日本のサラリーマンの一年を語って、少し異文化に遭遇させてやろうと思っただ事があります。

大分前置きが長くなりましたが、要するに私の意図は、「外国に出掛けて、明治以来驚き続けている我々が、偶には米国の田舎ものにも、違う世界を見せてやろう」という事でした。今思うとその動機は、一年中晴れ渡った空の下で、傘も持たずに暮らしている彼らに、春夏秋冬を何時も意識して生きている日本の暮らしを少し教えたかったのかと思います。

日本の会社の一年は四月一日に始まります。驚くなかれ、日本では新入社員は全員この四月一日に全国の大学を卒業して集まってくるのです。今年見た日本の新聞に依ると、最大の入社式には七千人が来たそうです。と言って、米人社員約百人の顔を見ました。予め話の途中でも、質問を許すと言っていましたので、忽ち大騒ぎです。そんな大勢を何処に集めるのだ、如何して急にそんなに社員が不足したのかと、まるで日本人経営者は馬鹿

ではないかと言わんばかりです。こちらはあまり説明する気がないので、自然に彼ら同士の議論が白熱していく。

このクルーズ会社には約二百人の従業員がいたが、始終出入りがあり、到底若い人の名前などは覚えられない。大体あるポジションが空くと、PCで社内応募を呼びかけるが、その内誰かが自分の友達を連れてくることが多い。従って気が付くとあるセクションにやたらホモが集まる事になる。

やっと静かになったので、東京オリンピック以前に私が入社した時の御本社では、入社の際にその日に、四月分の給料をくれたと、軽く触れた。案の定途端に大騒ぎとなった。何故働いてもいない内に、給料を払うのか、貰ってすぐに止めたら如何するのだと、心配してくれる。そこで一言申し上げる。春に小作人を雇って、秋の収穫で、彼らの取り分をやると言ったらどうなるか。どうやって秋まで食いつなぐのか。大体諸氏は、ルンペンプロレタリアートなる言葉を知っているか。（こんなことを知っている者がうちの会社にいる筈がない）大学を

出ても我々は何も持っていない。生産手段も、資本も、明日の食費も。これがルンペンである。だから前払いは必要であった。（本当は戦後のインフレに依る生活費への圧迫を少しでも和らげるためであったそうな）

入社するとすぐに花見となる。新入社員の腕の見せ所は、良い場所を確保して、上司の方々をお迎えする事である。日本の桜見物は聞いた事があるが、何でそんな事をするのか。大体それは仕事なのかと、これもまた煩い。仕方がないから、これは日本の伝統で、会社の後輩がやることになっていると申し上げた。ご存知の方も多いと思うが、シヨーン・コネリーの出た映画で、ロスの刑事である彼がやたら先輩・後輩と日本語という場面がある。

これを知っていた者が何人か居て、これらが私に代わって、説明してくれる。私はコーヒーを飲んで聞いていればよい。この私の作戦は大いに当たって、ほとんど彼ら同士で議論しあっている。従って一時間半も掛かって、四月も中旬にしかならない。大成功と思っていたら、面白いから、暫く毎週一回昼休みに話してくれと言うことになり、結局都合六回もこんな話をさせられた。

## 慣れ親しんできた英語

莊 司 忠 志

### 「To stay or to go」

ニューヨークの町で孫二人をつれてマクドナルドに入り、食べ物を注文すると、売り子からまず訊かれるのはこの言葉である。「To stay」なら食べ物をお盆に載せてくれるし、「To go」なら紙袋に入れてくれる。要するに注文する食べ物を、店の中で食べるのか、外に持ってゆくのかと訊かれているのだ。簡潔でアメリカらしい表現だと感心する。

長らく外国に住んでいるので、時に日本の知人から英語はペラペラでしょうねといわれる。ペラペラとはどの程度のことなのか、軽薄な言い方だと思う。大学の同級生で英語を専攻したK君は、卒業後すぐに国連に職を得て、日本語・英語の同時通訳の修行をし、その後日本での同時通訳の第一人者といわれていた。同じように英語を専攻したA君は、コロンビア大学で国際政治学を学

び、博士号を取得、日本の大学で教えていたが、一方、ニューズウィーク誌の日本語版編集長としても働いた。二人の英語はおそらく、富士登山にたとえれば頂上に達したのだろうし、私の英語はせいぜい五合目位だろうと思う。もっとも私の英語が進歩しないのは、専攻したのがインドネシア語・マレーシア語だったし、英語ではなかったからと自分を慰めているが。

アメリカ英語で、今でも慣れないのは、留守電に録音された電話番号で、二、三度聞き直しても聞き取れないことがあり、そうなるど電話の返事もできない。テレビの英語は最初はいちいち頭の中で日本語に翻訳して理解していたが、最近ようやく、英語のままです、八割理解できるようになった。新聞や読みものは自分のペースで読めるし、わからない単語は辞書も引かず飛ばして読む。どうせ辞書を引いてもすぐに忘れてしまうのだ。

### 「Great, Absolutely, Wonderful, Gorgeous, Tons of Cereal」

華人シンガポリアンの友人一家がニューヨークに引越してきて、五歳の長男を近所の幼稚園に入れた。す



ると四、五ヵ月もしないうちにその子がシンガポール英語ではないアメリカ英語を真似るようになり、やたらに「Great, Absolutely, Wonderful」などを頻繁に使うようになった。後にシンガポールに帰った友人に訊くと、男の子はシンガポールに帰るとやがて昔のシンガポール英語に戻り、このようなアメリカ英語を頻繁に使うことをやめ、もともとのシングリッッシュに戻つたらしい。

二人の孫はこれまで長い間何人かのベビーシッターやメイドの世話になつて成長してきた。ベビーシッターやメイドのほとんどは不法移民であり、不法滞在者である。彼女たちの多くは、南米、中南米、カリブ海の島々からの女性である。スペイン語やポルトガル語を母国語とする女性たちは、涙ぐましい努力をして英語の勉強をする。ジャマイカ、セントルチア、トリニダッドトバゴはもともと英語圏だし、英語は母国語なので問題はない。南米ガイアナからの小母さんは英国式のきれいな英語を話した。彼女たちは自分たちが不法滞在者であることを隠しだてはしないが、何とかしてアメリカを出国しない努力をする。一度出国すると再入国は至難の業である。中には、旧東ヨ

ロッパのハンガリー、ブルガリア、チェコからの女性もいた。彼女たちはいつも電子辞書を手にしていた。

ロンドンのピカデリーサーカスの夕暮れ時、散歩していると、懐かしい故郷の言葉のような話し声が聞こえてくることがある。大学四年生の夏、四ヶ月ほどインドネシアを中心に東南アジアを研修旅行した。最初に寄つたのがシンガポールであり、卒業してサラリーマンになり、二度にわたり合計十年も家族と住んだ。あるパーティーで華人女性から、「貴方はシングリッッシュが上手ですね」といわれたことがあった。インテリのようなその女性は私のシングリッッシュを褒めたのか、揶揄したのか。シンガポール人の話す英語は、華人の場合でも香港人のそれとはだいぶ違うように聞こえる。私はシンガポールも、シンガポール英語、すなわちシングリッッシュが大好きである。ギリシャで十一年、シンガポール十年、その上現在のアメリカでの生活は既に十二年、英語を中心の生活も長くなったが、若い時のシングリッシが血となり肉となつたので、今でもアメリカ英語は慣れないし難しい。

## カルチャーショック

杉浦 右藏

英語のカルチャー (culture) を文化と訳します。原義は「土地を耕す」cultivate に由来しています。文化とは、広辞苑などで調べてみると、人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住・技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治などの生活形成の様式と内容を指すようです。また文化は文化遺産、文化勲章、文化功労者、文化国家、文化祭、文化財、文化生活、文化庁、文化の日など熟語として多用されています。

### 日本文化の歴史的構造

日本は長らく鎖国政策を表面的に取っていたので、国民全体が異文化と交流することが少なかった。ところが幕末に黒船が訪れるようになってカルチャーショックを実感する事態と相成った。明治政府の形態が固まって、日清・日露戦争にかるうじて勝つてから軍部のバブルが

膨張拡大し、第二次大戦で百年のバブルが崩壊し、再出発して六十年が経過した。異文化との交流は異国に住んでみないと本当の差は分らないと思う。

### 日本文化の官僚構造

日本の高級官僚は、国家上級試験に合格し、配属場所が決まってから間もなく外国留学をさせてもらう。帰国してからは、エレベーターコースで昇進する。その方々が国の基幹政策を策定し国の進路を決めている。そのキャリアヤーの方々にも採用の成績などで人生一生の進路が定められている。米英留学のエリート上組と、地域留学のエリート下組に分けられ、退官するまで運の枠から逸脱できない。申し上げたいのは、異文化との交流体験の乏しいエリート上組の権限は絶大で、エリート下組の経験は取り入れられ難い弊害が付き纏っている事です。もう一つの弊害は、上級試験に合格して退官するまでの人事構造が、ピラミッド式になっていることから、同期生で選ばれた方が昇進する度に必要とするポストが少なくなるのでポスト不足の人達がハジキ出される仕組みである。その受け皿が上手く用意されていないから、天下

りの現象が生じる。そこで官業癒着も発生する。異文化との交流のはなし

私の最初の外国はイランでした。日本しか知らない私にとって何と慣習が違うものかと驚きました。その後、タイ、シンガポール、インドネシア、ベトナム、フィリピンなどを体験しましたが、最初のイランの驚きを中心として、日本との違いのいくつかを紹介します。

### 商売の考え方

日本では、沢山買えば安くしてくれる。イランでは、沢山買うほど高くなる。理由は、この品物が気に入った人だから高くしても買ってくれる。野菜果物店で、最初は新鮮な物を選んでくれる。何回か行くと腐りかけを選んでくれる。理由は、うちの店が気に入ってきてくれる人だから、うちが困っている品物を買ってくれて当然だ。

### トイレ

イランでは、男もシャガンデ小便をする。イランの家庭など、立ち便器が無い。日本でもイラン大使館に度々伺うが、立ち便器が無い。小便がこぼれていて掃除する人が気の毒に思う。以前、中国北京で最新の地下鉄に乗っ

た折、駅で小便に立ち寄ったときの驚き、女性のトイレには扉が無くて通路向きにシャガンデいた。男は通路と反対に壁を向いて用をたす。今は改善したか知らない。

### お米の焚き方

日本の焚き方は「始めチロチロ、中パッパ、赤子泣いてもフタとるな」ですが、イラン料理店で見ただ焚き方は、日本と全く反対だ。米を茹でる表現が当たっている。

### 食べ物

イランに行く前、五人の将来のカウンターパートになる方々の日本研修の間、NIT三鷹通研で六ヶ月、昼食の面倒をみた経験がある。一週間分のメニューを五人と協議し、会社の食堂長と打合せをするが、JICAの支給額に制約があり苦労をした。結論は、豚ナシ、骨アリ、でよい。タコ、イカ、エビ、カニ、など骨ナシは駄目だ。

### お折り

研究室でも時間が来ると新聞紙を床に敷いて、正確にお祈りすることに驚いた。外国に居てもサボらない。イランに行つてから小物店をよくみたら、額をつける素焼きの焼き物が五円くらいで売っていることがわかった。

## 放談―異文化との交流

関谷 裕彦

日本人は世界の中の異端児である。この原因について考えてみた。

世界中に日本人の宗教観についての誤解がある。神がかり。おどろおどろしく不気味な異教の徒。これが靖国神社参拝反対問題につながる。

日本は元来多神教であった。そのへんエジプトに近い。彼の国は三千年続き、当方も二千年を超す歴史を有する。

エジプトの神は六十を超え細分すれば四百余神。日本は俗にいう八百万神だ。多神教は恵まれた気象条件の地に育つ。大体世界の主要宗教（一神教）はすべて酷暑の地に生じている。人間は寒ければ着ればよい。暑いのは裸になっても暑い。逃げ場がないから人間以外の何かに救いを求めようとする。エジプトが多神教なのもナイルの恵みのおかげだ。日本では、仏教渡来時ほどに近く

世では神仏混交。神棚の隣室に仏壇があり、クリスマスを平気で祝う国である。宗教心の薄い日本人はその意味で宗教心の厚い外国人との付き合いがむずかしい。宗教家は、とかく無宗教者を下手に見る。日本人はもつと真の神道を研究すべきだし、その良さを世界に伝えることよって世界は日本を見直すだろう。そのへんの啓蒙宣伝が決定的に不足している。

世界で英語を話せない順位で日本人は北鮮人と並んで最低レベルだという。さらに妙な現象が出てきた。最近の若者は、しゃべれなくせに、不遜にも、「いまさら英語なんて」と一段下にみる傾向がある。英語が世界共通語である事実の認識がない。昔我々の時代には常時百名を割ることの無かった母校のESS（英語研究会）の現在の部員数は二十名、それもさらに減る傾向にあるという。困ったことだ。

外国人はよく議論、討論する。これは欧米人もアフリカ人も変わりはない。日本人以外のアジア人も同じである。食事の際のケースが特に目立つ。日本人は和食の作法かもしれないが、黙々と食べる。イギリス人やオラン

夕人ならこちらの面子も考えて露骨な批判は控えるが、例えば、アフリカ人は、喋れぬ人間を露骨に軽蔑する。雄弁家でなければ指導者になれない。高度の技術をもちながら英語が出来ないばかりに、現地スタッフの反乱で、せっかく駐在したのにお役御免になるケースが、ある時期のアフリカ現地会社、駐在事務所で続発した。

日本人は、議論討論抜きで、とにかく早く物事をまとめようとする。初めに結論ありきである。これでは外国人と付き合えない。「和をもって貴しと為す」などもっともらしい顔をして、聖徳太子こそいい面の皮だ。

日本人の閉鎖性については、当然のように、徳川幕府が取った鎖国政策が祖上に上る。勿論鎖国の弊害は多々ある。一家の政権維持の為に、他国との交流を三世紀以上にわたって閉じ、世界の進歩に乗り遅れた責任は無視できないが、鎖国とはいえ徳川幕府の重臣達はオランダから世界の情報は取り寄せていた。江戸期の長所は朱子学ベースの道徳教育だろう。これが各階層に浸透し、独特の江戸文化を形成した。幕末、維新初期に海外留学した日本の青年達は謙虚に西欧文明を学びマナーも良く、

東海の君主国の評判を高からしめた。

最近パソコン、携帯流行りで表面極めて進歩的なようだが、対人関係は劣化の一途だ。会社での付き合いもない。社内旅行にも行かない。一見無駄の様にみえたアフターオフィスの付き合いなどは全く無視である。かなり以前からこの異常な状況については警告して来たが予想もしなかった現象が出て来た。一流大学を出て颯爽と就職したエリート社員が、用事で外出のさい自分の行く先と帰る道が分らなくなってしまう。まさに昔の言い伝えの殿様蛙じゃないが「私のご用は何だっけ？」だ。

現在の日本人は恥を忘れ、他人への思いやりを無くし、ばれなければなにをやってもよい、という無法社会になった。これにはテレビを先がけに無責任なマスコミの責任が大きい。怪しげな偽装が良心のとがめなく行われ、信じられないような事件が続々と発生した。異文化摂取どころか日本文化そのものが危機にひんしているのだ。個人個人が、さして調べもせずに口車に乗る傾向、いや世の動きにひたすら乗り遅れまいとする風潮が、日本を世界の孤児にしてしまう。悲しく恐ろしいことである。

## 異文化との接触

中村 將まさ陸みち

個人的なことですが入社後設計部門に配属された私は、いきなり会社が出した機器の技術説明を来日した顧客の研修生に行う仕事を担当させられました。その時は、ただ社命に従って黙々と職務を遂行していました。

しかし、このときの経験が社内の人事ファイルにしっかりと記録されてしまったため、気がつきましたら輸出部門に配転させられていました。結局は定年を迎えるまでに毎年四、五回の海外出張を繰り返し、三カ国の駐在も命ぜられました。現役生活では、外人との接触が当たり前になっていたせいか、改めて「異文化との接触」といわれても、特別な感慨はありませんでした。

ただ海外へ出張したり、滞在したりを繰り返しているだけ、それだけで異文化が体験できるという単純なものではなく、それなりのしきたりがあることに気づきました。それは一九七〇年代前半の駆け出しころに、ス

ウェーデンに出張したことがきっかけでした。若い私にとってスウェーデンは、豊かで、平和で、美しい、あごが夜の十一時頃でしたので、通貨の両替窓口は閉ざされていました。仕方なくリムジンバスに乗り込んでドル紙幣を出したところ、英語のできない運転手は、かたくなに現地通貨・クローナで支払うよう求めてきました。妥協しない運転手に困惑していた私を見て、一人の紳士が進み出て現地通貨で料金を支払ってくれました。お礼を言った後、紳士にドル紙幣を受け取ってくれるようお願いしましたが、軽く会釈するだけで受け取ってくれませんでした。入国のとたんにこのような親切に出会って、ますますこの国が好きになりました。

翌日、訪問企業のアポイントの合間に街を見る機会があり、私が予期しなかった様々な事柄に出くわしました。アルコールの匂いがする貧しい身なりのホームレスまがいの初老の男性何人かにトラムで乗り合わせました。また、酔って訳もなく大声で怒鳴っているアル中の若者も見ました。膨大な人口の集積である国を単位と

してみた場合、欠点のないことはありえないと、ごく当然のことに気づかされました。しかし、ストックホルムを発つまでに、多くの人々から数々の親切を受けたことで私のこの国に対する尊敬の念は、今も変わっていません。自分の国を振り返るまでもなく、どんな国にも長所と欠点のあることは当然だと教えられた旅でした。

そのとき以来私は訪問するあらゆる国で、その国の優れた面に目を向けるようになりました。低開発国へ出張する場合も、発展段階が低いという、相手を見下げた考えは抱かないようにしました。途上国でも、優れた文化遺産のある国については、それを築いた人々に思いを馳せ尊敬の念をかみしめつつ、長い歴史の消長の中で、現在たまたま苦境に陥っているだけだと解釈することになりました。

最初、「異文化との接触」を聞いて、トインビーの「挑戦と応戦」が頭をよぎりました。文明は他文明から挑戦を受け、これに応戦する過程で、発展を遂げるものだという偉大な歴史家の学説に感激したものです。このことは個人にも当てはまります。「異文化との接触」の

主体である私自身が、ネガティブな考えを持って外国を訪れると、その国から何も学ばなくなり、その時点で個人としての進歩が止まってしまうからです。

現役時代は、社用の出張や滞在で訪問先も仕事優先でした。数々の名画を誇る美術館や、世界遺産を訪ねたことはありますが、仕事の合間では時間が足りず、何時も多少のフラストレーションを感じていました。私は定年退職後、夫婦で年に一、二回の海外旅行を楽しんでいます。束縛を受けることが少ない定年後の海外旅行は、気分的にもゆとりがあり、今まで足を運ぶことが少なかった世界遺産や、美術館など十分に鑑賞できる点が気に入っています。

今後とも、妻と私の健康が許す限り、海外旅行を通じて積極的に「異文化との接触」をはかり「異文化」から多くのことを学び、アンチ・エイジングの糧にしていきたいと思っています。

## スピードガン

高橋 孝藏

キッシンジャー米国国務長官のデタント外交が功を奏し、ソ連が米国との緊張緩和の方向に動いていた頃の話である。当時私は商社のモスクワ駐在員だった。

一九七五年の初秋、或る産業見本市で、米国の輸業者に頼まれ、出品物の米国製スピードガン三台を販売した。買付公団の説明によれば、自動車の速度測定するのに使う。テストして良ければ、大量契約するという。

見本市閉幕の翌朝、通勤の途次、警官に突然車を止められた。スピード違反だという。しかし、彼らが手にしている小型のバズーカ砲にも似たスピードガンを見て、思わず笑ってしまった。してやったりと云わんばかりの警官に、云ってやったものだ。「俺が売ったもので、俺をとっ捕まえるなよ」。テスト初日の最初のお客の一人が、皮肉にもこれを買った張本人の私だったわけだ。

かくして、実地テストに合格し、程なく大量の台数を契約した。早速、公団とエンドユーザーである交通警察のお偉方を招き、パーティを開くことになった。ソ連では、パーティは契約発効の条件のようなものだ。例の如く、日ソ友好、ソ連共産党書記長と日本首相の健康、お互いの幸せなど、ありとあらゆることがウオッカ乾杯の口実となった。口実がなくなれば、パーティはお開きである。締めくくりのスピーチは交通警察のトップである。「本日は非常に楽しかった。ささやかなお礼をした」とて、私の運転免許証を見せろと云う。交通違反のパンチの入った免許証をオズオズと差し出すと、何やら書き込んでいる。「このパンチは間違いである。署名何某」。驚く私を尻目に、更に肩を叩いて「もうこれで、今後は一切交通違反はないよ」と破顔一笑、彼の部下もそれにつられ、大笑いし、宴は終わった。

私は程なく、この言葉の意味を知ることになった。

自宅からの通勤路にレニングラード大通りがある。確か、片道三車線か四車線あり、更に真ん中にセンター



レーンのあるハイウエーである。このセンターレーンはごく限られた政府要人用の特権階級道路である。重厚な感じのする黒塗りの大型高級車ジルがセンターレーンを突進してくると、交差点の警官は慌てて、信号を青にする。クレムリンまで一回もブレーキを踏ませないようにしなければならない。

「ジル」様がお通りにならない時は、このセンターレーンをときたま使わせていただいたものだ。特に会社遅れそうになったとき、どの車にも邪魔されず、センターレーンを通った。しかし、運の悪いときは警官に捕まる。警官は私の差し出す運転免許証には目もくれず、ナンバープレートを見やっていた。「行つていいよ」という。判然としない面もちの私に一言付け加えた。「毎日のように、こんなことをして貰つては困るのです。お偉方への報告義務があるのです」。あなた方のことは完全に見張つているよと聞こえた。パーティの席でのお偉方の言葉や彼らの大笑がやつと理解できた。

その後、スピードガンは悲劇的エピソードで終わっ

た。

数ヶ月が経ち、米国の業者が追加受注をとるよう催促してきた。ロシア人の部下に公団のアポイントを取るよう命じた。しかし、一向に動く気配がない。何故だと難詰したところ、しぶしぶ、予想外の報告を受けることになった。同時に、絶対に口外しないことを誓わされた。

「拙いことになりました。悪戯つ気を起こした警官があらうことか、ジルにスピードガンを向けたのです。護衛が武器を向けられたと勘違いし、警官を射殺しました。お気づきかと思いますが、市内ではもう一台も使われていません。今後輸入される可能性は全くないでしょう」。

さて、国民が監視され、一方、支配階級があらゆる特権を享受する仕組みの全体主義国家は今でも存在する。北朝鮮、ミャンマーなどがそうだ。

彼らとどうつき合うか。こうした体制が永遠に続くわけではない。しかし、ソ連、東欧のように国民が立ち上がり、内部崩壊するまで、長い辛抱強い付き合いを要求される。

## 中国―異文化の旅

垂水 健一

外国で生活すれば、毎日が異文化との接触である。私は十年近く中国で暮らした。よく日本と中国は「同文同種」の身近な国のように考えられている。そうだろうか。

中国の机とベッドの生活は相当の歴史がある。その差は同文同種の親しみを超えている。中国人の生活は日本などより遥かに中央アジアやヨーロッパの影響が強いのではないかと思う。中国の文化が漢文や漢詩の上に築かれたと思いがちだった私に中国での生活は、日々異文化を意識する生活だった。そこに日本の影は薄かった。中国の広大さ、多くの少数民族がその思いに拍車をかけた。

中国には五十六の民族がいる。このうち漢民族は九割を超えるが、それでも一億人以上の少数民族がいる。

中国にいたる間に、私の勤めていた新聞社がサンデー版で「国境を行く」というシリーズを連載することになった。中国は取材の手続きが難しく、日本での準備に時間

がかかるので、私が準備して、日本から来たカメラマンと同行取材することにした。それはまさに中国という異文化の坩堝を行く旅だった。

一九八六年の春から、仕事の合間を縫って、二年間に回った国境は八カ所に上った。国境周辺は少数民族が多く住んでいる。「多民族国家」を肌と感じた。北は朝鮮族やモンゴル族、東は中央アジア系の人たち。南に行けば東南アジア系の人たちがいた。

最初の旅は開通して間もないパキスタンとの国境、標高四七三三メートルの残雪の残るクンジュラブ峠だった。山の美しさよりも心に残ったのは、新疆ウイグル自治区のウルムチから峠への途中で一泊したタシクルガンという小さな町での出来事だった。

山小屋風のホテルで、長い三つ編みに赤いサロンエプロンのような衣装のお嬢さんが、魔法瓶を一人一本あて提げてきた。「これが今夜のお風呂です」という。水も少ないこの地方ではこれが精一杯のもてなしなのだろう。ここでは風呂に入る風習はないという。パミール高原で見かける陽気に踊る女性たちのあの長い髪はどこ

で、どうして洗うのだろうか」と気になった。

北朝鮮と中国国境に足を運んだことも。延吉という延辺朝鮮族自治州の街を基地に取材したが、案内をした自治州の担当者は慎重な人で、北朝鮮との国境の図們江のほとりに連れて行ってくれはしたが、対岸の写真は撮ってはいけないという。黙ってそれに従うわけにはゆかない。到着の翌日が日曜日だったので、散策するような格好で川の堤に近づくと、思いもよらない光景が飛び込んできた。チマ、チヨゴリの女性が聞き覚えのある「アリラン」や「トラジ」の音楽に合わせて、楽しそうに輪をつくり踊っていた。図們江の沿岸は北朝鮮から逃げて来た人たちの多いところ。もっと暗い雰囲気を想像していたが、思い切り明るい朝鮮族の表情に驚いた。中国で朝鮮族の姿をみるという、得がたい異文化との接触だった。

南へ。雲南省とビルマ（ミャンマー）、ラオスとの国境を目指したこともある。「これ以上はだめ」といわれたシーサンパンナ自治州の奥深くには、木製の手形で国境の往来自由のラオスの商人と中国の商人が店を出す市場があった。食料品や衣服などを売っている。買い物客

は敷物の上に並べられた品物を時間をかけ、国境を越えて楽しそうに話しながら、品物を選んでいった。実に包容力のある国境の風景に圧倒された。

チベット自治区のラサヤシガツェという都会を経由して、五千メートル級の峠を越えてネパールに向かったこともある。周囲の山がすべて雪に覆われて真っ白。この世のものとは思えないような美しい世界は、北京では想像も出来なかった。

「国境を行く」の取材だけでなく、その後も中国の各地を回ったが、いつも去来するのは、こんなにも広大でさまざまな文化が織り交ざっている国を「中華人民共和国」という国名で一まとめにしてしまっているのかという思いと、そしてそれを「中国では」と書き出すことへの矛盾である。

中国では日本人が使う「文化」の意味を「文明」という。中国では異文化とはそれほど難しいものではなく、どれくらい文化が発達しているかの違いなのではないかと思つた。「文化」という文字を見るたび、中国の多彩な「文明」を思い起こす。

## 泰緬鉄道建設と異文化

玉山 和夫

日本が参戦した翌年に朝鮮半島出身の李さんは捕虜看視員として釜山の日本軍部隊で訓練をうけた。三ヶ月の訓練は歩兵の初期教育と全く同じで小銃の撃ち方は習ったが、文化の違いや捕虜取り扱いについての教育は無かった。

李さんは六人の仲間とともにタイ国西部の山奥のジャングルの中にある捕虜収容所の分所を担当させられた。そこに五百人の連合軍捕虜が連れてこられた。初めてみる捕虜は背が高く頑丈そうで、見るからに恐ろしかった。七人で五百人もの捕虜を管理するのは十七歳の若者にとつては不可能にも思えた。しかも捕虜は従順でなく反抗的でもあった。捕虜はシンガポールで降伏したのだが、捕虜であること自体に不満で日本軍のための鉄道建設に協力しようという気はなかった。捕虜の一人が反抗的な姿勢を示すと残りが付和雷同し收拾が付かなくなる

ので、看視員たちは何か反抗的な態度を取った捕虜が出たら、その捕虜を徹底的に痛めつけ見せしめとすることで反抗が広がるのを防いだ。監視員は釜山で訓練を受けたときは毎日のように殴られていたので、軍人を殴る事は当然とさえ思っていた。一方英人兵にとつては殴られることは屈辱であった。英軍では処罰のために殴る事は無く重労働を科すことが通常であった。

収容所には朝八時に日本軍鉄道隊から下士官が捕虜を受け取りに来て、鉄道隊が指揮して建設作業に使った。鉄道隊はビルマへの補給のために泰緬鉄道を一年で完成するよう厳命されていた。捕虜は積極的には働かなかつたので、そのうちに一日当たりのノルマを課しそれが出来る上がるまで収容所に返さない事にした。ノルマは日本兵の通常の作業量の半分以下で無理なものではなかった。しかし雨季に入ってもノルマの完遂が要求され、雨の中でもノルマが出来るまで働かされた。捕虜は良い軍服を各自一組は持っていたが之は夜寝るときに着るので、作業服はじきにぼろぼろになり多くが日本軍支給のふんどし一つで働いた。捕虜が持つてくる昼食は副食がないご飯

だけだった。副食用に河舟で野菜などを持ってきても三日はかかり熱帯のため腐って使えなかった。たまに泰産のオレンジが一人に半個配給されるのが唯一のビタミンCであった。夕食は米と小さい干魚二匹と少量の煮豆などであった。捕虜はパンや肉を食べたがり日本側も努力したが、泰国では小麦も牛肉も買い付けられなかった。

雨季になると河船の運航は流木が多く危険になり、建設のために急造した道路は舗装してなく泥沼のようになりトラックは難行して、食料を充分に運べなかった。

そのうちに上流でコレラが発生したので防疫に気を付けていたが、ある日川岸に荷卸作業に行った捕虜が激しい下痢で一晩で皺だらけになってしまった。怖れていたコレラだった。汚染していた生魚を食べたらしい。患者は少し離れた小屋に隔離したが、連日患者が発生し、連日三ないし五人が死んだ。捕虜の軍医の努力で何とか大蔓延を食い止めたが百名近くが墓地に埋葬された。他の収容所でもコレラの死者を出した所が多かった。

李さんのように不便な奥地に居たのとは異なり、補給が良かった平野部にいた捕虜は日本軍と同量の食事を

とっていたが一年で平均十四キロも痩せた。ここでの食事は捕虜取り扱いの国際条約に合致していたが、之も虐待とされた。米を主体とする食事が白人に適合しなかったのは、白人の腸の長さは日本人の三分の二なので吸収が悪いという生理的な理由かもしれないが、米文化とパン文化の違いとも言える。ジュネーブ条約は欧州国同志の戦争に対して作られたもので、白人が米食人種の捕虜になるなど考えていなかったに違いない。

鉄道は約一年で完成したが、作業に使われた約三万人の英国兵捕虜のうち六五四〇人が死亡した。オランダや豪州の捕虜を加えると鉄道建設での死者は一万二六二六名になった。栄養不良とコレラなどが主な死因であった。

戦後この苛酷な捕虜処遇の実情が判りマスコミにも広く取り上げられると、英国内でも日本兵は残酷だ、夫や息子が日本兵に虐待されて殺されたと激しい非難が巻き起こった。英軍はこの報復として、東南アジアに居た日本軍人と在留邦人の計七八万人を拘束し僅かの食料で一年以上強制的に労働させ、捕虜虐待の罪で鉄道隊員二名と捕虜収容所員・監視員四十三名を死刑にし、約千名を

懲役にしたが、この事を英国人は殆んど知らなかった。しかし英国に住んでいた邦人が嫌がらせを受けなかったのは紳士の国の文化で、反日デモが荒れた中国とは異なった。

李さんは英軍法廷では上官の日本軍中尉が責任を負ってくれたので無罪になったが、帰国の途中再逮捕されオランダ軍法廷で無期懲役となり巢鴨に収監され、十年後に仮釈放になったがまだ帰国出来ないでいる。

戦後しばらくしてから昭和天皇が英国を訪問された。バッキンガム宮殿での公式晩餐会のスピーチでエリザベス女王は「両国の間には困難な時期がありました」と水をむけられたが、天皇の答辞では之を無視して戦時の事は触れられなかった。英国民は第二次大戦の敵三首腦のうちヒットラーとムッソリーニは死んでおり、唯一生き残ったヒロヒトが来たからには、謝罪し許しを乞うものと期待していたのに、無視されたので折角の親善訪問が逆効果になった。伝統ある皇室では聖上陛下があやまることが多きとされたい。皇室のしきたりは多くの日本人にとっても異文化だった。

英国の捕虜団体は日本に高額の補償を要求する運動を始めたが、これに多くの英国人が理解を示した。日本政府は捕虜虐待などは日本的に考え「時がたてば恨みは水に流し忘れ去られる」と思っていたようだが、英人は恨みを忘れず、高校の教科書にも載り子孫に伝えられていたのは、文化の違いでもある。

元捕虜の補償要求に対して日本政府は講和条約で解決済みという態度だった。英国にあった日本の資産が没収され、それが補償として元捕虜に分配されていたが、一人当たりの額は当時の高校卒の月給一月分ほどで充分ではなかった。数年前英国政府が元捕虜に一人二万ポンドを払ったので不満が弱くなったが、まだ一部は日本政府の補償と謝罪を要求し続けている。

一方捕虜を労働させる場合にはジュネーブ条約では捕虜を管理している国が労賃を支払うべきで、日本軍も泰緬鉄道で働いた捕虜には日本の二等兵並の賃金を払っていた。それなのに、戦後不法に抑留され強制的に労働された日本兵が賃金の支払いを要求しなかったのはあきらかの日本文化であろうか。



**クワイ河に架かる橋**

1943年に建設された橋が今も使われている



**慰霊塔**

1944年 日本軍は、亡くなった連合軍捕虜とアジア人労働者の慰霊のため建立した。

写真:平尾富男撮影 2007年12月

## カルチャー・ショックよりイデオロギー・ショック

都 甲 昌 利

アンドレ・ジイドは一九三六年、ソ連を旅行し「ソビエト旅行記」のなかで「今日、いかなる国、たとえヒットラーのドイツにおいてすら、人間の精神がこのようにまで不自由でこのようにまで圧迫され、恐怖におびえ、従属されているだろうか」と書きソ連の内部を告発した。

それから三十年経た一九六七年に私はモスクワに赴任し四年間、ソ連体制のなかで暮らした。シベリア上空を飛ぶ東京―モスクワ航空路が開設され、最初の駐在員の一人として派遣されたためだ。

社会主義国で働くということは、どういふことなのか、生活に不安はないのか、前任者がいないので、事情を教えてくださいものもない、まあ何とかなるだろう、そんな思いで日本を発った。

その頃の日本は戦後の貧困から脱出し高度成長期のはじまりで自由経済、資本主義体制を国家の基盤としてい

た。言論の自由もあり、自分の好きな職業に就き、住みたいところに住めた。

赴任した年は革命五十周年ということで国家発揚の盛大なイベントが各地で行われていた。わずか五十年で資本主義の先進国アメリカと肩を並べるまで発展し、「アメリカに追いつけ追い越せ」というスローガンの下に社会主義の勝利を詠っていた。確かに人工衛星「スプートニク」を、また、ガガーリンを乗せた初の有人衛星をアメリカより先に打ち上げて社会主義国家に優位性を誇示していた。

赴任して先ずやることは、住居の確保、支店開設、現地従業員の採用などである。モスクワで外国人がアパートを探す場合どうしたらよいのか。契約は？賃料は？不動産屋はあるのか？受け入れ先のソ連民間航空省から「アパートの自由契約は出来ない。ソ連外務省の外人サービス局へ出向いて手続きをしない」と言われた。

この外人サービス局がすべて我々の出国、入国、住居、自動車の購入など、生活、仕事の面で全てを支配することが、だんだん分かってきた。体のいい奴隷か人質



である。外務省は官庁だから全て書類による申請が必要だ。

自由な営業活動は出来ない。本社から米ドルで振り込まれる資金は引き出すときはソ連ルーブルである。銀行はソ連国立銀行だけしかない。日本では預金があれば必ず利息が付くが、ここでは付かない。それどころか逆に保管料として手数料を取られるのだ。銀行に預ければ預けるほど損をしてしまうわけである。企業は全て国有で航空会社もアエロフロート一社のみ。国内航空は競争相手が無いので従業員は威張っている。お客様に乗っていただくのではなく、乗せてやるという態度である。お客は航空会社を選べない。

ロシア人スタッフを採用するにしても外人サービ局を通じて申請する。日本のように新聞広告を出すとか、派遣会社に求人募集を勝手にするわけにはいかない。英語のできる女性を希望したが、我々が選べるわけではなく、当局が派遣するスタッフを採用しなければならぬのである。

建前としては、ソ連には搾取をする資本家は存在せず、労働者と農民の国家ということになっている。しか

し、現実には共産党書記長を頂点とする一党独裁・全体主義・官僚国家ということが分かってきた。マルクス、レーニンが考えた国家とはこんな国ではなかったはずだ。この国家は七十三年経て一九九一年崩壊した。ペレストロイカ、グラスノスチで市場経済を導入して経済の活性化を図った。私は生まれ変わったロシアを一九九八年に訪問したが、三十年前と比べネオンが煌々と輝き明るく、ヨーロッパやアメリカなど西欧諸国の商店が並んで活気に溢れていた。街行く若い女性の服装は一見ロンドンやニューヨークと見紛うばかりだ。しかし、ソ連からロシアになった国の庶民の生活はそれほど豊かではないように見えた。崩壊直後の混乱でインフレが家計を襲い年金制度は共産党支配のときのほうが良かったという声も聞かれた。

世界最初の社会主義国家に短くとはいえ四年間住んだということとは得がたい経験であった。思うに人間が考え出すイデオロギーや政治国家体制などというものは所詮人民をすべて満足させるものではないことが分かっただけでなく貴重な体験であった。

## 異文化との接触

橋本 政彦

「異文化との接触」というテーマは、かなり重いトーンを感じます。少し大上段に振りかぶって話を進めたくりますが、時代は電話も「ケイタイ」が主流となり、「ウォークマン」もI・P・O・Dですから、幾分軽めの文体で作品を仕上げるのが無難かもしれません。重さは依然大きな役割を果たす不変の価値ではありますが、重さの活躍するフィールドが変わってきたということかもしれません。「重さ」から「軽さ」へは、恵まれた社会の受け取るギフトと言っても間違いではなさそうです。そこで、このテーマも出来るだけ軽めに仕上げることが出来れば満足というものです。

「日本の本当の順位」という本に、「自国民の誇り」についての二〇〇〇年の調査結果が載っています。日本人で、自国を誇りに思っている人の割合は五十四、二％で全調査対象国六十七ヶ国のうちで第五十七位。米国、英国

はそれぞれ九十四％、七十八％、お隣の韓国、中国でも七十八％ですから先進国の一員たる日本としては不思議な結果です。これはどういう理由なのか、ちょっと考えさせられます。国といえ、その自身はハードからソフトまで、多岐にわたります。おそらく、回答者のイメージの中には、国イコール、リーダーと短絡したのかしれません。とすれば、リーダーの価値観、手法に対する不満が含まれているでしょう。加えて、多様性をどちらかといえ受け付けずに二者択一的な発想を好む国民性、少数者の意見に無関心で冷たい社会環境や、目先の結果に一喜一憂する社会風潮などが、この結果の背景にあるのかもしれない。相変わらずの経済成長一本やりのリーダーの価値観は、旨くいけば国民に豊かさは保障出来ますが、幸せという心の領域を置き去りにしていますから、国民の期待とはかけ離れてその溝はますます深まる傾向があります。昨今の年金問題や国の負債に大きな関心と呼ぶのは、幸せが安心と結びついているからで、このことを立証しています。日本の向かうべき方向が無言の中に、ここに示されているようにも思われます。

人類は、苦難の歴史を歩み、長い年月をかけてより良き世界、すなわちいろんな文化が共存する世界を作り上げて来ました。これからも、この歩みは紆余曲折を経ながら継続することでしょう。多くの文化の並存、すなわち多様性こそを、人類は選択したのだと思われれます。

歴史家は、国家の興亡を書き残してきました。国家とは、その内部に光を当てれば文化、集団を代表したリーダーの興亡そのものでもあります。文化は、歴史的に形作られてきた言語や、宗教、風習、政治などで、人の顔かたち、それぞれ違うように文化にも違いがありますし、また似たような所もあります。今や、航空網やIT技術の発達で世界はネットワーク化し、多くの国の人達が結びついた世界へと変貌し、国際間の交流は活発化しています。二〇〇五年の日本から外国への旅行者は、約二千二百万人を数えていますし、世界の旅行者数も増え続けています。異文化と接触、交流する世界が当たり前前の時代となり、日本もその中の舵取りを余儀なくされています。「かわいい子には旅をさせろ」のチャレンジが、ますます重要性を増して来ました。異文化と、どう

付き合っていくのかという素養がなければ、世界で評価されない国家、人物になってしまいます。若いときから広い世界に触れて高い識見を育てる人材育成の環境整備が求められていると言えます。一九七四年初め、アジア諸国を訪問した田中首相はタイ、インドネシアで反日運動、反政府暴動に見舞われました。この教訓は、その後の一九七七年八月十八日の福田首相の「福田ドクトリン」すなわち「異文化との共生」にと発展し、異文化理解の重要性が示されました。

あれから三十年を経て、異文化との接触を体系的に、深く学べる仕組みが日本のあちこちの高等教育機関に整備され、その基礎学習をベースに精進すれば、世界で活躍できる人材の輩出が可能な環境が整ってきたと思われれます。ただ、リーダーにはテクノクラートではない、リーダー固有の人間性や透徹した長期のビジョンが求められます。異文化との接触を通じて、スピーディに重要度に応じた選択肢を提示し、リーダーシップを発揮出来るリーダーが誕生すれば、自国民の誇りも八十%台へと上昇するのではないのでしょうか。

## 旅に病んで夢は枯野を

山縣 正靖

皆さんもご経験と思いますが、最近 同期会などでの話題ナンバーワンはボケない方法である。いい齡をしてボケ防止の話ばかりしている。「それこそ自分達がボケた証拠だよ。そんな会には出ない」と家に籠もる山椒魚のような方もおられるが、見方によっては、どうして、どうして。

古来 日本男子の美風はヒトサマに迷惑を掛けないという恥の文化にある。この齡になると最大の敵はボケること、そうならないように常時お互いに切磋琢磨しているわけだ。欧米の年寄りの会合でもボケ防止など話しているのか、聞いてみたいものである。

先日聞いたボケ防止 一、十、百、千、万の法は、

一・・・毎日論文を一つ読む。

十・・・毎日十人と話をする。

百・・・毎日百回胸がドキドキする運動をする。

千・・・毎日千字の文を書く。  
万・・・日一万歩を歩く。

これはかなり求道者、体育会的でなかなかやれるものではないが、しかし回数が具体的なのがさである。次に楽しみ三法というのがある。

一、野菜と魚を美味しく食べて楽しく運動をする。

二、人と会ってコミュニケーションを楽しむ。

三、新しい事をやり、新しいものを見る。

この二、と三、は実は悠遊十五号のお題「異文化との交流」のすすめである。

異文化とはなにも外人さんのことばかりではない。自分というものは人間が古来発明した楽しみや文化のほんの一部しか知らないものである。知ったかぶりをして自分の世界に安住するとボケますよ。人間の脳は同じことを繰り返しているだけでは劣化するそうで、これまでとは変わったことをやって刺激することで初めて維持できる。特にコミュニケーションをすると、右と左の脳が刺激し合って劣化を防げる。

齡をとつたらおおいに異文化交流を盛んにせよ。やれ

る間に遊んで歩け、旅をせよ。やったことのない世の中の楽しみを生きている間に試してみよ。これは不良老人のすすめであつて、山椒魚のように自分の穴に籠もるの  
は考え物だという教えである。

さて、異文化交流の原点は旅である。ボケ防止のお墨付きを貰った訳で、旅の途中で何かあつてもそれはそれで本望よと周辺に言つておくのが身のためであろう。それにつけても「旅に病んで夢は枯野をー」といつてのけた芭蕉翁は見事なものではないか。

非文学少年の小生はOBペンクラブという異文化に入り、おおいに刺激されて奥の細道を読み、ついに昨年高岡、長岡、鶴岡そして象潟と、奥の細道コースを各駅停車で歩いて来たが、当時各地の門人が翁を待ち構え、欲待して句会を開いた様が大事に保存されている。

実は奥の細道で女性にかんする句は非常に少ないそう  
で、市振の

一つ家に遊女も寝たり萩の月  
それに象潟の

象潟や雨に西施がねぶの花

この二句が有名だそうだ。(この辺、誤りがあればお許  
しください) その象潟で小生も台風くずれの風雨に見舞  
われ、駄句

象潟をびょうびょうと往く野わけかな

旅は楽しい。ある方は若山牧水の歌碑を訪ねる旅を続  
けているが、全国に二四〇位の碑があるそうで一生の楽  
しみと申されていました。



## グローバリゼーションの実像を考える

松浦 武弘

グローバリゼーション、グローバルスタンダードの名前が定着して久しい。国際化は国と国との領域を前提としていたが、国際化の進展の結果、国と国との領域を超えてのグローバリゼーションと言われるようになった。

一九九〇年代以降、工業、農業といった産業がメガコンペティション（世界規模での競争）にさらされることで維持不能になり、グローバリゼーションが多国籍企業にとり都合の良いもので「アメリカナイゼーション」と言われている。国際間の文化の交換、交流は増加し、文化の同化、融合、欧米化（特にアメリカナイゼーション）は進み、文化の差異が減少してきている。観光、海外旅行者の数は増加し、不法入国者を含む移住者も増加し、「IT革命」が（インターネット、通信衛星、電話等の技術を使った国境を越えるデータの流れが）グローバリゼーションを加速させている。「悠遊第八号」は、そ

の特集号のテーマを「IT革命の世紀」としたが、これを提案された、北田純一氏の慧眼に敬服している。

「ガリア戦記」で、ジュリアス・シーザーが述べているが、当時のアルプス越えのヨーロッパ諸国は未開発の野蛮国であった。ギリシャ・ローマ文明はサラセン帝国に継承され、オスマン帝国を通じて温存、発展し、イタリーの都市国家に流入され、ルネッサンス期にアルプスを越えて当時のバーバリアン諸国に移入された。産業革命を成功させて、素晴らしい発展を遂げたヨーロッパ列強であるが、「朕は国家なり」と豪語したルイ十四世ですら、ヴェルサイユ宮殿の自室に、右にシーザーの、左にオクタ비아ヌスの肖像を置き、日夜「ギリシャ・ローマの後継者たらん」と願望した。「エルサレム聖地奪還の十字軍が正義である」。従って「キリスト教が善で、回教が悪である」という日本人の感情的色眼鏡は払拭されねばならない。明治維新後、我が国は産業革命以降のヨーロッパ列強の全てを善とし、盲目的に賞賛し富国強兵に邁進した結果、明治政府は正しく世界史を俯瞰する教育をしなかった。

G H Q から下げ渡された「新憲法」を金科玉条として、勝手気ままな自由と平等を基本的人權とし、日本国民としての義務と責任を忘れ、戦後六十年余りを経過して、今や、G H Q が意図した通り、「国民総白痴化政策」が結実した。「国防」と「食料の自給」を忘れた国家の大計は存在せず、「水」と「平和」はタダという、平和呆けた日本人には道徳も規範もなく、まさに三等国民に墮している。ユトリの教育という美名の下、教育は荒廢し、小・中学生の学力は大幅に低落し、回復の見通し、展望は全く見えない。冷戦終結後、スパイ天国である日本で、C I A はうんざりするほどの事件を暴露し続けて来ている。一九八五年以来のデフレ不況下で、野村證券不正事件を発端に、大蔵省シャブシャブ・スキヤンダル、守屋次官問題等々、全国民は次々と浮上する目新しい事件に惑わされ続け、本質を見失っている。

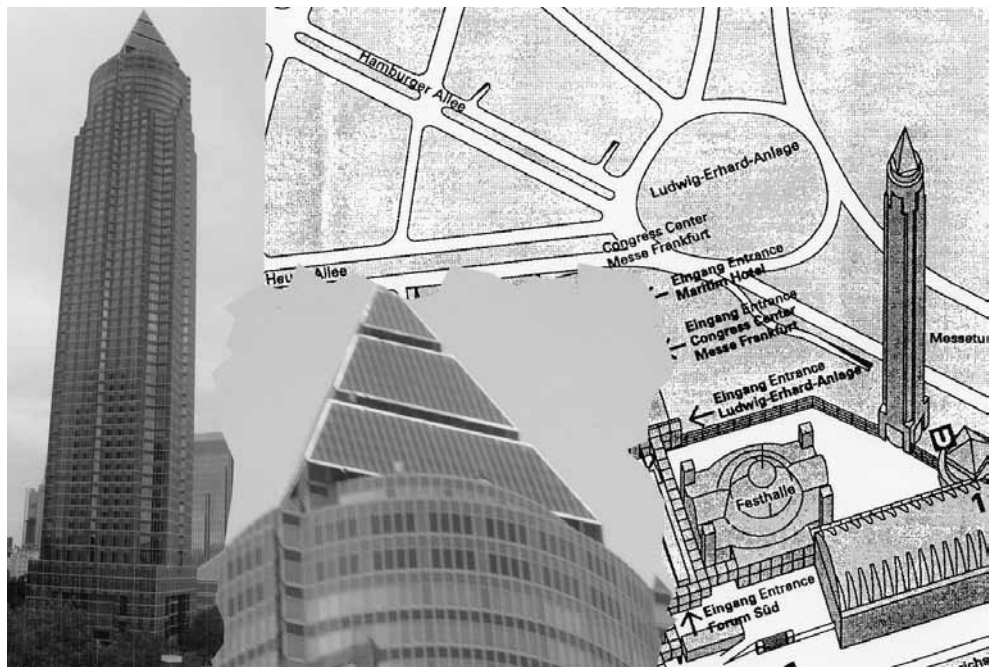
フランクフルトの見本市会場にロスチャイルド貿易センタービルが建設され、このビルの最上階に「ルシファールの目」（次頁に写真）が設置されていると言われて、十

年が経過している。私は、七月（平成十九年）のヨーロッパ旅行でフランクフルトに宿泊したが、ホテルから見本市会場が見ることが出来て「ルシファールの目」をはつきりと見た。

十七世紀中頃、マイヤー・アムシエル・ロスチャイルドがフランクフルトで、「赤い楯」の紋章のもと、財を成し、長男がフランクフルト宗家を継ぎ、四人の息子達がロンドン、ウィーン、パリ、ナポリと分家を設立し、密接な連携プレーの結果、絶大な金力、権力を握りながら、極力、表面立たないようにして来た。

しかしながら、今やロスチャイルド創業の地のフランクフルトにその姿を現し、見本市会場にセントルムとして、ロスチャイルド貿易センターを築き、その最上階には「万物を見通す目と言われる『ルシファールの目』が設置され」、夜には、赤い輝きが周期的に点滅している。

世界史を長いスパンで俯瞰するためには、国の概念を捨象して個々の歴史上の事件の本当の意味を考える必要があり、その鍵が「フリーメイソン」「ユダヤ」「ロスチャイルド」等々などである。



ルシファアの目



## 異文化に向うあなたに

松谷 隆

元日にアメリカへ赴任されるとのこと、違う文化での生活・仕事の始まりですね。今回の異動は貴君の将来にきつと役立つはずで。また役立たせるために、何をすべきかを絶えず考えられることを祈念しています。

ご存知のように、私自身三十五歳からクロアチアのザグレブ市に三年間、その後二度のアメリカの十三年間、合計十六年異文化のなかで過ごしました。その経験と反省が少しでもお役に立てばと思います、筆をとった次第です。

外国人との付き合い？は、小学生時代からです。というのも、親父の家具屋を手伝っていた叔父の一人が英語学校出身で、在日米軍へ家具を販売しており、彼らもよく店に来ていたからです。中学時代には、叔父の不在時の訪問客に、片言の英語で対応していたので、外国人に對する引け目はほとんど感じませんでした。

クロアチアやアメリカの文化は、日本のとは違います。

広辞苑の「異文化」の定義は「生活様式や宗教などが（自分の生活圏と）異なる文化」です。なにも外国の話だけではなく、国内の地方文化にも当てはまります。

新米管理職で赴任したザグレブでは代理店のサポートという名目でした。当時グローバルゼーションや異文化交流という言葉はなく、海外進出は「国際化」と言われていた時代です。「ビジネスプラン」ではなく「事業計画」という日本語が使われていました。

ユーゴスラビアには言葉も分からず、文化や歴史もよく知らないまま飛び込みました。救いは代理店にクロアチア人の奥さんを持つアメリカ人がいたことです。彼は、単なる通訳ではなく、当時のユーゴスラビアのことやアメリカのことも教えてくれました。ビジネスを越えた友情を作り上げることができたのは幸運でした。

アメリカでの最初の一年間は、アメリカ企業との合併会社に向向で、上司はアメリカ人、扱いもアメリカ人幹部と同じでした。ビジネスプランの作り方、プランが達成できなかったときの言い訳の仕方、ペナルティの科し方や解雇の仕方など二度目の駐在の際に、大変役立ちま

した。「郷に入つては郷に従え」を実践しました。

このように、異文化のなかといつても人との付き合いが最重要です。日本人との付き合いではありません。現地の人たちとどう付き合うかです。アメリカ人の上司、同僚、部下そして近所の人たちとの付き合い方をせひ学ぶことをお勧めします。付き合い方は一通りではありません。それぞれ付き合い方があることを認識すべきです。

次の事は、私が駐在中に学んだこと、また反省の中から会得したことです。部下にもよく言いました。

その一……日本語、日本史や地理の勉強

その二……駐在地のよいところを見つける

その三……YES, NOをはっきり。質問に対し、分らないときは「知らない。調べて返事する」の徹底

その四……自分の趣味を伸ばす

これらは現地の人たちと付き合うためには不可欠であると考えます。即ち異文化交流の原点です。

日本語の勉強は自分の主張の礎を作るために必要です。欧米人と議論するには理論的でなければ勝てませ

ん。そのためには、日本人と話すときでも理論的であるのが理想です。日本語があやふやであれば、理論的に話すことは不可能です。

問題は、日本語を満足にしゃべれず、読めず、書けなくとも、外国語を話せるだけで重宝されている人が多いことです。外国人からは、単なる通訳にしか見えません。

母国のことを外国人に充分説明できる教養も不可欠です。私の趣味のひとつは日本史で、いろんな本を読みました。その結果、歴史の質問を受けても困ることはなく、逆に人間関係を緊密にできたこともありました。

第二項は、ザグレブ時代に言ったことです。日本より悪いところを探しても何の役にも立たません。目線を変えて、周りを見れば、必ず良いところが見つかります。

最後に、アメリカから日本を異文化の国として冷静に見ることも必要です。どうすればいい所を伸ばし、悪いところをどう改善すべきかを考えて下さい。日本の将来のために必要です。

いつもながらの老いぼれのお節介、乞うご容赦。  
では、体と心の健康に気をつけて、楽しんで下さい。  
GOOD LUCK!  
(平成十九年十一月記)

## 海外を旅行して思うこと

三宅 劬

第二の職場では比較的恵まれて、働きながらま  
まった休暇を取りやすかったので、この十数年は毎年  
二、三ヶ月の海外旅行をしています。訪問することが多  
いのは、ニュージーランド、オーストラリア、カナダの旧  
英連邦諸国、北欧、EU諸国、シンガポールなどです。

旅行から帰つての第一印象は、成田空港から自宅まで  
利用する成田エクスプレス、JRなど日本の公的交通機  
関の良さで、正確な運行、車両の綺麗さなど首都圏の公  
的交通機関は世界一だと思えます。

時々日本を訪れる外国人と都内の交通機関内で話をす  
ることがありますが、この点に関しては多くの外国人も  
絶賛しています。

しかし問題点も多く、最も気になるのが所狭しと貼ら

れている広告です。肝心の路線図も見えない位です。こ  
んな国は先進国ではありません。一日乗車券が当日の終  
電車までというのも不合理で他の国、都市のように使用  
開始後二十四時間にすべきでしょう。

東京は再開発が進み、三十年前に一段落した西新宿の  
ほか、この十年で丸の内、品川駅東口、六本木界隈は見  
事に整備されました。銀座は世界の主要都市の商店街  
で最も豪華で清潔、あらゆる有名ブランドが売られてお  
り、かつての買い物天国シンガポール辺りからも買い物  
に来るそうです。

限られた地区を見ると欧米先進国の大都市より綺麗で  
すが、鳥瞰する町並みは不揃いで、電線、原色の看板類  
の醜さは他の先進国では見られない光景です。日本にも  
安藤忠雄、故黒川紀章らの優れた建築家が大勢いるので  
すから、五十年、百年のロングスパンで都市計画をすべ  
きだと思えます。

私の旅のスタイルは、ひとつの都市に四、五泊するの

んびりした日程なので、公園・植物園を歩いたり、美術館を見たり、好きな曲の演奏会があればコンサートホールへ行くことが普通です。大学のキャンパスを歩いて若い学生と話すことも度々ありますが、学生たちに専攻学科と卒業後の計画を聞きます。彼（彼女）たちの答えは、専攻した知識が生かせるような分野での仕事をしたいというのが多く、自動車、コンピューター関連など企業の業種は出てきますが、具体的な企業名が出てくることは先ずありません。

もし同じような質問を日本の大学生にすると、最初にトヨタ、ソニーといった企業名が出て、入社できれば、配属される部署は二の次というケースが多いのではないかと思います。

植物園での散策中に親しく話をすることが良くありますが、誇り高いイギリス・フランス以外の国では、この人なら大丈夫と思う人に「貴方はこの国に生まれて幸せですか？ 現在の首相をどう評価しておられますか？」

という質問をすることがあります。私が訪れる国は、「良い」国が多いのですが、殆どの答えは「イエス」で、首相（または大統領）は有能で、國を豊かに国民を幸せにするため努力して実績を上げている、われわれ国民は彼（彼女）の続投を希望しているというものです。シンガポールとニュージーランドでは、特に強く感じました。

「貴方は幸せか」という設問について強く印象に残っているのは、二〇〇六年秋、岩倉使節団のことを勉強する「米欧重回覧の会」の設立十周年記念国際シンポジウムの基調講演で、知日派のインドネシアの学者バクティ・アム・アラム博士が見事な日本語で、「日本は良い国なのに、貴方は日本に生まれて幸せですかと聞くとイエスの答えが非常に少ない国で信じられない」と言っておられたことです。

政治は確かに良くありませんが、国民が自分の国を好きになれないのは残念なことです。

## 中世フレスコ画を学ぶ

吉田 邦彦

その日の作業は朝の八時すぎに始まる。ホテルの朝食を済ませ、身支度を整えると四人は町の中心にあるマーケットにいそいそと、その日のランチの材料を買いに向かう。決まって買うのは五、六十センチのバゲット、新鮮なトマト、レタス、チーズ、りんご、缶ビール等だったが、その他にも日用品、雑貨、菓子などあれこれ手にとって品定めするのが面白く、この作業を「朝の買出し」と名づけ、後々の楽しい思い出のひとつとなった。

私たち四人はフランスの小さな田舎町にフレスコ画の体験実習に一週間の滞在に来ている。この買出しを済ませると、互いに分け持つて実習の場となるユルスリース塔まで古い町並みのなだらかな石坂道を十分ほど歩く。ここオータンは市といっても人口二万人にも満たない、フランスならどこにもある小さな田舎町だが、歴史は古く、遠くローマ時代にさかのぼる遺跡が点在している。

朝方の道は人通りもなく、途中にあるサン・ラザール大聖堂やロラン美術館もひっそりしていて、私たちは石畳を踏みしめながら、感傷に浸ることが出来た。

小高い丘に建つユルスリース塔の敷地には、鉄扉の門があり、年代物の大きな鍵を使い、中に入る。

広い芝生の庭の周囲にはりんご、洋なし、プラム、さくら、ライラックなどの樹木があり、色とりどりのバラが早朝の陽光を受けて幸せそうに咲いている。

私たちが到着する頃を見計らって先生も近くの自宅からやってくる。先生は私たちに前の晩はどう過ごしたのか、困ったことはなかったかと、楽しそうに聞いてくれる。この塔や聖堂は十二世紀の建造物であるが、その後近世になって女子修道院の時代を経て、今は先生個人の所有となっている。先生は地下聖堂に、生まれ故郷秩父の両神山を模したフレスコ画を殆ど完成していたが、わずかな未完部分の制作を私たちに残しておいてくれた。私たちは三年前から毎年日本で行われた先生のフレスコ実技講座に参加し習得を重ねていたが、復習の意味で当初の

二日間はレンガを使い、下絵のフレスコ制作を行った。

フレスコ画は西洋絵画技法のひとつであるが、先生は西洋フレスコ画の特徴は聖堂や教会など建造物と一体となつてこそ価値を持つと強調している。

私たちの制作は聖堂の地下室に通ずる階段と壁で行われた。時期は六月であったが、地下室の床はひんやりとした冷気が作業衣を通して感じ取れ、壁の下の部分は身を屈めたり寝転んだりする姿勢を取らなければならない。

適度の柔らかさに混合した漆喰を重ね塗るが、乾きすぎても、逆に水分が多すぎても、その上に鉱物粉末の顔料で描画することはできない。壁が乾燥する過程で空気中の二酸化炭素と反応し華やかな発色をすることで千年以上もその姿をとどめることができる。

先生はフランス国内の教会、聖堂など数十箇所では壁画修復、保存に従事し、このたび自らの壁画創作をこのユルスリーヌ塔に施すことが仏政府より許可され、構想ではブルゴーニュ公爵四代の歴史を描くことになった。

その先生とは在仏四十年になる高橋久雄氏のことです。埼玉県秩父市出身、武蔵野美術大学西洋画卒業後、フラ

ンスに渡り国立装飾美術大学卒業後、壁画修復と保存の資格を取得し、仏政府より「オフィシエ芸術文化勲章」

「レジオン・ド・ヌール勲章」を受章。七年前、ユルスリーヌ国際文化センター(C I T U)を設立し、秩父、川越市とオートタン市との相互交流を計っている。会員は両国におり、日本では約三百名位が在籍し、毎年十二月に東京で日本総会が開かれている。オートタンでは数年前に植樹された桜が大きく成長し、春には見事に咲きそろう。さらに五月にはユルスリーヌ塔のてっぺんから百匹以上の大きな鯉のほりが空に掛かり、日本舞踊、びわ演奏、日本映画、絵画・彫刻・工芸などの展示会が催されたりして、さながら日本週間の様相を呈する。

私たちの滞在中、先生は近所に住むフランス人のワインパーティーへの招待、オートタン市長への表敬訪問、地元新聞にフレスコ実習の取材、掲載など気さくに市民交流実践の手本を示された。

高橋先生こそ日本人、フランス人という枠を超えた真の国際人と尊敬してやまない。

# 特集・嘘



山懸 正靖

## 嘘について

安藤 晃 二

「嘘と閻魔様」即ち、正直は美德なのである。「偽善」とも言う。また「嘘も方便」は人間生活の日常茶飯事である。「詐欺行為」は横行し、様々な嘘の形が世に及びこる。「嘘とは何か」その深層に分け入りたい気もするが、到底極め難い課題であるので、それは心理学者に任せることとして、「嘘」について語れと要求された人間が趣くままに想いを書いて見る事としたい。

高校の同級生のK君が属する同窓の句会が、記念句集を出版した。仕事の関係で東京を離れるK君を送る会で、スナックに集まった老若男女二十人は同窓とは無関係であったが、K君の人望を思わせる。最後にK君が自筆でサインしたその句集を全員に配った。何故か僕は「それ同級のS君から貰ったから」と、断ってしまった。数日後K君は地方の勤務地で脑梗塞のため急死し

た。「嘘も方便」的な生き方を何処かで嫌っていた僕はそのときの心理状態が働いたのか、K君の折角の志を無にしてしまった。これは「嘘」の問題などではない。生来不器用な僕の最悪の行動様式が出た。書棚のS君からの句集を見る度に、痛恨の思いで辛い気持ちになる。

トウエインのハックルベリーフィンに出て来るノンサッチ公爵の末裔を騙る詐欺師共が芝居小屋に客を集めた後、裏口からトンズラする、その痛快なやり口に、少年時代の僕は笑い転げる。人は金を求めて嘘をつき、その本能が騙す快樂さえ求めているように思える。

僕が五歳のとき母親が病死した。二年後に来た継母に可愛がられて僕は幸せであった。小学四年生の教室で、担任の女性教師は人間の不幸の実例として僕を引き合いに出した。僕は憤然として立ち上がり、自分には母親が居り、決して不幸ではないと、渾身の抗議をした。所詮大人と子供の戦い、押さえ込まれた。「本当の母親がない、それが不幸というものです」。五年生になると



担任は変わり、人氣の二十五歳の女性教師 T 先生となった。今思えば本当に自分の娘より若い年恰好の彼女であったが、小学生の僕らの前には巨人の如く立ちほだかり、ビシビシと厳しい毎日であった。しかし、その聡明な面立ちとともに不思議な魅力で子供達の心を惹きつけた。あの名古屋弁で「○○君、キンチャクつけとるの」とやられる。その恐ろしい T 先生が、ある日静まり返った放課後の教室に僕を呼んだ。机の上の菓子パンを勧められ、耳を疑う程のやさしい会話が始まる。あなたは実母と継母の何れを愛しているのですか。一瞬間が真っ白になった。二者択一の問いなどでは有得ないことは僕の頭の中では明白であった。しかし、あの立派な先生が手を取り合えばかりに迫っている。優等生の回答は、とも思ひめぐらした。次の瞬間、僕の脳裏には「あの二人の母親いずれをも護らなければ、絶対」という強い思いに突き動かされた。ここぞ正念場とばかりに、判らない、で押し通したのである。しかし、そのとき自分が嘘をついたのではないかと言う後味の悪さが残り、その後心中で尾を引くこととなる。十一歳の小学生には大人の姑

息さなど気付く由もない。そんなことがあってから程なくして、T 先生は退職した。沈んだ面持ちでクラスに挨拶をして理由も話さずに去って行った。後で判ったことは、警察予備隊員のご主人が酔った勢いで改札口の駅員を殴ってしまった、それで先生が辞職に追い込まれた。そんな時代であった。話を聞かされたクラス全員が週末に銀輪部隊を組んで、一里半の道を走り、田舎の T 先生の自宅へ突進した。そのときの先生の頬を伝って流れた熱い涙を忘れることができない。遠い昔の思い出である。

人は皆長い人生の中で様々な教育や影響により嘘にまつわる強迫観念のようなものを植え付けられ、哀れにもその鎧のような重みを背負って生き続けているような気がする。子宮から生まれ出た瞬間から、純粹無垢の世界に生きることなど不可能となるのだ。それでも僕は、いま人生の坂道を歩きながら、でき得ることならその鎧を脱ぎ捨てて、純粹な世界に回復したい、羊水の中で息づいていた本源的な人格を回復したいと希求している自分を感じるのである。

## ・・・・・ 教養ある人は嘘をつかない ・・・・・

上原 利夫

最近の企業不祥事はあきれられるばかり。経営者が堂々と嘘をつく。どんな世の中でも、嘘をつくのは善くないことぐらい、大人なら誰でも知っている。子供のときに、親や学校の先生から教わるからだ。ところが、会社というところは、外部には嘘をつけと教えるらしい。

昔の親は、小さい子供に、嘘をついたら閻魔さんに舌を抜かれるよ、と諭したものである。また、嘘つきは泥棒の始まりとも教えられた。しかし、身をもって知るのは、他人から嘘をつかれ、腹が立った経験を通してだ。

宗教は、他人からされたくないことを他人にするな、と説く。嘘も、他人からつかれたくないなら、他人につくな、となる。ところが、宗教心がなく、自己本位の人は平気で嘘をつく。殴る蹴るなど暴行を受けたのならば、「目には目を」式に仕返しすれば気が済むのだが、嘘をつき返すのは難しい。それではどんな対応が可能か。

拷問は、嘘をついたり、証拠を隠す容疑者に下口を吐かせるために行われる。それでは嘘をつかれた仕返しに拷問を応用すればよい。「嘘をついたら針千本飲ーます」というではないか。とはいえ、嘘をついたことを反省している者に、肉体的な苦痛を与えるのは酷である。こんなとき、宗教は、懺悔とか告白を準備している。

近代法では虚偽が罰則の対象になる。嘘のすべてが罰せられるわけではない。虚偽には証拠が必要である。証拠はないが疑いがある場合は、容疑があるという。ところが、容疑がないのに、若者は「うっそ!」「ほんと?」を日常的に使う。予想もなかったことを知ったときに発する言葉である。疑っていたわけではない。

人が積極的に嘘をつくのは、自己の利益を計るためか、自己保身のためである。国会で行われる証人喚問で、証人は嘘をつかないで「記憶にない」と言う。真実を語れば罪になるからだが、本当に記憶にないのであれば、記憶を呼び起こさせ、真実を喋らす工夫が必要である。国会の証人は、嘘がばれると偽証罪になるから、そうならないよう注意を払う。切羽詰まってはじめて、記

憶を回復させればよいからである。このような手法は、弁護士が違法にならない範囲で教えるのであろう。質問が射たときは、現役の大臣ですら自殺する。追手の詰めが甘ければ、証人はほっとするとしても、嘘をついたことの虚しさを感じる筈である。

一方では、他人を救うための嘘がある。いくら他人を救うといつても、倫理的に許されなるときは有罪になるが、「嘘も方便」といわれる嘘は、罪になる嘘ではなさそうである。肉親が、患者に本当の病名を隠し安心させるとき、友人同士のいさかいを丸く収めるために「知らない」と言い、話を円滑に進めるために筋書きを脚色するなどとは「よい嘘」かもしれない。しかし、「よい嘘」ですらつかない正直な人もいる。こういう人は信用できる。

会社のためであろうと、自己の利益のためであろうと、嘘が違法行為であれば有罪になるのだが、会社人間は嘘を隠せると思っっているらしい。昔の人は、お天道様が見ていると信じていたが、いまは内部告発者が代りをしている。彼らが然るべきところへ告げると世間が騒ぎだす。

しかし、食品の消費期限と賞味期限に関する報道は、

人命に危害を与えない範囲のものもあり、行き過ぎを感じる時がある。安心とか安全を守るための法令でも、実情からかけ離れると、破棄物を増やすことになる。もったいないし、環境保護にも反する。『法令遵守が日本を滅ぼす』（新潮新書）という本が出版されたが、法令そのものを見直す必要がある。善良な者に嘘をつかせ、虚偽を計らせる世の中は、政治の力で改めるべきである。

明治期に、五百に及ぶ会社の設立に関わった渋沢栄一は、実業家に「論語と算盤」を説いたことで有名である。自己の利益を図り、株主に不利益をもたらさず、町人出身の実業家を諫めたのである。道徳経済合一主義を唱えたのであるが、渋沢自身は決して嘘をつかず、事実を隠したりしなかった。相手を敬ったからだ。その根幹は相手の言わんとすることに耳を傾け、相手を生かしたといえる。これは教養のある人がとれる態度である。

昨今の政界、官界、財界にみられる不祥事は、教養に欠ける人間が起こしている。

『教養とは何か』（講談社現代新書）と『教養立国ニッポン』（文芸春秋〇七年十二月号）は参考になる。

## ロンドン・タイムズの嘘

大庭 定男

教養ある英国人の社会では嘘をつくことは最悪の不道徳である。そのため、一度の嘘で政治生命を失った例は、過去五十年間でも、プロヒューモ国防相のクリステイン・キラー嬢事件、ソープ自由党首の男色相手暗殺未遂事件などがある。記憶にありませんと逃げたり、同じようなことで何回もスキャンダルを繰り返しても平気で過ごせる日本の政治家社会では想像もつかないくらい厳しい。

その英国で、年に一日だけ、嘘をつくことが許される日がある。言わずと知れたエイプリル・フール（四月馬鹿、万愚節）で、もともと友達をかついで楽しむ遊びが、現在では大新聞にまんまと騙され、畜生！と地団太踏む日になっている。その例をふたつ。

### 『M25交通規則改正』

大ロンドン市の外周を矩形でかこんでいるM25ハイ

ウエーは一九七三年から工事を始め、一九八六年に完成した。北方より南部イングランドや欧州大陸に行く車、反対に欧州大陸や、南部イングランドより北方に向かう車がロンドン市を縦断するために起こる交通渋滞緩和を狙ったこのハイウエーの完成を、国民はどれだけ待ったか知れない。私もその一人であった。

ところが華々しく開通した直後から交通渋滞が始まり、交通事故による死傷者も増え続けた。想定外の車の増加、欧州大陸との人的、経済的結びつきが強くなったためである。政府に無策を非難する声が高まった。

一九九〇年代の初期のある四月一日、タイムズ紙を開いた私の目に飛び込んできたのは『政府、M25交通規則改正を研究中』というニュースであった。問題になっているM25の渋滞を緩和し、事故を減らすには対面交通をやめ、奇数日には時計の針の方向に、偶数日には逆の方向に一方交通にする案を政府は検討中の模様というのである。

私は、これは困ったことになった。M25に乗るときにはその日の流れの方向を常に考えなければならないと

思い、更に読み直してみるとどうも書き方がおかしい。タイムズらしい格調の高さがない。あやふやな感じがする。これは怪しいぞと思ったとたんに「今日は四月一日だ。タイムズにうまく騙された！」と絶句した。

### 『日本の首相にサッチャー女史を』

それから二、三年後の四月一日の午後、ロンドン在住の友から電話で「朝日新聞（海外版）ではサッチャー女史を日本の首相に招聘と報道して居るが、外国人を首相とは何たる事か。いくら人材がいなくても、日本人を当てるべきではないか」という。直情径行、インパール戦を戦い抜いたこの戦友は、次々と短期間で変わる日本の首相に不信感を抱きながらも、「外国人を首相にするとは何事だ」という。

実はその日の朝、私も同じ記事を見て、これはおかしいと思った。サッチャー女史が如何に優れた政治家でも、歴史、国民性が異なる日本に来て、海千、山千の政治家、お役人なしでは夜も明けない国民を相手に、英国で成功したような改革が出来るはずがないと思ったからである。

そして、その次は「朝日は昔から関係の深いタイムズ紙をまねて、日本版のエイプリル・フルを始めたようだが、読者はどう受け止めるだろうか。生まじめで、精神的余裕のない日本の読者には理解されないではないか」と思った。予想はあたり、その次の年からは類似の記事は出なくなった。

### センス・オブ・ユーモアを大事にする

エイプリル・フルが英国では榮え、日本では根付かないのはユーモアを理解し、楽しむ余裕のある英国人と、生真面目で、精神的余裕に乏しい日本人の国民性の差によるものであろう。ロンドン・タイムズだけでなく、他の一流紙もこぞってエイプリル・フルの記事を載せる。『ミロのヴェイナスの腕が発見された』、『原始的生活をしている島が見つかった』というような記事に驚き、次にはかつがれたと思つて、或いは地団太を踏み、或いは大笑いして、春の到来を喜び合うエイプリル・フルは忘れたい英国生活の思い出である。

## 七人の嘘つき

西川 武彦

今春（平成十九年）、当クラブに掌編小説勉強会が誕生した。仲間は七人。『掌編』とは何か？ 広辞苑では『短編』より短い小説と定義している。文学賞でいう『短編』とは、原稿用紙三十から五十枚なので、それより短い十から二十枚を目途にして励んでいる。

小説とはフィクションである。フィクションは辞書で調べると「作り話、虚構、（遠まわしに）嘘、絵空事、捏造」と定義している。「嘘」は広辞苑では「真実でないこと、作り事」となっている。つまり、隔月の勉強会では「七人の嘘つき」が作り話を持ち寄り、批評し合っさりよい『嘘話』を創るべく研磨していることになる。既に四十編に迫る力作がウェブサイトに集録されている。

海外勤務が長い国際派嘘つきは海外での、一方、国内派嘘つきは身近な職場での話が多いが、戦前派嘘つきは擬似戦争体験を創るからヴァラエティに富んでいる。青

白き文学青年が身の回りを小さく描くのと違い、嘘にスケールと迫力があるのがよい。もっとも部外の専門家は、自分史的で心理描写、情景描写などが今一と映るようだから、嘘の創り方を更に鍛錬せねばなるまい。

どんな嘘を書いているか。人様の作品を引用するのはいささか躊躇うので、筆者・喜多川雅人の五編を覗いてみる。主人公は元航空会社勤務の国際派ビジネスマン。

第一話「慕情」は香港が舞台。主人公は、中英交渉の最中に、インテリジェンスの仕事を抑せつかる。同交渉の帰趨が中期的事業計画に与える影響を最小に止めるべく、エイジェントを使って情報活動する物語だ。それに不倫の色恋が絡み、最後に荒波が……。筆者がアジア・オセアニア地区広報担当で香港に駐在したときの見聞が役に立っている。中英交渉の流れは捏造できないから事実だが、情報活動の興味と色恋は嘘である。

第二話「アラビアの小鳩」はロンドンが舞台。主人公は国際線運賃の専門官で世界を股に運賃交渉で飛び廻る。定年を控えた最後の出張先がロンドンで、若き頃の恋人に偶然再会するというお話。筆者の親友に業界で知

られた運賃専門官がいた。主人公を彼に擬して、筆者が付き合っていたギリシャ人女性を絡ませた作品だ。帰途でハワイに立ち寄り、ちよつとしたオチがつく。

第三話「Room・2006」はハワイが舞台。主人公は国際線の営業企画マン。定年後、ボランティアで手伝っている某財団からの依頼でハワイに出張するが、そこで往年の恋人と再会する。カナダ人スチュワードである。題名はその昔二人が過ごしたワイキキのホテルの部屋番号で、これが再会の鍵になる。最後に混血の「息子」が現われるややこしい嘘話である。

第四話「勘違い」は八ヶ岳高原が舞台。筆者は八ヶ岳山麓一三〇〇mの高原に山小屋を持って東京と棲み分けているが、孫用に中古のミニ・ログハウスを譲ってくれるという仲間が現われる。その移築に伴うとんでもないハプニングを描いたフィクションだ。似たような事件が起きたのは事実だが、ここに書かれたのは作り話である。

第五話「二つの誕生日」はメキシコが舞台。国際線乗り入れの交渉官を長年務めた主人公が、その昔、メキシコ線開設交渉で同地に長期滞在した時のハプニングがプ

ロットの柱になっている。現地支店で駐在員の誕生日パーティに招かれた主人公が、「実は明日は僕の誕生日です」と嘘をつき、メキシコ人美女たちのキスを浴びて誕生日を貰うというたわいないフィクション。勿論、色恋部分は「こうしたかったなあ」という絵空事、嘘である。

第二話は今年の長野文学賞（三十枚の短編が対象）に応募して、最終選考には残れなかったが、「印象作品」の一つとして地方新聞で紹介された。最終選考者は作家の藤田宣永さん。大学中退後、パリに渡りエールフランスに勤務。その頃見聞、体験したもろもろがベースとなった旅情溢れる好短編集「巴里からの遺言」で、日本冒険小説協会最優秀賞を獲得した。同氏は前掲文学賞の選評で、入選作につき「書かれたものはすべてうそ（虚構）だ」という気持ちを持って作品に向う姿勢が欠けている。短編のテーマはひとつにしぼること。それをどうやって、うそをつきつつ、深めていくかが勝負である云々」と述べている。「七人の嘘つきたち」の参考になるだろう。

ところで前掲の五つの嘘話だが、「事実は小説より奇なり」と筆者は呟いている。

## ユーモアのある嘘

森田 茂

社会には嘘が溢れている。日本ばかりでなくどこの国でもそうだろう。これは人間の習性とも言える。「自分は嘘をついたことがない」と喋る人もいるが、これはまさしく嘘になろう。

若いときのことを懐かしく想い出した。同じ社内でおばさんとおぼしき女性と、たまたま帰りの電車で一緒になった。

「お住まいはどちらですか」と聞くと同じ方向のとこと。「それでは一駅前で降りて少し歩きませんか」。お互いに日ごろの生活を語り合っていると、そのおばさんが手を組んできた。数日して社内、ある噂が私の耳に入ってきた。「彼が急に手を組んできたそうだ」。主客転倒の内容であった。

おばさんは三十歳近かったのでしょう。当時としては婚期を過ぎているような想いがあったので、しかしまだ

男性にもてるのよと見せたかったのかもしれない。これは愛すべき嘘でしょうが、それを聞いた当時の人は、なぜそんな嘘を喋るのかと疑いの念を抱いたかもしれない。

社会での嘘の話は極端からユーモアまで多様である。

今年十月十一日の朝日新聞「天声人語」に、こんな話が紹介されていた。作家の井上ひさしさんの短い随筆「原稿遅延常習者の告発」に、原稿の締め切りに間に合わず、田舎のお袋さんが死にました、と嘘をついたことを自戒しながら回想している。よく使われる話は、父や祖父母よりも、おじ、おば、を死なせて、約束の期限を守れないなどの言い訳として、嘘をつくこともあるようだ、と書かれている。我々にも、何かしらの戒めの反省を抱いて、笑談する経験をもっている人もいるのではなからうか。

日本語を知らないあるオーストラリア人が来日するときに、三つのアドバイスを受けてきた。日本での生活で大切なことの一つは、笑顔を忘れないこと、二は、うなづくこと、三は、そうですね、と理解を表すジェス



チャーをすること聞いてきた。

あるとき知人宅でご馳走になり、帰り際にその家の婦人が「お粗末様でした」と言われたので、彼は「そうですな」とお礼をいった。婦人は何でそんなことを言うのかと疑いをもったようだ。日本では、よく使われる謙譲語だが、彼はまだそれを知らなかった。

この謙譲語は、相手に対して、良くても遠慮する気持ちで常用する美しい言葉であるが、皮肉的にとれば、善意をこめたウソとも理解できるかもしれない。

さて、ここに参考までに、【卒サラ川柳】『不良老人たちの溜息』から、小生の「しん」作を引用したいと思う。

老夫婦嘘の効用知り尽くし

日本などの先進国は少子高齢化社会が顕著になってきた。首都圏のニュータウンもすでに四半世紀の歴史をもつようになり、地方社会と同じように、ニュータウンとは名ばかりの老夫婦が多く住んでいる。たとえば、三十七歳半ばで居を構えたとしても、現在はすでに還暦の年

齢である。わたしも、そのような社会で生活しているから、実感を禁じえない。日々の生活の中で、高齢者家族の離婚のうわさを耳にすることが増えてきた。高齢になるにつれて、子供は独立し、やれやれとの思いからのんびり過ごしたい気持ちになることも分らないではない。家庭生活での子供の育成からの開放感から、多少は、自己主張の想いが高まり、「うそ」を言うこともあるにちがいない。高齢者夫婦のいざごさは、そんな生活環境の変化も影響しているであろう。

いうまでもなく、「うそ」は夫婦だけでなく、社会生活する上でも非難されよう。しかし、善意の「うそ」というものもある。相手に迷惑をかけまいとして、つく「うそ」や子供の育成にプラスになると期待して、つく「うそ」などは、好意の表れとして許される範疇に入るのはなからうか。

人生のいろいろの経験を経た老夫婦は、そのような「うそ」の性質をよく知っている。人や社会に役立たないものや害を与えるようなハードの「うそ」、相手によき配慮をするソフトな「うそ」など、直感的に判断できる

だろう。「うそ」の性質からでる効用を知って、老夫婦の生活のきずなを強める人も少なくない。ユーモアを交えながらつくソフトな「うそ」の効用を体得しながらも、大人の川柳を楽しむ夫婦になりたいものである。ユーモアは余裕のある知性からくるといわれるからである。

最後に

「永遠の嘘をついてくれー吉田拓郎」

作詩・作曲：中島みゆき

このように、嘘をユーモアとして捉えた歌詞が多いのに、いささか驚いている。



## 霧の彼方の山田長政

浜田 道雄

タイと日本の関係をいうとき、日本の人は必ず山田長政を思い出す。アユタヤ王朝にあつて日本人町の頭領として国王に仕え、王の死後遺児を助けて王位篡奪者と争つたが、敗れて南タイのリゴール（今日のナコンシータムマラート）の大守として追われ、そこで毒殺されたという彼の話はよく知られている。だが、山田長政がどんな人であつたか、実在したのかは実ははっきりしない。

京都南禅寺金地院の僧崇伝が江戸初期の幕府と諸外国の通信記録をまとめた「異国日記」に、老中本多正純に宛てた「山田仁左衛門長正」の暹羅（シヤム）からの手紙が納められ、長正は沼津藩主本多忠佐の六尺であつたが、暹羅に渡り、その地の仕置きをしていると解説がある。山田長正（「長政」ではない）の実在を示す日本側の資料はこれだけである。当時東南アジアに渡つたものには幕府が朱印状を交付したが、異国日記にある御朱印

状台帳にはその名はないという。

タイにはどんな資料があるだろうか。ちょうど山田長正が本多正純に手紙を出したころ、アユタヤの宮廷には日本人町の頭領である「オークヤーセーナープムック」が武將として活躍していたことが、アユタヤに駐在した当時のオランダ商館員の記録に残されている。

では、オークヤーセーナープムックが山田長正（あるいは長政）かという点、残念ながらそう簡単に決めるわけには行かない。オークヤーセーナープムックの日本名がわからないのである。

このカナ文字の名は欽定名といわれ、アユタヤの宮廷では公職につくと国王から与えられて、その後はこの欽定名だけが使われた。だから、タイの文献に欽定名だけが現れ、本名がないのは当然だが、当時のオランダ商館の文献は、アユタヤ王朝に仕えた日本人について述べるとき、欽定名と並んで「半左衛門殿すなわちオロアンスレリット」というように、必ず本名を併記した。だが、オークヤーセーナープムックにはなぜか、その日本名がない。日、タイ、蘭の歴史資料を見る限り、山田仁左衛

門の姿は霧の彼方にかすんでいる。

江戸時代を通じて、海外で活躍した日本人を主題にした本が多く出版されたが、そのなかに山田仁左衛門の暹羅での活躍譚もいくつかある。智原五郎八の「暹羅国山田氏興亡記」や天竺徳兵衛の「天竺徳兵衛物語」などがそれだ。明治維新の志士たちに大きな影響を与えた幕末の国学者平田篤胤にも作品がある。この思想家がくだけた講演本も書いたとは意外だが、「講本気吹嵐」（こうほんいぶきおろし）に山田仁左衛門を暹羅で活躍した武将として登場させている。しかし、どの話も伝聞に基づいた話であり、また、主人公の名も「山田仁左衛門」であって、「長正」でも「長政」でもない

仁左衛門が「長政」になり、暹羅で大活躍した英雄として、人々に知られるようになるのは、開国した日本が日清戦争で台湾を得て、さらに南方への進出を意図しはじめた明治も後期になってからであった。その頃から台北大学を中心とする学者たちが「山田長政」を「学問として」研究するようになる。そして、第一次大戦で南洋諸島を得て、さらに「大東亜共栄圏」へと広がる「南進

論」のなかで、山田長政は「輝かしい先駆的英雄」へと育っていった。

山田長政を静岡出身とするについては、面白い人物が絡んでいる。清水の次郎長である。「長政＝静岡出身説」を知った次郎長が、明治二五年長政を郷土の英雄とした記念碑の建設を計画した。この計画は挫折してしまつたが、これに協力した郷土史家関口隆正が「山田長政伝」を出版し、「長政＝静岡県安倍郡出身説」（沼津ではない）を主張したのである。これが世に広まったと言われている。アユタヤのチャオブラヤ河畔に、三十年程前泰日本人会が建てた「アユタヤ日本人町遺跡碑」があるが、建立には沼津市から二人の「山田氏」が子孫として参加し、記念碑に名を連ねた。これも面白い話である。

私が二度目のタイ在勤をしていた一九八〇年代はじめ、親しくなつたある警察大佐が、「自分の先祖はアユタヤ貴族だとしているが、実は日本人のヤマダなんだ」と、いかにも秘密を打ち明けると言つた風に話してくれたことあつた。日本タイ友好の今日、いかにもありそふな話だが、これがガセネタなのを、私は知っている。

# 自由テーマ



## 「ベンガルの槍騎兵」のことなど

石川 正 達

企業OBベンクラブが創設されて四年目の一九九三年（平成五年）八月に俳句の会がスタートして、平間真木子先生の指導により俳句を学び始めた。先生が二〇〇七年三月逝去されたことはまことに残念である。先生の懇切な導きにも係わらず私の俳句は一向に上達しない。俳号を付ければ上達する気になると考え「素屯」を名乗りはじめた。

辞書を引いてみる。「素」とは、ありのまま、かざりのないの意。「屯」には「たむろす」のほか「悩む」といった意が漢和辞典に出ている。私としては「素直に悩んで作句する」という気持ちを含めていたのだが、実のところは、中学生時代の私の綽名から付けた俳号なのだ。

三年生のころ友人と日比谷映画劇場へ「ベンガルの槍騎兵」というアメリカ映画を観に行った。インド制圧をめぐるイギリス軍と土着民との紛争を描いた戦争映画

で、ゲーリー・クーパーとフランショット・トーンの演ずる二人の英国ベテラン将校に若いストーン少尉の加わる友情物語であった。最後の場面でクーパー扮する将校は戦死する。若手将校はストーン隊長の息子であった。

映画が終わって、お茶を飲みながらの雑談で、友人が私に「ストーン少尉は君によく似ていた。石川の石は英語でストーンだ。これから君をストーンと呼ぶよ」と言っていて、私の綽名はストーンと決まった。以後、中学時代は「ストーン」と呼ばれていた。俳号を考えるとき、このことを思い出して「素屯」と名付けたものである。

先日、新聞に「DVDで観る世界名作映画」という全面広告が出ていた。その中の一つのセットの中に「ベンガルの槍騎兵」を発見した。なんとか手に入れたいものと思っている。

映画は好きだ。幼稚園時代から好きだった。幼稚園からの帰路、活動写真館内に潜り込んで、チャンバラ映画に見入り、弁士の名調子に酔ったものである。チャーリー・チャップリンの映画との付き合いはこのころからだったろうか。山高帽、ステッキにダブダブのズボ

ンという独特のスタイルが人気を呼んだ。「キッド」(一九二一年)で上手な子役(ジャッキー・クーガン)が走り回っていたのが記憶に残っている。

映画はサイレントからトーキーの時代へと移っていく。

私が初めてトーキー映画に接したのは、小学生のころ浅草の映画館の、当時としては大画面で観た「キング・コング」(米・一九三三年)だった。トーキー時代に入ってもチャップリンはサイレントを守っていた。だが、「街の灯」では美しいタンゴ調の音楽を流した。盲目の花売り娘の目が見えるようになってチャップリンと再会する。そんな場面だったか、この曲が時々浮かんでくる。チャップリン映画の音楽は彼自身の作曲が多いのに、この「街の灯」は他の人の曲を使ったようだ。「モダン・タイムス」は彼自身の作曲で、最近テレビのコマーシャルで聞くことがある。

テレビが普及するまで大衆娯楽の中心は映画鑑賞だった。だから暇を見つけては映画館へ通った。戦後、兵隊から大学へ帰って京都の映画館で最初に観たのはアメリカ映画の西部劇「拳銃の街」(一九四六年)で、主演の

ジョン・ウェインに初めてお目にかかった。以後「駅馬車」など西部劇のヒーローとなっている。

日本映画の時代劇で、私の心に残るヒーローの第一は「丹下左膳」だ。林不忘が一九二七年(昭和二年)から毎日新聞に連載した小説で、伊藤大輔監督が一九三〇年映画化している。片目片腕の浪人を大河内伝次郎が演じているのは適役だ。他の役者の演じた左膳もあるが、伝次郎の左膳にはかなわない。林不忘の小説は大変な長編だが、長じて読み直したものである。

最近、物忘れの度がはげしくなった。映画も、〇七年夏に黒木和雄監督の「紙屋悦子の青春」という戦争末期の軍人との恋物語を観たのが最後である。この映画もどんなストーリーだったか、既に忘れ果てている。テレビで映画を観ても同様である。八十五歳を過ぎれば、こうなってしまうのか。それでも映画が好きだから、たとえ一時間経ってストーリーを忘れてしまおうが、映画を観ることを止めることはない。水野晴郎のせりふを借りれば「映画って本当にいいもんですね」。

## コンサート&パーティーの醍醐味

阿部 洋己

「ファゴット」と言つて直ぐその楽器がお分りになる方はかなりのクラシックファンではと思う。オーケストラでは位置が後方なので演奏者よりも茶色の長い筒だけがよく見える木管楽器と言えば納得される。バイオリンやトランペットのような華やかな役割はないが木管の中では最も低音で暖かく包み込むような、ゆつたりとした音色が魅力だ。

今から思い起こせば十年以上にもなろうか。松本市での夏、恒例にしているマエストロ小澤征爾率いる「サイトウキネンフェスティバル」の夜、その余韻に浸りながら妻と食事を楽しんでいた。テーブルに置いてあったプログラムを見て「コンサートはいかがでしたか」と突然、声をかけられた。

世界的なファゴット奏者でありドイツ・トロツシゲン国立音楽大学最高位教授、小山昭雄氏とメゾソプラノ歌

手、ゆう子さん夫妻との出会いであった。それを機に音楽談義に花が咲き、気さくな笑顔で面白おかしく自身の失敗談を話す小山さんにすっかり魅了されてしまった。

普段ドイツに住む小山さんは日本でのコンサートの出演や教授を務める母校での授業、全国のお弟子さんたちの指導のために年に数回帰国する。そんな夫妻はクラシックがより身近で気楽に楽しめるサロンコンサートをヨーロッパ並みに日本でも広めたいのが夢だと言う。その夫妻の夢に少しでもお手伝いできればとの気持ちで発足から後援会長をお引き受けした。

その趣旨から開催場所はこじんまりしたコンサートホール、ホテル、レストランなど様々ではあるが人数は百人くらいまでに行っている。夫婦ならではの息の合った昭雄氏のファゴットとゆう子さんの歌声を存分に楽しんだ後、夫妻を囲んでのパーティーを開く。一流の演奏を極々間近に聴いたすぐに出演した本人があつた笑顔で廻つて来るのだから堪らない。ファゴットを分解して見せて説明してくれる小山さんとお互いに写真を撮り合ったり、もう大盛り上がりである。



また、お二人の何よりの魅力は夫妻が芸術家としてお互いに相手の人格と才能を認め合い、共に努力していることがステージを通じて我々に伝わって来ることである。夫婦の理想であるイコール・パートナーとしての典型的なモデル例ではと思う。昭雄さんのサービス精神溢れる中にも懸命の演奏やゆう子さんの暖かなステージに接すると普段のコンサートとはまた異なった「音楽の楽しさや優しさ」に触れることができる。メゾソプラノのゆう子さんの声は心に沁み入って来て、日本の四季にまつわる歌や名曲に幼い頃の懐かしさが蘇り、改めて日本の歌の魅力を再認識させられる。一方で「カルメン」等の情熱的な熱唱に感動し普段の優しい人柄とのコントラストが印象的だ。

昨年は後援会発足十周年の記念コンサートを都内ホテルで盛大に開催できた。発足時小生の友人と小山さんの知人だけでスタートした後援会が十年の時を経て現在会員が七百人までになった。後援会のPRは特にしていないのだが一度来られたゲストが次のゲストを誘うといった形で友人に友人の輪が広がった結果だ。また小生の友人が中心になって石川県金沢市、長野県松本市、仙台市に

それぞれ支部を作ってくれているがそのメンバーも東京まで大挙駆けつけてくれた。小山夫妻を核に音楽という絆で結ばれていることの素晴らしさを改めて実感した。

今でも思い出す。十一年前の発足の会をホテルエドモントで行った時だ。まだ三歳だった末娘の莉絵ちゃんがステージの壇上に「ママ」と言って駆けあがって来てしまい、ゆう子さんが彼女を抱いたまま歌ったことだ。

その彼女も今や十五歳。小山夫妻には二人のお嬢さんがいる。上のお嬢さんは亜矢ちゃんと言い、十八歳。お母様の後を継いで歌手の道に。世界的な歌手ウヴェ・ハイルマン氏に見込まれどうしても彼女を預かりたいとの氏の強い勧めで来年度からその先生に直々に習うため日本に一人で帰国、同氏が教授を務める鹿児島島大学に学ぶことになっていく。お母様の血を引き継ぎ伸びやかなソプラノが将来の大器を思わせる。先日、拙宅にてゆう子さんのピアノで彼女がアリアを歌ってくれた。窓が少し開いていたせいもあるかと思うが結構離れたお宅から後日、素晴らしい歌声だったのでテレビを消して聴き入らしてもらったと言われた。

一方、下の十五歳の莉絵ちゃんはお父様と同じファゴットの道に進んだ。数歳にして父昭雄氏に手ほどきを受けて以来、天才的な素質を発揮して日本はおろか世界中のあらゆるコンクールに目下十四連勝中でその各審査委員が彼女の底知れぬ実力に驚嘆するのが常だとのこと。優勝のご褒美にドイツ本国他各地から数多の奨学金が出てくるそうだ。直近のモーツァルト協会主催のハイデルブルグ市管弦楽団はじめヨーロッパ各地の有名交響楽団にソリストとして幾度となく招へいされている。両親のDNAを受け継いでいるとは言え、昭雄氏の指導法がいかに優れているか実証した形だ。昭雄氏の演奏スタイルと表情をそっくりそのまま小型にしたようであるが、いかにも堂々とした物おじしな演奏ぶりに全く感心しながら聴きほれている。日本でもその名声はお父様と同様にどろいていて将来が楽しみだ。

最近では文字通りの「ファミリーコンサート」の雰囲気になり楽しさが倍加された。昭雄氏と莉絵ちゃんの合奏あり、ゆう子さんと亜矢ちゃんの二重唱あり、四人の順列組み合わせで色々な変化に富んだプログラムの最後は決

まってファミリー四人が勢ぞろい、ほほえましくも楽しいハーモニーでフィナーレとなる。何年か前までは冗談で「お嬢さん二人の前座を夫妻が務める」日もそう遠くないのではと言っていたのだが、いよいよその日が目の前に迫ってきた感じで冗談ではなくなってきた。我々が冷やかに半分面白おかしく話題にすると両親としては嬉しい反面、まだまだ負けられないと複雑な心境のようだ。お子さんたちが小さい時は夫婦としてのモデル例だと言っていたことが現在はファミリーの在り方としてのモデル例ではないかと思われる。実際、小山家を見ると二人のお子さんは両親を師として尊敬し、両親は子供さんを愛情一杯で厳しく指導しながらもその成長に親としての幸せを感じている。お子さんはその過程の中で両親に感謝しながらも親を乗り越えようと努力する姿は胸が熱くなる。

小山夫妻のおかげで音楽の幅と仲間の両方が広がった。音楽を通して友達の輪を大きくして行けることは実に楽しいことだ。また余録として友人からは意外の趣味として写るらしく、文化的なイメージの向上が図れたことに対して小山夫妻に感謝している。

「大伴家持」によせて

上田 信隆

新しき 年の初めの 初春の

今日降る雪の いやしけ吉事(よごと)

右の一首は大伴家持が作った万葉集最後(4516)の歌で正月の大雪は豊年の瑞兆、その吉祥を喜ぶ気持ちをのべている。万葉集が千年万年に伝わらんと念ずる願いを合わせ込めようという思いがあるといわれている。

一般的には家持は不運な人生をおくったように語られているが、それは政治的な意味合いが深いように思われる。私は家持の和歌を拾って見てあまり悲劇性を感じない。むしろ現実を直視してその心情を歌のパネにしているようにさえ伺える。おおらかな優しさは大陸的でもありその陽気な雰囲気は南国的でもある。従って家持の風格は春の歌が似合う。

春の日に 萌(は)える柳を 取り持ちて

見れば都の 大路(おほち)し思ほゆ

(20巻—4142)

もののふの 八十娘子らが 汲みまがふ

寺井(てらゐ)の 上の 堅香子の花

(20巻—4143)

燕来る 時になりぬと 雁がねは

国偲ひつつ 雲隠り鳴く

(20巻—4144)

春まけて かく歸るとも 秋風に

もみたむ山を 超え来ざらめや

(20巻—4145)

無論歌人の悲しみはそれなりに深いものがあると思われるが、彼の悲しみは何か優しさが存在し、聞いている私達にどこか安堵感をもたらしてくれる。彼が三十三歳の時の歌

春の苑 紅にほふ 桃の花

下照る道に 出で立つ娘子(をとめ)

(19巻—4139)

我が苑の 李(すもも)の花か 庭に散る

はだれのいまだ 残りたるかも

(19巻—4140)

これらの歌などその美しさと華やかさは誰もが魅力を感じずにはいられないと思う。若し勝手な言い方を赦していただけるならどこか後世の北原白秋に類似点をみいだすとしたらいいすぎだろうか。

春の鳥　な鳴きそ鳴きそ　あかあかと

外の面の草に　日の入る夕

廃れたる　園に踏み入り　たんぼぼの

白きを踏めば　春たけにける

色ずかいのあざやかさ、常に身に付けた陽性のしたたかさがどこか共通点を思い出させる。白秋が城ヶ島の雨でぬれていれば、家持は布勢水海で遊覧している。

藤波の　花の盛りに　かくしこそ

浦漕ぎ廻（み）つつ　年にしのはめ

そしてこの歌の六日後

藤波の　影なす海の　底清み

(19卷—4188)

沈（しづ）く石をも　玉とぞ我が見る

(19卷—4199)

そして十日もたてば

我がここだ　待てど来鳴かぬ　ほととぎす

ひとり聞きつつ　告げぬ君かも

(19卷—4208)

彼は三十三歳の頃宮内小輔に任じられ、わずか三ヶ月後越中守に遷任される。この時代に多くの秀歌を排出している。自然の環境にも恵まれ、望郷の想いこそ彼の歌の源泉ともいえようか。家持は万葉集に四七三首の長短歌を残している。彼が編纂者であると同時に万葉後期の代表的歌人であることには疑いを持たない。彼の業績は無論ゆるぎないものではあるが、歌人としての一翼を担っているとも言える。四七三首も歌をつくれれば、ときとして駄作も評価の内にはいるのも仕方ないことであろう。

二万句を詠んだ江戸時代の小林一茶も近年多くの句を残した斎藤茂吉も、量的な評価と質的な評価の間で苦戦を強いられたこともあったと思う。作歌の量に比例し

て、ある確率で秀歌を排出することができるなら、私どもはより多くの機会を見て投稿するのが良いとも言える。

企業OBペンクラブでの投稿もついつい人の評価を気にすると腰もひけるが、大伴家持にあやかかって積極的に参加をしつづけていきたいと思う。継続は力なりと先輩諸氏に教えられたが私もまたその道に入りつつある。

なかなか 黙（もだ）もあらしを

なになにか 相見そめけむ 遂げざらまくに

（4巻―612）

（口訳）

いっそのこと黙っていればよかったのに。何のために逢いそめたのでしょうか。添い遂げられそうにないのに。

（出典） 日本古典文学全集 万葉集 小学館



## 秋篠寺の伎芸天

遠藤 俊也

あれからもう六十三年が過ぎていた。

旧制高等学校も卒業に近い頃、わたしは学友と二人で、天平の傑作伎芸天像を拝観しようと、奈良郊外の秋篠寺を訪れたことがある。かなり歩いて秋篠寺に辿り着いたときには既に夕暮れがかつていた。庫裏の軒下におら下がついていた小さな鐘を見つけ、それを叩くと老女が出てきて、もう拝観時間を過ぎているからと、無愛想に断られたことをいまだに覚えている。

その後、奈良の古寺へは数え切れぬほど何回も出かけているが、この寺だけは、孤立していて不便なためか、気かけながらも訪問していなかった。それが今回実現したのだ。

今年（平成十九年）六月、一人で近鉄の西大寺駅に行った。駅の北口から奈良交通の押熊行路線バスで十分程して秋篠寺前に着いた。小綺麗な住宅が立ち並んでい

る道を歩く。前に来たときは、家が殆どない田舎道を歩き、秋篠の里と呼ぶにふさわしい寂しい村里の林の中に寺を見つけた記憶がある。それが、何十年か過ぎた今は整然とした美しい町に変貌している。

寺務所に着いて拝観料を支払い、中に入ると、正面に鎌倉時代に大修理された本堂があった。奈良時代の建築様式が受け継がれており、唐招提寺講堂に似てはいるが、小振りでかえって落ち着いて見える。拝観者が多いせいか、中の片隅に小部屋が造られ、寺の男がひとり坐って写真などを売っていた。

壇上には、本尊の薬師如来を中心に日光、月光両菩薩、その横に十二神将のほか諸天が連なっている。その向かって左端にかの有名な伎芸天像がひとり静かに佇んでいた。密教經典には、伎芸天は衆生の諸伎諸芸の上達祈願を納受するとあり、その像はわが国には現在ここに一つしかない。頭部は天平の乾漆造りで、体部は鎌倉時代に寄木造りで補修された。全体に色褪せた極彩色の立像だが、乾漆の顔容は柔軟な感じで優美そのものだ。薬師寺に残る吉祥天や高松塚古墳の壁画に見られる同じ奈

良時代の美人のなかで一番写実的かつ優美でなろうか。微笑んだ唇は向かって右端がかすかに開いていて、妖気を漂わせている。じつと見ていると妖艶な顔がちちに近付いてくるような錯覚さえ感ずるのだ。

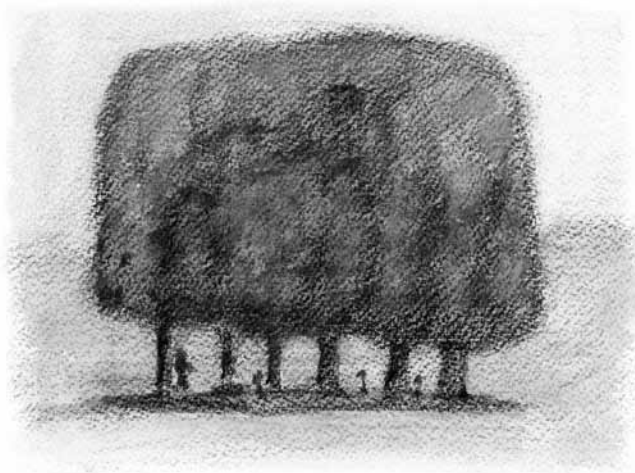
長い年月の末やつとお会いできたわたしの歓びと感激はたとえようもなかった。それにしても、和辻哲郎氏が名著『古寺巡礼』でこの像に触れていないのが堪らなく残念だ。氏がこの伎芸天を拝観していたら美しい描写力と奔放な空想力でこの像の魅力をどう表現していたらろう。

本堂には伎芸天と同じく、頭部が天平の乾漆で体部が鎌倉時代の木彫造りの帝釈天が安置されていた。同様の像が他に二体あり、いずれも奈良国立博物館で保管されていると聞いた。だが幸いに、わたしは翌日これらの像とお会いできたのである。

翌日の午後、時間が余ったので、奈良国立博物館の「仏像名品展」を覗いてみた。そこに秋篠寺の二体が蔵から出され展示されていたのである。

博物館第一室。入った正面に、法隆寺の有名な飛鳥仏

四天王像の一つが安置されていた。その露払いをするかのように、前方に秋篠寺の救脱菩薩ぐだつぼさうと梵天像が立っていたのだ。まさか、ここでお目にかかれるとは。びっくりして、わたしは立ちすくんだままだった。



## エベレストの展望台

大月 和彦

コンデ山塊へ カトマンズから空路で四十分、登山者やポーターで賑わう村ルクラからエベレスト街道が始まる。エベレストから発するドウド・コシ川が刻んだクンブー溪谷の中腹を歩き、パグデインの集落で泊まる。

翌朝、村はずれのつり橋の袂にハンマーと鎌が描かれた赤旗が翻り、反政府勢力毛沢東派の迷彩服を着た兵士が入山税を徴収している。時々現れて資金を集めているという。一日一人一〇〇ルピー(二〇〇円) 四日分払うと「革命人民議会キラート自治政府」名の入山許可証をくれる。政府は見ても見ぬ振りをしているらしい。

この先で街道から分かれ、溪谷西側の山塊に取り付く。急斜面には石垣に囲まれた農家が点在する。母親と少女が洗濯をしている。シャクナゲや竹など照葉樹に挟まれた道に白い花が目立つ。エーデルワイスの一種らしい。

ゆるい斜面を巻くように登ると焼け焦げた木や株が目

につく。昨年春、山火事があったという。右側に深く落ち込んだ溪谷の底からドウド・コシ川の急流の音が聞こえてくる。

標高三、四二〇mのキャンプサイトには、ポーターによつて宿泊、炊事、シエルパ、トイレのテントが張られている。豪華な野外科理の夕食。夜トイレに起きると、満天にちりばめられた星と青白い天空の世界がひろがっている。下方には街道沿いの集落の明かりが見える。月明り中のタムセルク峰が圧倒的な重量感で目の前に迫ってくる。

コンデ・ホテル 樹林帯を抜けると、エーデルワイス、リンドウ、クサモミジなどの花畑が広がる。急峻な露岩地帯を越え、コンデ山塊の広い裾野に入る。大きなカゴを背負った少女が下から現れ、すぐ追い越して駆け上がって行く。ホテルに野菜を届けるため今朝麓の村を発ち、届けたらすぐ下山するのだという。

急斜面を登りきると、赤い屋根のコンデ・ホテル。ヌブラなど六千m級の峰が連なるコンデ山塊の中腹、標高四、一五四mの地点に建っている。世界最高所の山岳ホ



テルを売り物に今年秋オープンしたばかりという。ホテルへは、麓から高度差一、四〇〇mの行程を歩くか、ヘリを使うしか方法がない。ダイニングルームや室内にはチベット仏教様式の彫刻やデザインが施されている。

小屋の雰囲気が残っていて、ストーブを囲んでホテルのスタッフと談笑する。麓の村に家族がいるという陽気な女性スタッフは日本を訪れたことがあり、信州の山や温泉、食べ物がかつたと懐かしむ。夕食のメニューは、モモというギョウザのようなネパール料理とライス、ホウレンソウの温野菜など豪華だ。

ホテルの主な熱源は太陽熱。最新式のソーラーシステムを導入しているというが、ダイニングルームは薪ストーブだけで寒い。浴室のシャワーは熱湯が出ないし、客室にはヒーター類はない。毛布を三枚重ね、湯たんぽと携帯カイロで寒さをしのぐ。

**エベレストの展望** 東北の方向にV字型に開けた溪谷の最奥にピラミッド状の白い岩峰―エベレストが顔を出している。直線距離で三〇km、南壁に斜めに走る地層と雪煙も見える。東南に落ちる稜線の下にサウスコル、

その右にはローツエ峰が空に突き出している。白と黒だけの雪氷の峰は鋭く人間を寄せ付けない。右方、親指を空に突き出したような峰のアマ・ダブラムの姿もこの豪華な景観をひき立てている。

目を手前に転じると、エベレスト街道北部が俯瞰できる。溪谷に張り出したテラス状の台地、その下方崩れ落ちたような馬蹄形状の底にはナムチェ・バザールの集落が張り付いている。古くからチベットとの交易の中心地で、数多くの名シェルパを輩出しているところ。エベレストへのルートはさらに北に向かっている。クンブ氷河やベースキャンプは屏風状に横たわる岩壁の向う側にあるはずだ。

翌日、ホテル裏から続く斜面の上端に突き出たパラク・ピーク(四、六一八m)を目指す。黄色いコケが盛り上がるように生えた礫岩地帯をあえぎながら登り、岩峰に立つ。深い絶壁を背にした岩場にはチョルテン(ケルン)が積み、上空には色鮮やかなタルチョが翻っていた。

夕食時にホテルのスタッフ全員が日本人初の登頂と祝ってくれ、支配人とシェルパの署名入り証明書をくれる。

## どうするにも出来ないはなし

木下 洋介

人事部勤務になって前任者から引継いだ一連の資料の他に鍵が一つあった。

「このキャビネットの鍵だ、面白いよ」

鍵の説明はそれだけだった。後で分ったことだが、それは社員の記録や資料を保管した耐火キャビネットであった。

引継ぎのあとしばらく忘れていたが、あるとき、このキャビネットのことを思い出し、開けてみる気になった。個人の資料といっても何がどのように入っているか、承知しておくことも私の仕事の一部であるからなどと理屈をつけて開け、まず私の分からと言いながら私のファイルを探した。私のファイルはすぐ見つかった。毛筆で書いた履歴書がまず目に飛び込んできた。これには苦勞したなあと往時をしのびながら入社試験の答案、作文、身上書、身元保証書が揃っていた。この他に身元調

査書があった。履歴書や身元保証書、身上書などは私が会社に提出したものだから記憶にあるが、身元調査書は初めてだ。指先が震えているようだ。

これらの調査書が赤い野のある興信所の和紙にタイプで打ってあった。小さくない印で「厳秘」という二文字はさらに見る者を緊張させた。喉が急に乾いてきた。

私が今手に持っている調査書はまちがひなく私を調査した報告書である。何が書いてあるか。

あの頃は今と違って身元調査は堂々で行われていた。アメリカ軍の基地の反対闘争は全国各地で行われ、首都近郊でも例外ではなかった。企業は急進的學生を締め出すために面接や身上書で支持政党を書かせ、踏絵を強いた。「君は砂川へ行ったかね」「いいえ、行きません」「どうして行かないんだ、若者なら行くんじゃないのか」「などとひっかけにかけような質問を繰返され、菓子折りを持って「調査が来たらよろしくお願ひします」と以前いた下宿へ頭を下げに行くなどという話も珍しくなかった。

この調査書を見た時からかなりの年数が経っているので記憶もさだかではないが、時間の経過以上に、調査書を読んでいくうちに出会った衝撃的な記述に、他のことは消えていってしまった。

調査書によれば、私は学内の演劇部で演劇活動をしたことになっている。私は驚くと同時に脳裡にある男の顔が浮かんだ。その男とは仲間というほどのつきあいではなかったが、同姓で語学のクラスで一緒だったこともある演劇青年であった。私はこの男と間違えられたのである。興信所の調査員が大学構内で一人の学生の素性から思想、信条まで調べ上げることなどどくだい無理なことである。

人がいなければ私は笑い転げたかもしれない。だが、すぐ笑いごとではないことに気がついた。ここでは演劇活動をしたかしなかったか程度のいわば人畜無害の話だが、ことによると人の一生を左右するかもしれない調査報告だ。調査員はどこで間違えたか、姓だけで取材し出

来上がったのだろうか。その過程で誰ひとり疑問をはさむものはいない。何が正で何が誤であるか誰も知らないのだから。

あれから何年経ったか。間違えられた男はその後どうしただろうか。「身元調査で君と僕が入替えられてねえ」といつてもピンと来ないだろうし、第一、人前でする話ではあるまい。

ことによったら私だって間違えられていたかも知れない。いや、間違えられてよかったかも知れない。そのおかげで入社出来たということさえあるかも知れないのだ。

確認の訂正も異議の申し立ても出来ない文書はその後どうなったか。私のあと何代目かの担当から焼却したと聞いた。無論、あの話は伏せたままで……。

この一件以降、私は、あるいは塞翁の塞の字は賽ではなかったかと思うことがある。

## デカンシヨ節考

金 京 法 一

この上ない書物の精読を強制される。

かつての旧制高校生にとって、弊衣破帽のバンカラ装束と、訳の分からぬざれ唄の高歌放吟がトレードマークで、「デカンシヨ節」もその一つであつたらしい。近代哲学者であるデカルト・カント・シヨウペンハウエルをもじつたもので、そう簡単に理解できるとは思えない西洋哲学を、知つたかぶりする当時の旧制高校生のエリート意識がうかがえる。

デカルトは近代哲学の始祖とも言える思想家で、「我思う、ゆえに我あり」、つまり「全ては疑わしいが、疑っている自分の存在は疑い得ない」という人間中心主義の元祖として高く評価されている。カントはドイツ観念論哲学の大成者として、後世批判を浴びながらも、依然教祖的存在で、日本の大学の哲学科に入ろうものなら、半年から一年はカントの『純粹理性批判』なる難解

シヨウペンハウエルは裕福な商人の家に生まれたが、大変な秀才であつた為、家業を継ぐ気があるのか父親は心配であつた。十五歳の時家業を継いでくれるなら、ヨーロッパ一周旅行に連れて行こうと持ちかけ、当時特定の人間にしか許されなかつた大旅行に出発する。しかし、世界は広く希望に満ちており、田舎の商人など若くして墓に入るようなものだと彼は思ったに違いないが、約束どおり家業を継いだ。やがて父親が他界すると、早速事業を他人に譲り、財産を整理して学問の道に入ることにした。彼は当時飛ぶ鳥を打ち落とす勢いの人気哲学者ヘーゲルを目の敵にしており、ヘーゲルと同じ大学で、同じ時間帯に自分の私講座を開設した。初日には数人の聴講者が現れたが、二回目は一、三回目以降はゼロという有様で、自然休講のやむなきに至つた。ただ大学は契約に基づき、その後十年間予定日には教室の入り口に「シヨウペンハウエル先生の哲学原論」という案内板を出していたという。大学教授としては失敗であつた

が、執筆には精力的に取り組み、この世に現れ出るものは全て人間の意志（欲望・エロス）の現れという、当時としてはやや過激な考えを盛り込んだ『意思と表象としての世界』を出版するが、反響は無く、本も売れなかつた。彼は生涯独身で、親の遺産を巧みに運用して生活に不自由は無く、行きつけのレストランで贅沢な食事をし、読書と執筆、そして散歩と趣味のフルートを吹く日々を送つたようである。出版後十年経つて改定を加えた第二版の出版を思いつき、出版社に手紙をかくが、「先生の著書はこの十年で三冊売れました。残りは手前どもの倉庫に保管してありますが、如何いたしましょうか」との返事であつた。

やがて還暦を迎え、シヨウペンハウエルは老人の為人世論のようなものを『余禄と補遺』という題名で出版した。これがベストセラーとなり、以後隠れた大哲学者として時代の寵児となり、ベルリンの王立アカデミーから招請を受けたりして、それまでの不遇を帳消しにする幸せな余生であつたらしい。しかし彼の死後、名前は哲

学史に残っているが、其の哲学は再び薄闇のかなたに消え去つたかに見える。

それにしても名声の確立したデカルトやカントと並んで、彼の名が何故ざれ歌の中とはいへえ登場するのであろうか。どうもその元凶は森鷗外らしい。外国留学という経歴とそれなりの肩書きさえあれば、雑学・浅学の知つたかぶりも通用する時代で、シヨウペンハウエルなど読んだ形跡は無いが、怪しげな外国雑誌の記事をもとにシヨウペンハウエルとはいかなる哲学者かをもつともらしく書いたらしい。ドイツでも厭世主義者・自殺論者・女性蔑視論者などと、とかく誤解されていたが、鷗外はまことしやかにその受け売りをやつたのである。とにかく難解で、理解できない向きには無味乾燥な形而上学のデカルトやカントに比べ、シヨウペンハウエルには何かひねくれものの美学みたいなものが感じられるのである。所詮鷗外も中身はバンカラ高校生程度ということかもしれない。

## 悠悠の記

児玉 忠雄

木枯しが吹き寒い日が続く。七十五歳と人生の折り返し点を遙かに過ぎ、古稀を経て喜寿へと向っている。

平均余命八十六歳といわれているから達観すればあと十年ほどが我が生ということになる。この年代は中国で言う白秋から玄冬へ、印度では林住期りんじゅうきから遊行期ゆぎょうきに当る。

中国の「五計」の中、生計、身計、家計は大凡目途がついた。これからは老計と死計である。自己実現の夢を追い続けながら自然体の身の丈にあった生き方で余熟をもって余生を生きたいものである。

それでこれから四つのことをしようと考えている。

一つは、「心の旅路」を辿る。これまでの心に残る風物・書籍を涉獵しきままな旅をする。昨年は長男・次男夫婦孫の三家族と故郷信州へ自動車旅行をした。今年は卒業五十周年記念に五月祭、駒場祭に行ってきた。年々

歳々花相似たり、歳々年々人同じからずの感を深くした。奥の細道・芭蕉の足跡、風の盆唄、四万十川なども訪れ、風光、名産、名酒など賞味したい。青春時代から感銘を受けた本、積ん読本も速読したい。

二つは、そろそろ身辺の整理に手をつけながら、そこから湧出する感慨や行跡の思いの断片を綴り「自分史抄録」といったものを纏める。

三つは、自分の生きた時代・社会について「知見の総括」を試みる。

「政治の混迷劣化」……………一九五五年体制の自民党独裁体制の功罪。

「官僚制の機能低下」……………一九四〇年体制・中央集権官僚制の崩壊再

生。

「財民間の繁栄と歪み」……………高度成長と繁栄、バブル崩壊後遺症、グローバル化への模索。

「マスメディアの再生」……………過度の視聴率本位・営利主義、ポピュリズム

ム、バラエティ化の偏

向是正、レエゾンデエ

トルの復活。

「民の覚醒」……………官尊民卑から民主への

覚醒転換、教育の再

生。

しかし、これ迄貯めた本・雑誌、段ボールに詰まった資料の山を見て溜息をついてしまう。

四つは、予測不能の人生で、誰にも公平確実にしかも突然訪れる死への考え・覚悟を定め、自らの「死生観」を探りたい。それでいろいろな書籍・資料を繕っている。

人生日々生きていく上の手掛りとなる「杖言葉」というものがある。我々老年黄昏の日々、余熱ある余白の人生では右顧左眄せず自分流に自分になりきって生きていくしかない。

吾が生既に蹉跎たり、所縁を放下すべき時なり（『徒然草』）である。極力無為自然、簡潔質実を旨とし、愛と希望とサムマナーをモットーに割り切つて生

きよう。

そしてやがて突如人生の閉幕を迎える。名僧仙崖は、  
死にきて志ぬ時ならハ志ぬかよし、志にそこなふて死  
なぬ猶よしと喝破している。そんなときの心境はどん  
なであろうか。

旅に病んで夢は枯野を駆け巡る（芭蕉『笈日記』）  
悲しまじ悦びもせじとにかくに

終には覚る夢の世の中（徳川家光）  
所詮、現世も来世も  
全ては夢幻と覚り終る  
のであろうか。



## 帝大野球部の思い出と近未来優勝への期待

黒崎 昭二

私は昭和九年に東京渋谷の大同小学校（現在東急デパート本店の在るところ）に在学中であった。海軍の父が予備役になって横須賀から東京に転居したからである。

小学校では朝礼の前に三十分ほど早く行って、校庭でワンバウンド野球のゴムマリを、赤白運動帽子を右手の拳に巻いて打って遊んでいた。三角ベース（ホーム、一塁、三塁）野球である。低学年のうちにはよかったが、高学年になるにつれて、グローブやバットそしてスポンジボールで遊ぶようになり、狭い校庭では満足せず、放課後に、一高正門と井の頭線の間の細長い原っぱがホームグラウンドになった。数人が集まりキャッチボールやノックをしたり、人数が多ければ敵味方に分かれて四角ベースをしたりした。高下駄にマントの白線帽子をかぶった一高の学生や黒い学生服で角帽の帝大生を仲間に入れて遊んだ。みんなヒゲをはやした小父さんだった。その中

に帝大の久保田泰二投手（昭十三年経）もいた。数年前に新潟県物産館で本を読んでいたら、はからずも、高田中学で名投手であり、弘前高校から帝大へ進んで活躍したという記事を見つけた。新潟県人の二世である私―両親が高田市（現上越市）の出身―は嬉しくなった。

チビ野球少年達は、神宮球場へよく行った。省線渋谷駅前の東京パンでパンを買って市電に乗り青山四丁目以降りるや駆足で外野席売場の一番前に並ぶのである。

東京六大学野球が全盛期で『野球界』という雑誌には早慶明の花形選手の写真が載っていた。チビ野球達は誰かのお兄さんの母校である早稲田を応援したものである。小遣いが少ないから内野席には入らず、外野の芝生席の最前列に陣取り黄色い声をあげて「若原!」「村瀬!」など叫んだものだ。早稲田ファンの小母さんが子供達にキャラメルやチョコレートを配ってくれたのも嬉しかった。

帝大は残念ながら弱いので応援の対象にはならない。

第一、大きな淡青の旗はあるものの応援歌がない。拍手だけなのである。これでは意気が上がらない。

六大学の応援は整然として気持がよい。一番うまかった



のは「白雲なびく駿河台——」の明治だ。「フレイフレイ杉浦!」「カットバセ、カットバセ、常見!」と選手個人の応援のほかに、口笛を吹いて応援歌を吹奏することもある。早稲田の校歌「都の西北」も慶応の応援歌「若き血」も神宮球場で聞くとすばらしい感動を覚えた。

昭和二十五年頃、東大も応援歌「ただ一つ」が出来て、私の卒業時には神宮でも唄れて歌を歌えたものである。弱い東大でもたまには応援しないといけないし、たまには勝つ。でも殆んど毎シーズン最下位であった。

さて、東京六大学野球は、昭和十一年（小学校三年生の頃）に父に連れられて四月二十九日に慶帝戦を見たのが最初である。慶応中田（名門明石中学出身）と帝大久保田が投げあった。中盤まで、○対○だったが、試合が終わってみれば、三対○で慶応が勝っていた。当然。

帝大は好投手が出るし強打者もたまには出るが、好機に打てず、打線がつかえず、得点にならない。リーグ戦で接戦であっても試合が終ってみれば大抵競り負けている。連敗が多い。久保田投手の後、由谷投手（一高、帝大、戦死）の時は十試合中二、三試合位は勝っている。

た。

戦後復活の昭和二十一年春には、東大は山崎諭投手（昭二十五年文、山形高）が頑張つて慶応大島投手（名門岐阜商）と投げ合い、一―○で負けて惜しくも二位になったことがある。この時は各校総当り二試合のみであった。

更に引き続き岩佐守投手（昭二十四年工、旧制静岡高）や島村俊雄投手（昭二十五年法、陸士から東大へ）の時代は勝つことがあり、最下位を低迷しなかった。この後蒲池信二投手（昭二十八年経、旧制成城高）の時も勝星があった。ところがそれから後は連敗の時代が続き始めた。東大は、好投手は出て来るが、残念だがたまに首位打者は出ても、チームとして打力が弱くて勝ち星に結びつかないことが多い。二百連敗近くの時もあった。最近も引分けを挟んで四十連敗をしている。

この夏（平成十九年）の甲子園で、予想もしなかった佐賀北高校（公立、野球は非名門）が優勝した。合理的な猛練習による成果だと思う。東大も、監督以下創意工夫をこらして実のある練習により、近い将来、六大学では非とも優勝という快挙をなして欲したい。

## 鷗外の処世術小説『舞姫』

清水 勝

森鷗外は四年間のドイツ留学から明治二十一年九月八日に帰国した。帰国後は医学関係の論文を発表しているが、翌年からは西洋文学を「読売新聞」に紹介するなど、の文学活動を始め、明治二十三年一月にドイツ留学に取材した処女小説『舞姫』を発表した。

津和野藩の御典医であつた森家の長男として、六歳から漢学を学び、八歳ではオランダ語、そして十一歳の時には東京に出てドイツ語を学んでいる。その後東京大学医学部を卒業して陸軍軍医となり、エリートコースまっしぐらに進んできた森林太郎（鷗外の本名）は、まさに森家の期待を一身に担い、ドイツ留学へと向つた。

留学先ドイツで、鷗外は医学以外にも西欧の異文化に接し、自由、自我、主体性の存在を余すことなく感じ取つたものと思われる。それは『舞姫』の主人公太田豊太郎が踊り子エリスとの職を賭した恋愛で示されてい

る。しかし、その結末は余りにも悲劇的で、豊太郎の意思・主体性がぼやかされて描かれている。

すなわち、豊太郎が高熱で意識不明の時に親友相沢謙太郎がエリスとの関係を清算してしまい、それが原因でエリスが精神病を患い、豊太郎が完治したときにはエリスとは会話すらしていない。これでは自我に目覚めた豊太郎のエリスへの愛の悩み、決断が全く描かれていない。

この小説の背景には、鷗外が帰国して二週間後に、ドイツからエリスという踊りの上手な女性が鷗外の後を追つて日本に来たという事実が絡んでいる。さすがの鷗外も帰朝したその日に、父親にエリスのことを告げており、母親の心配している様子は鷗外の妹小金井喜美子が『森鷗外の系族』に記している。

その解決に当たつたのは、義弟小金井良精（妹喜美子の夫で東大医学部教授）と弟森篤次郎であつた。文字通り森家挙げての対応である。そこにもう一人、重要人物が関わっている。鷗外の親友で、山縣有朋と近い人物賀古鶴所である。

エリス事件は陸軍省のみならず、エリート官僚間では

何かと噂になっており、この取扱い次第では森家の期待の星である鷗外の立身出世計画は大きく狂いが生じる。自由・自我に接してきた鷗外にとつても、日本での現実、森家での長男の位置づけは無視できず、エリスとの関係を無難に処理せざるを得ないと、帰朝する長い船旅の中で考え、その延長線上に『舞姫』の構想を描いていたのではないだろうか。

事件を問題視させないために『舞姫』の登場人物は巧妙に仕組まれている。太田豊太郎が鷗外をモデルとすれば、豊太郎の親友相沢は鷗外の親友賀古であり、相沢の仕える大臣天方伯は、その音感から、当時の陸軍の大御所であった内務大臣山縣伯その人がモデルである。

小金井良精と篤次郎がエリスの気持ちと和らげ、十月十七日に何事もなく帰国させることに成功したが、一方、親友賀古鶴所は山縣有朋に事情を打ち明け、助力をお願いしていたのである。当時は男性が妾を持つのは当然という風潮もあつて、エリス事件に山縣も寛容であつたのかも知れない。こうして『舞姫』の構想は現実化した。

『舞姫』を読んだ当時のエリートは、鷗外のエリス事

件を山縣有朋も知っており、天方伯＝山縣伯は鷗外を許し、不問にしている、と思つたことは容易に想像できる。

やがて噂話も鳴りを潜めた。鷗外の保身は成功し、『舞姫』による世論操作そして処世術は見事なものといえよう。

さらに、鷗外による仕掛け・演出がもう一つある。鷗外は『舞姫』を書き終えた原稿を最初に読ませたのが、親友賀古鶴所である。賀古は「己の親分気分が良く出ているとひどく喜んで、ぐずぐず陰言をいう奴等に正面からぶつけてやるのはいい気持ちだ」と言つた（小金井喜美子『森於菟に』）。次に篤次郎が家族の揃つたところで朗読している。これにより、エリス問題で迷惑を掛け人々に同意を得た上で、「国民之友」に『舞姫』を発表したのである。この気遣いと巧みさには脱帽である。

鷗外の最初の小説であり、名作といわれている『舞姫』が、実生活の危機を打開するための手段として書かれたことに啞然とさせられる。しかしながら、鷗外自身はエリスを棄てた後悔と、中途半端な自我の描き方の反省が、その後の鷗外文学の原動力になつたのである。

かくして、鷗外は文豪かつ軍医総監にまで上り詰めた。

## さらば宇都宮競馬

田谷 英浩

宇都宮競馬場が閉場した。最盛期には全国に二十七ヶ所あった地方競馬場も今ではその内十ヶ所近くが閉場、今回の宇都宮の閉場をもって北関東にあった競馬場は全て姿を消すことになった。

初めて宇都宮を訪れたのは昭和六十二年、あれから二十年、年に数回、多い時は月に一回はドライブがてらここを訪れた。

競馬を含め、競輪、競艇などのギャンブルには全く興味が無かったが、故山口瞳氏の名著『草競馬流浪記』に触発されて隠れた地方競馬ファンになっていた。

宇都宮行きを最も夢中にさせてくれたのは、中央でも活躍した「ベラミロード」という牝馬の登場であった。地方馬が中央で快進撃する、判官最負もあつて、この馬と騎乗する内田利雄という騎手のファンになった。



ところで最終日の宇都宮競馬場は平日にもかかわらず最盛期並みの六千人を超える入場者で超満員。ローカル線の廃止や旧型列車の運転廃止が近づくと、俄か鉄道ファンがカメラ片手に殺到するように、この日は競馬ファンらしからぬ人相、服装の若者やTVクルー、カメラマン、新聞記者も加わって大盛況。こんなにファンがいるのなら日頃からもつと来てやったらよかつたじゃないかと文句を言いたくなる。

今朝の地元紙によると宇都宮競馬場の所属馬五百頭の内、移籍先が決まっているのは約半数、残り半数は行き先が無く、飼育経費が掛かるため殺処分される可能性が高いという。

走らせるために生まれ、育てておいて競馬場が廃止になるからといって馬を殺す、こんな事が許されるのか。日頃動物愛護を唱える団体は知っているのか。何をしているのか、と言いたい。特にこの日のレースは最後の直線で差してくる馬が多く、最期の生き残りをかけた奮闘に思えない。

馬も大変だが、人間も大変だ。調教師四十四名、騎

手十七名、厩務員百八十五名の直接競馬関係者、年七、八十日の開催日に従事する三百人近い業務関係者、さらには売店のオバサン、新聞売り、警備員、はてはダミ声をはりあげる予想屋に至るまで、この人達の雇用だつて心配だ。これまで地域経済に寄与してきた競馬が一転して、大勢の職場を奪う。



そしてとうとう最終レース。一着賞金六百万円の「とちぎ大賞典」。四歳以上の古馬による二千メートルのG1レースである。

場内の実況アナウンサーの声も最後の放送とあつて興奮で上ずっている。向う正面からスタートした十一頭が最初の正面スタンドを通過する頃には観客は総立ちで大声援と拍手を送る。目頭を押さえている人も多い。各馬もこれに応えるかのように力走する。さすが二千メートルの長距離戦、縦長の後方を進んでいた大本命フジエスミリオールネが最後の直線で馬群をこぼす抜きして驀進、それを内田利雄騎乗の三番人気ヤマニンバリーが猛追して二着するという見応えある好レース。

テレビで見る中央競馬のG1レースのような迫力ある展開を最後の最後にやってくれた。勝ち負けはともかく大満足の最終レースであった。



最後に閉場セレモニー。関係者挨拶のあと、先程まで馬が走っていた馬場をファンに解放して歩いてもらおうという計らい。十七名の騎手全員もそれに加わりファンと交流。色紙を用意してサインを求め人、甲子園よろしく容器に砂を詰める人、騎手と記念撮影する人……。それにしても砂の深いには驚いた。平均九〜十cmある。足をとられて人間では到底走れない。青森県・六ヶ所村の砂であるという。発馬機のところまで歩く。遠くで見えてどういう構造、仕掛けになっているのか分からなかったが、触れてみて、さわって見てなるほどと合点する。

こんなイベントがあるならカメラを持ってくれば良かったと後悔する。夕闇が迫り、風が冷たい。後ろ髪を引かれる思いで宇都宮競馬場をあとにする。

## 霧ヶ峰吹く風になつて

鵜飼 直哉

毎年七月になると霧ヶ峰へ行く。父の弟の鵜飼照彦の墓参りである。

日本のグライダーの草分けとして名を残した照彦叔父は昭和十三年、中国へ出征中に野戦病院で急性肺炎のため亡くなった。二十三歳の短い生涯であった。

霧ヶ峰高原の強清水バス停のすぐ脇に、高さ四メートルほどもある堂々とした「鵜飼照彦君記念之碑」が聳えている。その台座の正面に縦三十センチ、横六十センチのプレートがはめ込まれており、手紙の一節が照彦叔父の筆跡のまま刻まれている。他界する一カ月前に私の祖父宛に書いたものだ。二十三歳の青年の文章とは思えない。

常々イツカハ Glider デオ國ニ捧ゲル身ト覚悟シテオロ  
マシタ照彦、今聖業発展ノタメ一人ノ兵隊トシテ山西ノ  
山奥、応県の土ト化スヲ得バ、コノ上ナキ名譽ト存ジマス。  
幸イ御國ノタメ御役ニ立ツ事アレバ、霧ヶ峰吹ク風トデモ  
ナッテ必ズ山ニ帰リマスト御伝ヘクダサイ。

27日夜、張家口ニテ

「霧ヶ峰吹く風トデモナッテ必ズ山ニ帰リマス」との文字を見る度に私は今でも涙が止まらない。

ここで毎年「鵜飼照彦君記念碑への献花式」が開催される。七十年経った近年でも、霧ヶ峰グライダー研究会

(K G K) の O B を中心に、数十人の方が献花のために集まつて下さる。

照彦叔父がたいへん可愛がりグライダーに乗せてもらったという妹の美千代叔母が他界してからは、私が遺族代表として参加してきている。当時 K G K の指導教官であった叔父の教え子の O B たちが、口角泡を飛ばして語っている昔話が楽しい。八十八歳、九十歳になられた方々が青春時代の思い出を繰り返し語っておられる。

昭和十二年生れの私は、照彦叔父のことは全て聞き伝えである。作家の藤富康子さんが平成二年に書かれた伝記『風になつても』（あざみ書房）を読むうちに、照彦叔父のグライダーに賭けた姿が分かってきた。

『風になつても』には大体次のように書いてある。

『小学校の頃から模型飛行機に夢中になつていた照彦は、勉強はそつちのけで成績は下がる一方であつた。芝中学四年生のとき、「日本グライダー倶楽部」の設立を知つて、早くも練習会員になつた。「初めてグライダーに乗つた思い出」という文章を十五歳の照彦が残している。

中学生ながらすでに操縦技術は体得していた。

その当時、後に第五代中央気象台長になり「お天気博士」と呼ばれた藤原咲平氏が「霧ヶ峰グライダー研究会」を発足された。大学受験中であつた照彦は藤原先生の技術助手になる。日大専門部工科機械科へ入学したのも、ひとえにグライダーに必要な知識を身につけるのが目標であつた。

この時代のグライダーは、自動車や強力なウインチで一氣に舞い上がる現代とは別で、杭に固定した機体を、ゴム糸を寄り合わせたロープを使って十数人でV字型に引つ張り、延びきつたところで杭を外すという素朴な仕掛けだ。だから緩やかなスロープと適度な風向きのある霧ヶ峰が最適であつたそうだ。それでも地面すれすれに

飛ぶのがやつとで、上昇気流に乗って空高く飛ぶことは高度な技術を要したとの話である。

中央高速を利用すれば三時間も要しない霧ヶ峰高原であるが、当時は夜行列車で諏訪に着き、十五キロの山道を歩いて上がる。グライダー本体は東京で解体して牛車で運び上げるのだからたいへんだ。ここに各地から応募した二十人ほどの練習生を相手に初歩からの練習をした。照彦は大学一年生ながらすでに指導者であつた。

この後、主任教官としての照彦の業績は華々しい。昭和九年には滞空十六分三十秒の日本記録を達成。続く筑波山頂の滑空テストでは高松宮、林銑十郎陸相等の前で二十四分三十秒の記録を出した。

卒業論文は高級機ソアラ「霧ヶ峰鷹一号」の設計であつた。「鷹」は妹の美千代の命名によるものだそうだ。

学友が卒業してゆくなかで、一人グライダー一筋の道にはいり、照彦は次に「鷹一号」の製作に専念した。

昭和十一年に朝日新聞社主催の第一回全日本グライダー大会では十二万人の観客の前で自ら設計製作した「鷹」でソアラ部門での優勝を果たした。』

藤富さんはたまたま知人から照彦叔父の話聞き、彼が現代社会には見られないような青年であったことに非常に興味を覚えられたそうである。美千代叔母と一緒に献花式に一度参加して「霧ヶ峰吹ク風ニナツテ」の絶唱に強い衝撃を受け、伝記を纏めて下さった。

「あとがき」にはこう書いてある。

『一本の白い菊を捧げる・・・ただその平安なよろこびのために、西から東から、初老を過ぎた男たちが真夏の霧ヶ峰をめざして登ってくるのです。半世紀余りも前のここで、彼らは溢れるほどの若さを輝かせながら、当時最先端のスポーツ「グライダー」に青春を謳歌したことでしょう。まだ日本も若く、そして貧しく、またすべてに不揃いな社会であったとしても、未来に自由な展望を描けたよい時代であったのではないでしょうか』

しかし、昭和十年代にはグライダー技術はスポーツから離れ、軍事目的へ変わってゆく。そして昭和十二年二月、一通の召集令状を受けて叔父は出征してしまっ

た。その四月生れの私のことは、多分父が手紙で知らせてはくれただろうが、叔父は覚えていないだろう。

七十年前、夢多くロマンに溢れた素晴らしい人生をもにした叔父とその仲間たち。その生きざまを知るにつけ、私は感動とともに強い共感を覚える。叔父とその甥とは何か共通したDNAがあるのだろう。もしも生きておられたら、私の最も頼りになる相談相手になって貰えたに違いない。

今年（平成十九年）の献花式は例年よりも二週間ほど早い七月十四日であった。ニッコウキスゲは未だ満開にはなっていない。その上、生憎の台風接近で激しく雨が降っていた。開催中止になるかも知れないし、この天候ではお見えになる方も地元の方だけになるだろうと思っ

たが、私達が欠席するわけにはいかない。ともかく出かけることにした。

驚いた。三十人以上の方が大雨の中を遠路をものともせずに来て下さった。いつもの通りに献花を終えたあと、藤富さんのご提案でラジカセに合わせ「千の風になつて」を全員で何回も唄って今年の献花式を終えた。



「のあ」とは何か。

まさか「ノアの箱舟」の「ノア」ではなからう。

牛坊 貞夫

近年の若い世代が子供につける名前に違和感を持って仕方がない。ふりがなを見ないと読めないものが多くなった。例は数かぎりなくあるが、余計なことを言ってしまうとどこどうなってプライバイシー侵害などという問題が起きないとも限らないので、新聞に載った実例を一つだけあげる。元「モーニング娘」のメンバーだった二十歳の女性が女兒を出産して「希空」と命名したという。この母親となった女性の名前が「希美」だそうなので一字は親の名前からとったのだろうが、「希空」を何と読む（読ませる）のかが、小さな字のふりがなを、目を凝らして見るまで私にはわからなかった。「のあ」というのだそうである。おそらく母親の女性の名前も「きみ」などというありきたりのものではないのだろう。

「のあ」とは何の意味で、そもそもこれは何語なのだ

らう。

名前など記号のようなもので何だっという考えもあるだろうが、私には抵抗がある。名前に使える漢字の制限が緩やかになっていることはいいことだが、「読みかた」は勝手に決めてよい（らしい）というのには首をかしげたい。亀田三兄弟の一番下の「和毅」を「ともき」と読むことはどれだけの日本人が知っているだろうか。しかし「希空」より一世代前の名前だからある種の「落ち着き」は感じる。

名前もそうだが、日本人が漢字の意味を理解せず（勉強せず）、粗末に扱い、そして日本語そのものがまことにいい加減になっていることは、私がここで言うまでもなく多くの人が感じ、それを言っている。このまま行く」と正しい日本語を「きれいに」話せる日本人は化石のように扱われる、ごく限られた人たちだけになってしまうのではないかとさえ思われる。

私は仕事があつて毎週横浜市営地下鉄に乗り、新横浜から東海道新幹線と北陸線を利用して金沢を往復す

る。新幹線のホームの電光掲示には「電車が来ます」と出るが横浜市営地下鉄の同じものは「電車が参ります」となる。なぜ電車が「参る」のか。新横浜駅のテープのアナウンスは「この電車は途中豊橋と名古屋から先は各駅にとまります」と言う（私は毎週同じ岡山行き「ひかり」に乗る）。このアナウンスがおかしいことに気づいてかどうか、別の声のその場での放送もあり、こちらは「この電車は途中豊橋と名古屋にとまり、名古屋から先は各駅にとまります」と言う。JRの駅のポスターなどはどこか専門の会社に委託されているのだから（何かの宣伝の「駅スパート」などというのは駄洒落が過ぎていただけないが）、駅や車掌のアナウンスなどの日本語は誰も教育、指導していかないのだろうか。新幹線では余計な車内アナウンスはさほどなくて良いが、米原、金沢間の北陸線の特急の車掌のアナウンスはやめてくれと言いたくなるほど頻繁でうるさく、間違った敬語まじりの、言ってみれば慇懃無礼なアナウンスである。また新幹線でも在来線でも同じだが、主な乗換駅が近づくところ

「○○駅にとまります・・・○○号にお乗換えの方は」

と案内がある。問題は・・・のところに一瞬の pause があることである。ここでマニュアルか手元のメモなどを見るのだから、「とまります」で切られると日本語が不自然で仕方がない。第一にここで「とまります」と「ます」をつける必要はないのである。

スポーツ新聞の見出し（最近は大新聞といわれるものにも同じ傾向がある）などの馬鹿げたゴロあわせや駄洒落は見苦しい。スポーツを実況放送するアナウンサーの日本語はお粗末だし、ましてや解説者といわれる人は日本語などきちんと勉強したことの無い人たちであろう。

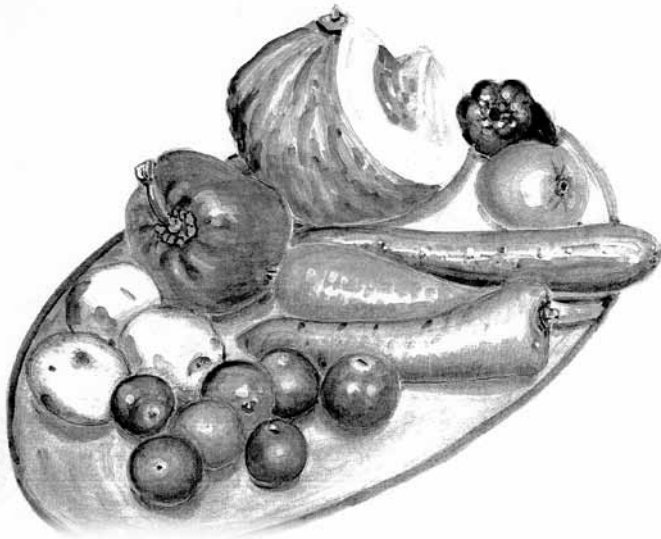
活躍した選手へのインタビューは、何か英語の流儀を間違つてそのまま日本語で言っているようなものが多い。インタビューが選手に向かって「今日は大活躍されました」と言う。私なら「ええ。それで?」「何を答えばいいですか?」と言いたくなるような声のかげ方である（しかし未だかつてそうした変わった? 選手を知らない）。

テレビで何か聞かれた子供が「楽しかった」「面白

かった」「おいしかった」などと、要するに会話、文章を完結させるのではない答え方をするのも気になる。たまに「・・・なので大変良かったです」などと「です・ます」を使ってきちんと受け答えする子供が出てくるとホッとします。

電車的话题を一つ付け加えてこの駄文を終わることにしよう。二人がけ、三人がけの席の私の隣が空いていたとする。途中から乗ってきてその席に座ろうとする人で、黙ってぶすっとして座る人、「すみません」とか「失礼します」と言つて座る人、連れや自分の子供に向かって「ここここ。早く座って」などと私のことなど眼中にもなく声高に呼びかける人、いろいろである。一言「空いてますか？」とか「すみません」と声をかけられないのは、犬を散歩させて糞の始末をしない人、タバコを道路にポイ捨てする人と同類と私は思うことにしている。

日本人は言葉もマナーもモラルもだめになった。そんなことを考えながら私は今日も電車に乗る。



## 生田の森の物語

中川路 明

眠い眼をこすり、テレビをつけた。三宮そごうが崩れ、隣りのビルが横倒しになった画面に、アナウンサーが「神戸を大地震が襲い、街はほとんど破壊され、物音もなく静まり返っています」と叫んでいる。

崩れた瓦屋根、壁、電柱、電線が折り重なる無残な生まれ故郷の町が映された。次に、生田神社の朱の拝殿の屋根が地に這っている。屋根を支える柱を全て抜き去ったような信じられない映像に、体が震えた。

千八百年前、神功皇后の新羅外征の折、神戸の沖で船が進まなくなったとき、生田神社の祭神が、自分を生田の地に祀れと命じた、と日本書紀にある。生田の住民が社領を守る神の封戸（荘園）を賜ったのが、神戸の地名の由来である。

阪急三宮駅西口からまっすぐ北に生田筋を数分上り、朱の大鳥居をくぐると九千坪の神域が広がる。中央に杜

大な朱の社殿があり、その奥が生田の森で、樹齢三百年の巨木が鬱蒼と茂っている。この神社のご利益は、縁結び、厄除け、商売繁盛で、市民に慕われ参詣人が多い。

私は物心がつく前から「初詣は生田さん」とお参りしていたようで、明るい朱のお宮さんとの強い印象を持っていた。一九三八年、小学校二年生のとき、私たちが多くの学友を失った関西風水害では、神社裏の布引山の土砂崩れにもかかわらず、森に守られ被害は少なく、「さすがは生田さん」と感嘆した。

戦争が広がるとともに、日の丸に武運長久と大書した幟が生田筋に立ち並んだ。四三年の学徒出陣では、学校の運動部合同で、学業半ばで戦地に赴く先輩を生田さんで壮行し、神社から三宮駅頭まで「いざ、戦わんかな時到来」と応援歌を歌って行進した。

一九四五年六月五日、神戸は上空襲で灰燼と化した。米軍は神社を重点目標とし、境内だけで六百発の焼夷弾を受けた。ご神体を御羽車に乗せさまよい逃げ、唯一つ残った弁天さんの祠に移し、自分たちは池に飛び込んで助かった苦勞話を、前の宮司から伺った。

戦後、物不足と高度成長の五十年間、営宮と重ねた市民の努力で、失った全ての建物の再建の花が咲いた。

その花を甞るように、九五年一月十七日早朝五時四十六分、六甲の大地が裂けた。倒壊した居宅から辛うじて外に出た神職は、砂塵の舞う境内に崩れた拝殿を見て喪心、立ち竦んだ。本殿の前に立つ前宮司の父の幻に、「一日も早くお社を再建せよ」と叱咤されたといまの宮司は言う。

倒壊した拝殿の屋根を頭で支える狛犬の写真が全世界に伝わった。各国の音楽家の救援コンサート、根拠地を神戸に移し初優勝したオリックス球団と、内外各方面からの寄進や義援金が寄せられた。粉々になった朱の大鳥居はじめ本殿、拝殿、楼門が新しい威容を現わす。二〇〇一年、建立千八百年を祝った。

そして今春（〇七年）、藤原紀香と陣内智則の挙式の大パーティーが起こる。紀香さんは学校構内に生田さんを祀り、校歌で「朝な夕な生田の神を拝みて」と歌った神戸の親和女子大の卒業生である。本人の切望で、昨年十二月に結納式、この二月十七日に結婚式が行われた。

十二単に束帯の古式に則られた式は、警備のため予定は極秘、境内は家族以外は二重に巡らした紅白の幕に閉ざされ、その状況は報道されなかった。

先日、宮司から面白い後日談を聞いた。式の当日、早朝紀香さんから「弁天様にお参りしたい」と突然言われた。女優の彼女が芸能の女神の弁天様をお参りして不思議はなかった。生田池に囲まれた生田弁財天は、先の空襲でご神体を守って頂いた特別のご加護がある。二人がお参りした後、記念に社を修復、生垣、橋を整備し、六月に落成した。吉本はじめ芸能人の参拝が続き、工費はすぐに回収できたといわれる。

戦後、信仰心の低下から神社は疎かにされ、収益源の結婚式場が教会に人気を奪われ、水害、震災、震災と相次いだ災難に、生田さんも苦しい財政状態にあった。紀香マジックで、結婚式、初詣はもちろん、神戸の新名所としての修学旅行、観光に期待を膨らませている。

最後に宮司は「多くの災厄を地元の力で乗り越えた『甦りの社』として、日本人の心の復興に尽くしたい」と力強く結んだ。

## ファン・ボイ・チャウと東遊運動

中村 爽

ファン・ボイ・チャウ（潘佩珠）は越南国（ベトナム）最後の王朝となる阮朝の時代、二十世紀前半期に、フランスの植民地とされた祖国の反仏独立運動に身をささげた人物である。ファンの自伝、「潘佩珠自判」を読み、彼が明治の日本と思いのほか深いかかわりがあったことを初めて知った。「自判」によって、その生涯と日本での活動の一端をたどってみる。

一八六七年、越南中部の農村で生まれたファンは、寺子屋で漢学を教える父のもとで育ち、少年時代にフランスの侵略を見て、祖国の独立と自由奪回を志す。成人して私塾を開き、文筆家として活動。文名を慕い、多くの学生が集まる。後のホー・チ・ミン、当時十歳の少年グエン・アイ・クオックも学僕の一人だったという。ファンは「この時期に抗仏革命闘争の素地を作った」と述べている。「一大暴動を起こして宿敵フランスを追放し、

立憲君主国を樹立する」のを目的として、革命政党「維新会」を結成する。運動の支援を外国に求めることを図り、候補国に「同文同種であり、新進気鋭、且つ強豪大帝国内シアと戦い赫々たる戦果を収めた日本」を選んだ。

一九〇五年、日露戦争の日本海海戦で大勝した直後の日本に密航し、犬養毅や大隈重信などの政府要人や知識人たちの知遇と協力を得る。在日中、「越南亡国史」、「海外血書」、「勸青年遊学」などを著し祖国の実情を訴え、国の将来を担う越南青少年の日本留学支援運動「東遊運動」を推進。これに応じて来日した若者たち全員を東亜同文書院が受け入れ、一般教養科目、日本語の授業に加え、軍事教練が行われた。一九〇七年には留学生の数は二百名を超えたという。犬養などの親身な後援があったとは言え、百年前の日本では画期的な出来事だったに違いない。こうして「東遊運動」は順調に進展した。ところが、一九〇八年、フランスは日仏修好条約のつとより、日本政府に在留越南人革命家の追放と留学生の解散を要求してきた。当時の桂内閣はこれを受け入れて国外退去命令を出し、「東遊運動」は挫折する。

ファンは初めて訪れたときから、日本に特別の好印象と親近感を持ち、大きな期待を抱いていた。初対面の大隈重信、犬養毅との会談は長時間にわたり、肝心なところはすべて漢字の筆談だったが、満足に意見の交換ができた。ファンは両政客の高い見識に感銘を受け、一方、彼の学才と気概は列席の人々を驚かした。同席者の国会議員が「貴国人で我が国の朝野の名士と膝を交え話し合ったのは、潘先生をもって初めとする」と書いて手渡してくれたとある。さらに、彼は市井で出会った親切な警官、鉄道の駅員、人力車の車夫などの例を挙げ「強国の政治とその国民の程度はただ驚くほかはない。日本と我が国とは天と地の違いがある」と感嘆している。「東洋の君子国」とまで言われた「古き良き日本」をしのび、そのころの輝きを失ったとも見える今の日本を省みて、面はゆく思った。

国外退去命令を受けたファンは「前途暗澹、時運まさしく我が革命運動に背を向け、人力のいかんともせん術なし。これも日仏協定の影響なり」と達観するが、無念だったに違いない。当時、日本としては欧州列強との協

調はやむを得なかったにせよ、植民地支配を逃れて救いを求めてきた友人を裏切る結果となってしまった。それでも、彼は「私の生涯のうち（日本の三年間は）最も華やかな幸福な時代で、為すこと成らざるはなく、今思えば人生の最も得意な時代であった」と述懐している。

日本を追われたファンは中国を中心に活動するが、苦難の時が続く。一九一三年以降、要人暗殺、反仏暴動、爆弾テロ事件などの容疑で、欠席裁判で二度死刑を宣告される。一九二五年、ついに上海で逮捕、ハノイに護送され、裁判で三度目の死刑判決が下る。しかし、民衆から恩赦要求の声が高まり、終身刑に減刑された。フエの香河のほとりの小屋に軟禁され、そこで十五年の孤独な余生を送り、一九四〇年に没した。七十三年の数奇な生涯だった。

現在、ベトナムの中等教科書にファンは革命の志士の一人としてホー・チ・ミンと並んで記載されている。後に植民地主義に同調した日本にくみした点で評価はやや低いようだ。彼の眠る墓はベトナム中部の古都フエ市郊外にあるが、日本人の墓参者はまれである。

## 歴史と真実

鳥海 博

識者間で「歴史教育」が取り沙汰されています。幼時に刷り込まれた情報は、容易に消えませんが、また、未永く真実として信じられますから、特に小・中学校におけるそれは、大変重要なテーマです。大袈裟に言えば、将来の国民の心性が幼少時の歴史教育で形成されるとさえ言えそうです。最近の中国の対日感情の悪化は、三十年前からの歴史教育に見られる日本観にあるとも言われています。確かに、歴史教育が人間を形作るということには、思い当たる節もありますので、自分自身の「被歴史教育」を一寸振り返って見ました。

私は終戦の時に小学校四年生でした。ですから、「歴史」はまだ学校での学習科目ではなく、戦前の学校教育における日本歴史は知らない訳です。いわゆる皇国史観に基づく歴史が小学生にも教えられていたんでしょ

ね。「・・・金鶏輝く十五銭、栄えある光三十銭、ホウヨク高いな五十銭・・・」なんて、紀元二千六百年の奉祝歌の替え歌を、意味も分からずに歌っていました。勿論、正規の国史は学んでいませんが、大国主命の話（因幡の白兔）とか、八岐の大蛇と須佐之男命その他著名な日本神話については、御伽噺として聞き知ってはいました。

戦後五年生になって初めて、日本の歴史を学びました。が、ご存知でしょうが、それは『国のあゆみ』というタイトルであって、「国史」でもなければ「日本史」でもありませんでした。歴史の教科書のタイトルは、この際不問に付しますが、内容は、想像するに、戦前のものと相当に異なっていたものと思われれます。天照大神も神武天皇も出てきませんからね。ピテカントロプス・エレクトス辺りから歴史が説き起こされてはいたかどうか、記憶にありませんが、石器時代は出てきましたし、次いで縄文時代や弥生時代も出てきました。そして、いつの間にか、聖徳太子の時代へ一足飛びでした。仏教を重ん



じ、「十七条憲法」を作り、天皇にならずに摂政として推古天皇を助けたなど、それは真実でしょうが、今にして思えば、随分と一面的な教え方だったなあと、感じてゐる次第です。

「十七条憲法」で教えられたのは、「和をもって貴とすとす」であり「篤く三宝を敬え」です。新しい宗教である仏教を人民の心に植え付け、政治の中に取り込み、争いごとの無い平和な社会を作り出そうと言う理想はよく分りますが、十七条憲法は、後年よく読んでみると、ただそれだけを説いているわけじゃありません。「お役人は朝早く出勤しなさい」とか「午後早々に（仕事をしないで）帰ってはいけない」とか、人の上に立つ者の職務要領も書かれています。当時のお役人の仕事振りが、朝遅く来て午後早く帰ってしまうという、そういうのが常態だったんでしよう。十分にあり得そうな話じゃありませんかね。それと、「裁判は公平に行いなさい（賄賂を貰つての情実裁判はダメ）」。「そうだったんでしようね。三権分立が行われているわけじゃなし、裁判が公平

に行われてはいなかったに違いありません。当時の世相が仄見えるではありませんか。十七条憲法は、漸く国家らしくなってきた氏族連合体の基礎を固めようとした為政者の苦心の産物と読み取れます。

そんな訳で、聖徳太子と言う人は、単なる「聖人」ではなく、相당한「政治家」であり、その説くところは「革新的」だったと思えます。だから既存の勢力は、ものすごく反発したことでしょう。今流に言えば「抵抗勢力」ですね。聖徳太子が摂政どまりで天皇になれなかった（ならなかった）のは、そういう政治の狭間に居たからでしょう。しかし、残念ながら、我々の受けた幼時の歴史教育では、そういう叙述はありませんでした。そしてそれはまた、中学・高校・大学の歴史教育にそのまま引き継がれます。聖徳太子は常に聖人君子であつて、神の如き存在。理想の人物像が若者に提示されます。

当時の政治情勢は相当に混沌としています。太子の生まれた五七四年以後の二十年間に、敏達く用明く崇峻く

推古と、天皇が四代も変っています。各陣營の取巻き氏族を含め、敵味方入り乱れての王位争奪戦があったものと推察されます。そういう生々しい歴史的事実は何故か語られず、我々の学ぶ歴史はいきなり聖徳太子であり、太子時代が終わると一挙に大化の改新へと飛んでゆきます。聖徳太子が亡くなったのが六二二年で、大化の改新が六四五年ですから、ここにも二十三年間の歴史の空白があります。事実は、太子が亡くなると、抵抗勢力は勢いを取り戻し、聖徳太子の子・山背大兄皇子一家二十五人を惨殺します。しかしながら、学校の教科書には、この事件や山背大兄皇子には触れられず、聖徳太子には子孫がまるで居ないかの如き扱いです。つい先日知ったのですが、聖徳太子には三人或いは四人の奥方が居たみたいですね。

少し下つての古事記や日本書紀、これがまた、政權獲得者の「焚書の産物」とは、思いもよりませんでした。六世紀初頭、五〇七年に突如として越の国から現れた第二十六代継体天皇以降の二百年強の間は、新国家の生ま

れ出ざる悩みが随所にあつたに違いありませんが、記紀についても、もう少し人間臭い成立史記があつても良さそうです。

何が真実なのか、歴史とは何か。企業OBになつて落ちて着いて諸書を繙くと、歴史にも人間の生き様が見えてくる今日この頃です。



## 台湾再訪

野瀬 隆平

夜店でにぎわう台北の裏通り。人混みを掻き分けながら進むと、元気の良い物売りの声があちこちから飛んでくる。食べ物から衣料品、雑貨まで、あらゆるものが並べられた屋台が、裸電球に照らされて、ひしめき合っている。魚や肉を焼くおいに、複雑な香辛料のにおいが入り混じって鼻を刺激する。漢方薬の店先では蛇が籠に入れられ、その横で売られているのはスッポンの血だ。久しぶりに訪れた台北は、相変わらずこの町で暮らす人たちの熱気であふれていた。

翌朝、ホテルの窓から見回した町の変貌振りには、目を見張るものがあった。高層ビルやアパートが立ち並び、世界一の高さを誇る五〇八mのオフィス・ビルがひととき目を引く。Taipei 101と呼ばれるこの建物は市内のどこからでも目に入り、台北の象徴となっている。

仕事で何度か来たことがあるこの町に、今回はひたす

ら観光を目的にやってきた。お目当ての一つは、装いを新たにした故宮博物院の展示をじっくりと鑑賞することである。朝、開館前に着いたので、その日一番目の入場者として展示場に入ることが出来た。これは正解だった。その後続々と来る観光客や、先生に引率された地元生徒たちで混み合い、ゆっくり鑑賞できなくなってきたからだ。博物院の中にある食堂で飲茶の昼食をとり、午前と午後合わせて六時間、心行くまで鑑賞することができた。これまで各地の美術館や博物館を訪れたが、これほど長い時間を掛けたのは初めてである。

ホテルへは、地下鉄で帰ることにした。今回の旅では何度も地下鉄を利用したが、しばしば同じような経験をした。混んだ電車に乗ったとき、先客がすぐ席を譲ってくれるのである。見ると、座席の上に「博愛坐」の表示がある。日本でいうシルバーシートだ。日本では優先席でも、先に占領している若者が年寄りに席を譲ってくれることは稀だ。しかし、台湾では年長者を大切にすることを慣が身につけているのか様子が違う。譲られた座席は硬いプラスチックであったが、心温まる思いがした。

台北を離れる前の日に中正紀念堂を訪ねた。蒋介石の遺徳をたたえるこの紀念堂は、觀光スポットの一つとなっており、何度か足を運んだことがある。堂に近づくとつれ、改装中と見えて足場が組んであるのが見えてきた。正面の階段を昇って行けない。階段を昇りきったところに大きな蒋介石の座像があったはずだと思いつながら堂の脇にまわり、やっと入り口にたどりついた。

ここで、予想だにできなかったものを見て驚いた。蒋介石をたたえる展示室の入り口近くに、特設の展示場が設けられており、数多くの写真が掲げられている。よく見ると、台湾民主化の歴史を誇示する写真である。その中の一枚に目が釘付けとなった。民主化を求めるデモ行進の写真だ。プラカードには、蒋介石の後を継いだ息子の蔣經国総統を糾弾する大きな文字が踊っている。「蔣經国是悪」と。同じ建物の中のすぐ隣りで、片や蒋介石をたたえて、彼が乗っていた自動車など、ゆかりの品々を展示している一方で、それを非難する内容の展示が堂々となされているのである。

今年（平成十九年）の五月に、民進党の陳水扁政権

が、台湾の住民を弾圧してきた国民党の蔣総統とその息子の蔣經国をたたえるのはおかしいと、蒋介石を指す「中正」の文字を冠した紀念堂を、「台湾民主紀念館」に改名した。このことは、案内書を読んで知っていたが、まさか全く反対の立場に立つ展示が同じ場所になされているとは夢にも思わなかった。今まさに転換の過渡期にあるのだ。

さて、歩きくたびれてホテルに戻ろうと、地下鉄の駅に向かった。最寄りの駅の名前は、これまで通り「中正紀念堂」のままとなっている。いずれ近いうちに、この名前も変えられるのであろう。歴史認識がかくも急テンポに、しかもあまり大きな混乱も無く変わる台湾の特殊性と、この小さな島が抱える複雑な事情を垣間見る思いがした台湾再訪であった。



「台湾民主紀念館」

## 「坂」の上に浮かぶ雲

平尾 富男

昭和二十年台からおよそ四半世紀の間、私はＪＲ京浜東北線の上中里駅と山手線の駒込駅の間辺りに位置する西ヶ原に住んだ。かつては広く滝野川と呼ばれている地域に内包されていた。桜の季節には近くの飛鳥山で家族総出の花見をしたことを懐かしく思い出す。

日本橋と王子の間を結ぶ本郷通りを路面電車が走っていて、移り住んだ当初には通りから二百メートルほども奥まったところの我が家から、電車の通るのが通り沿いに並ぶ商店の隙間を縫って覗き見ることができた。この本郷通りは、東大赤門前、上富士を通過して駒込から坂を下る。霜降り橋を過ぎると、旧古河邸公園に沿って再び坂を上がったところで田端から丘陵の背を通って来る街道とぶつかり、左に九十度曲がる。さらに丘陵の尾根伝いに飛鳥山に到る。そこで池袋方面から来る現在の明治通りと合流して、音無川（石神井川下流）沿いに坂を

下って王子に出る。

司馬遼太郎の『坂の上の雲』は、三人の伊予松山出身の主人公たち——日露戦争においてコサック騎兵隊を破った日本陸軍騎兵隊の創始者である秋山好古、バルチック艦隊を日本海に壊滅せしめた海軍参謀の秋山真之の兄弟、そして近代日本文学の世界に巨大な足跡を残した正岡子規——の生き様を通して、世界の歴史の中でもきわめて特異な明治という昂揚の時代を検証している。

その大作の中に、飛鳥山の地名が何度か言及されているのが興味深い。四国松山藩の下級武士の家に生まれた秋山好古が、わずか数え十七歳で小学校の教員になり、やがて無料で学校に行けるという理由で上京して、生まれたばかりの士官学校の試験を受ける。そのときの試験問題が、「飛鳥山に遊ぶ」という題で一文を物すことだたと書かれている。飛鳥山は、当時は勿論、現在に至るまで、上野、隅田川堤と並んで、桜の名所であり続ける。しかし、伊予の田舎から出てきたばかりの当時の好古の知る由もなく、「飛鳥、山に遊ぶ」と読み替え、故郷道後の湯の里山に飛ぶ鳥を連想して回答を書き上げた。

司馬遼太郎の描写では、「山といつても丘のようなもので、ふもとを音無川がめぐり、頂を歩けば荒川の流れをのぞみ、国府台や筑波山を見ることが出来る」とある。

『坂の上の雲』のもう一人の主人公正岡子規は、明治維新の直前に、秋山兄弟と同じ伊予松山に生まれ、好古の九歳下の弟真之と既に松山の中学校で親交を深めていたが、明治十六年、数え十七歳で東京に出る。程なく兄を追って真之も上京。子規も真之も共に東京での書生時代を、勉学と趣味・娯楽の世界で大いに青春を謳歌した。その子規が最後に住み、そこで病氣により志半ばで生涯を終えたのは、根岸の鶯横丁であった。

秋山真之が、既に亡くなっている子規の遺族をその根岸に尋ねたのは、自らが参謀を勤めたバルチック艦隊壊滅という奇蹟的な日本海軍完全勝利の凱旋を終えて間もなくのことである。結局は遺族にも会わず、独り静かにその家の前から立ち去る。そして子規の菩提寺である田端の大竜寺まで三キロの道のりを歩いて、墓前に寂しく佇むのだった。司馬遼太郎は書いている、「道は、飛鳥山、川越へ通じる旧街道である」と。

その旧街道は、霜降り橋から坂を上ってくる本郷通りに吸収され、平塚神社、七社神社を通りの右手に見て、日本橋より二里のところにある国指定史跡の西ヶ原一里塚に続き、渋沢栄一の旧居（現在は渋沢栄一記念館）が残されている飛鳥山で前述の明治通りに合流する。

日本海海戦の凱旋参謀として皇居での儀式にのぞんだばかりの秋山真之が、今は亡き同郷の盟友正岡子規の菩提寺を田端に訪れたとき、この街道の坂の上に見た雲の寂しい心象こそ、戦争の空しさと、遠くなった明治への思いを込めた司馬遼太郎の鎮魂の詩なのであろう。

私は平成十五年の冬、飛鳥山と田端のどちらにも近い西ヶ原の実家で母を亡くす。町屋の火葬場で母と告別し、お骨を抱いて田端からその旧街道を通って実家に戻った。そして、ハイヤーの窓から街道の坂の上に浮かんだ雲を見上げ、あの大抒情詩の終幕を思い出していた。母の死と共に、私の故郷である西ヶ原も、頭上に流れる雲に乗って遠くへ去ってしまうかのような感情を覚えた。

今私は、横浜郊外の北東部に住んで久しい。

## ダイヤモンドは永遠か

藤岡 豊

うるわしい愛の証しとして、また富と栄華のシンボルとして、ダイヤモンドはそのゆるぎない地位を維持し続けている。その姿は今後も永遠に変わらないように思える。しかしこれが誕生するまでには、言葉で言いつくせないほどの物語があることを知っている人は少ない。

全世界のダイヤモンド生産量のうち、ほぼ四十％は南アフリカで産出されている。ヨハネスブルグからケープタウンへ行く途中に、ダイヤモンドで繁栄した街、キンバリーがある。ダイヤモンド鉱山のほとんどが、この街の周辺に固まっている。

街の中心から僅か一マイルのところにあるウエッセルトンは、その中で最も深い鉱山でその採掘現場は地表から三千三百フィートの地下にある。この穴の中で働く労働者はすべて黒人で、男もいれば女もいる。そして苛酷な労働条件のもと、安い賃金で岩を削り、土を掘ってダ

iamondの原石を取り出している。

そこで当然といえばそうに違いないが、鉱山会社にとって最も頭の痛い問題は警備である。つまり一カラット何万ドルもするダイヤモンドの原石を手にする労働者としては、何とかしてこれを盗み、持ち帰ろうとするのは当然だろう。街には持ち帰った原石を現金で買い取る業者も何人かいる。

したがってどこの鉱山でも労働者たちは、仕事が終わると男も女も全裸姿で検査される。口の中はもちろん、耳や鼻、尻の穴から性器まで嚴重に調べられるので、持ち出すのは容易ではない。かつてはパチンコのゴムで鉄条網のフェンスの外へはじき飛ばす手もあったが、それも今では監督の目が光っていて難しい。

そこで知恵をしぼって考え出したのが、胃腸を隠し場所とする方法、つまりダイヤモンドを呑みこんでしまうのである。これなら身体検査もパスして無事に山を下りることができる。翌朝になって、排泄された便の中から取り出すという仕組みである。したがってあまり大きい石は無理のようで、下手をすると盲腸にひっかかること



にもなりかねない。

鉾山側では、どうも生産量が腑に落ちないとして必死になって調べた結果、ようやくこの事実を見つけた。この対抗策として、X線の設備をつける鉾山も増えている。労働者たちは裸にされると、一人ずつこの透視テストを受けねばならない。バッチリと映ってしまうと言いつれは無用。そうなると鉾山に留めおかれ、翌朝これを取り出して差し出すことにより、やっと下山を許される。何日たつてもレントゲンから消えず、体外にも出てこないケースがあったが、結局これは胆石であったという笑えない話もある。

ご婦人がたの細い指にさん然と輝くダイヤモンド、魅力的な胸の谷間に彩りを添えるダイヤのネックレス。しかしこれが排泄物の中から取り出されたものであることを知っているご婦人は、ほとんどいらないではなからうか。



## 屋久島を訪ねて

吉 壽 清 己

去る一月（平成十九年）、私と妻は樹齢七千二百年の縄文杉がある屋久島の世界遺産登録地を訪れた。縄文杉を見るには、朝五時に出発して、夕方帰る強行登山である。

これは八十二歳の私を含め、ツアーの老人たちには無理である。私らは屋久杉自然館の館長日下田<sup>ひげた</sup>さんの案内で、自然遺産登録地の白谷雲水峡と西部林道を歩いた。自然林の木は生存競争の戦いに耐えて生きていた。

屋久島は口永良部島など多くの火山に囲まれているが、火山はなく、花崗岩の隆起した島である。標高二千mに近い宮之浦岳を中心に険しい峰が並んでいる。年間一万ミリ、月に三十五日は降るといわれる雨は、風化した土砂、腐葉土を流し、島は岩石累々となっている。岩の上に杉、椎、檜などの照葉樹が繁茂している。木の根は岩の表面に露出している。しかし、しっかりと岩に貼りついて、木を支えている。根は雨と霧で乾くことな

く、葉は南国の太陽光を浴びて、旺盛な光合成は大木を育てている。

屋久島の杉は秋田杉と同種で日本固有の植物である。島の人という地杉は住民が植えた人工林である。島の東から南側にかけて、海拔二百mまでの傾斜した平たい土地に群生している。自然杉は海拔五百m以下の低地にはなく、五百mより高地に自生している。

他の樹木とまじりばらに生え、群生はしていない。地元の人、樹齢千年までの自然杉を小杉、千年を越えた高齢の大杉を屋久杉といっている。

屋久杉は、例えば縄文杉、樹齢三千年の紀元杉など固有名が付けれられ丁寧に保存されている。大杉は神々しい雰囲気がある。しかし、木のとっぺんは、葉は枯れ、枝は白骨化している。また幹の樹皮は苔が生え、いろいろな植物（木）が寄生している。

白谷雲水峡は、島の東北、宮之浦から山に十二キロほど上ったところにある。私らは標高六百mの入口までバスで行き、そこから標高八百mまで、上り下り三時間歩いた。自然遺産登録地はタバコ、トイレは禁止されていた。

る。携帯用トイレは一ケ五百円であった。歩く道は岩石がごろごろしている。雨が降ったとき水が流れ落ちた跡を、足首を挫かないように注意して歩いた。

自然遺産の森は、私の想像していた状況とだいぶ違っていた。屋久杉、照葉樹の大木はそれほど多くなかった。無残にも倒れた巨木は多い。樹高二十mもある大樹の幹は、中心部は腐り空洞に、いつ台風で倒れるかもしれない。幹が空洞になった木は多かった。

巨木は空に葉を一杯に広げている。下は薄暗く、根元は苔しか生えられない。巨木が倒れると、天井に大きな孔が開き、下に日が当たるようになる。待ってましたと芽が吹いてくる。苔の生えた倒木を栄養に杉の子、照葉樹の幼木が多数生えている。しかし、ここは巨木一本のスペースである。いざれ生存競争が始まり、弱い木は枯れ、強い木一本が残る。森の世代交代の厳しさである。

屋久島の山頂は雪が積る。海岸地帯は熱帯のハイビスカスの花が咲く。沖繩から東北地方福島県まで分布している日本列島の植物は、この島では垂直に見られると目下田さんは言う。

世界自然遺産登録地は島の僅か二十%の面積、約百平方kmの広さにすぎない。西部林道は登録地である。林道は、海から標高約千mの高さまで急角度に上る斜面の海拔二百m付近を通っている。斜面の小さな川は滝のように流れ落ちる。土砂崩壊跡も多く見られ、大きな岩は今にも落ちそうである。この斜面の海拔五百mあたりまでは、光沢のある葉の常緑樹が茂り、それより上は針葉樹が多くなる。木は動きがとれないほどびっしりと生えている。木は、高さに比べて幹は細く、葉は上の方に少しあるだけで、ひよろひよろと痩せて立っている。腐葉土は雨で流され、木は栄養不良になっているのである。林道にいる猿と鹿も小型であった。彼らは人間を動く石と思っているのか全く無関心であった。

屋久島に来て私は思った。過保護に育てられ、苦勞をしたことのない今の子供、国・自治体に頼らないと生きられないひよわな大人、そして自殺したくなった人たちは屋久島の自然林を見て、生きること耐えることなり、と悟り、発憤して欲しい。

## 鳩寿きゅうじゆの祝い

濱田 優ゆたか

長年勤めていた化学会社の大先輩、高島直一さんが、めでたく九十歳を迎えたので、鳩寿の祝いを開くという案内が届いた。

——えっ、鳩寿？ ふつう卒寿だろう——  
この疑問に対する答えは「当日ご本人から」と気をもたせる文末だ。

高島さんは、高分子学会の重鎮であり、プラスチック時代を切り開いた功労者だが、私たちにとっては仕事の苦楽を共にしたよき先達である。

彼の気さくな人柄に惹かれて、かつての部下たちが自然に彼の周りに集まり、二十年余り前に勉強会が発足した。それが少し形を変えて今も続いている。実はこの祝賀会、その高島さんを囲む会の特別版なのだ。

二年前の米寿のときは、この会の粋を外し高島さんと所縁のある人たちにやや広く声を掛けたところ、予想以

上の人がお祝いに来られ、大宴会になった。その折、私は祝宴の司会を仰せつかったが、来賓の中に話のやたらに長い人や冗談めかしながら本気で羨ましがってお偉いさんがいて気苦労した。

今回は、会員だけの、いわば内輪の催しなので気が楽だ。それでもめでたい記念行事のことゆえ、いつもより多い四十名が馳せ参じた。

そこで、鳩寿——高島さん曰く、卒寿が一般的だが、鳩寿ということも以前からあった。漢字学の泰斗白川静博士が九十歳になられたとき、卒寿の卒は卒去の意に用いる字なので、鳩寿と呼ぶように望まれたことを本（白川静著『桂東雜記Ⅰ』平凡社）で読み、自分もそうお願いした、と打ち明けられた。因みに、鳩には九が含まれている上に、昔、中国で高齢の功人が杖頭に鳩の飾りのついた鳩杖を下賜されたことがその由来という。

いかにも言葉について感性の鋭い高島さんらしい話だ。彼は、生粋の技術系でありながら長年句作を趣味にされ、米寿の祝いには自作の句集を引出物にされたほどで、素人の域を超えている。

ところで、高島さんの下に大勢の人が群がるという  
と、親分肌をイメージされるだろうが、実際は生涯一書  
生を貫いている篤学の士である。今も専門の高分子関連  
の最新技術動向には強い関心を持ち続けられており、  
「長年私が提唱してきたポリマープロセスシニング（樹脂  
成型加工）の考えに、やっと世の中が追いついてきた」  
などと、囲む会の会長挨拶で難しい話をはじめられる。

専門以外のことにも知的好奇心が強く、たとえば様々  
な分野の技術史を辿るのが好きだ。加えて多趣味、俳  
句のほか、美術に対する造詣が深く、暇があれば古跡を  
巡って写真を撮られる。

そういえば、鳩寿の祝物は最新鋭のデジタル一眼レフ  
だった。高機能・多機能で使いこなすのはかなり難し  
い。普通の九十翁なら近寄らない代物だが、自分は大丈  
夫と自らご所望されたそうだ。カメラについては一寸う  
るさい私でも、デジカメの機能をフルに使うのは難儀  
で、いまだに「取説」を絶えず持ち歩いているのに。

さて、彼を囲む仲間たちのことである。「類は友を呼  
ぶ」というが、どうもこのグループにはそれが当てはま

らない。高島さんは、会社でも指折りの紳士であり、学  
究肌の人である。そのためか、この一派を高島学校と呼  
ぶ向きもあるが、彼は指導熱心な教育者とはちよつと違  
うし、彼の後継として研究にいそしむ人は案外少ない。

多くの配下、殊に番頭格の人たちは、一人ひとり実  
個性的なサムライ揃い、その意味では高島軍団と呼ぶべ  
きかもしれないが、この指揮官が強いリーダーシップを  
発揮した場面はあまり見たことがない。彼は、自分が指  
示す方向にみんなのベクトルをまとめるより、部下の  
自主性に任せ、責任は自分が取るというタイプの上司で  
ある。そこで一癖も二癖もあるサムライたちがそれぞれ  
思い思いに活躍したのだから、その仕事振りは言ってみ  
れば百花繚乱、元気のよかった当時の会社の中でもひと  
きわ目立つ存在だった。

反面、咲き乱れる花は容易には束ねられない。私が高  
島さんの下で働いていた三十数年前、樹脂企画部長や商  
品本部長だった彼は、配下の部課長が会社のルールから  
はみだした咎で、監督不行き届きとたびたび時のトップ  
から叱責を受けていた。

しかし、当時のプラスチックのような新しい産業の勃興期やオイルショック以降の環境の激動期には、なまじの枠に嵌めるより、各人を自由闊達に活動させて、その動き中の中から社会の変化に適う事業を選んで育てる——彼のやり方が正解ではなかったか。

あの時の仲間は、上司からの命令のためでも、会社からの評価のためでもなく、自分自身が感じる仕事のやり甲斐のために目を輝かせて働いた。その結果、続々と社内ベンチャーが生まれ、新規事業が育った。選挙のポスターや投票用紙にも使われている合成紙、プラスチックの特性を活かした産業資材、広範な分野のエンジニアリング、そして高度な分析技術に基づく臨床検査などの事業は、独立して斯界の有力企業に発展している。

もちろん、クレイごとばかりではなく、不本意な結果に終わり、サラリーマンとして辛い思いを残した人も少なくない。成功したプロジェクトXの陰に何倍もの失敗したプロジェクトX（バツ）があるのが世の常なのだから、それは仕方ないことである。

この会には、仕事の成否に関係なく、自分の人生を仕

事に賭け、プラスチック時代実現の夢を共有した同志の心の故郷といった趣もあり、みんなと顔を合わせるだけでも気持が安らぐ。それで会社を離れてから長い月日が経っても、多くの人がこの集いを心待ちするのだ。

最後に、高島さんのお話に戻る。

「元気で長生きの秘訣は？ とよく聞かれるけれどね、長生きの秘訣なんてないさ。ただ、タバコとか、食べ過ぎとか、健康に悪いといわれていることはやらないだけ。元気は気持の問題。やるだけのことをやったら、後は何とかなるさ、と思うことだね」

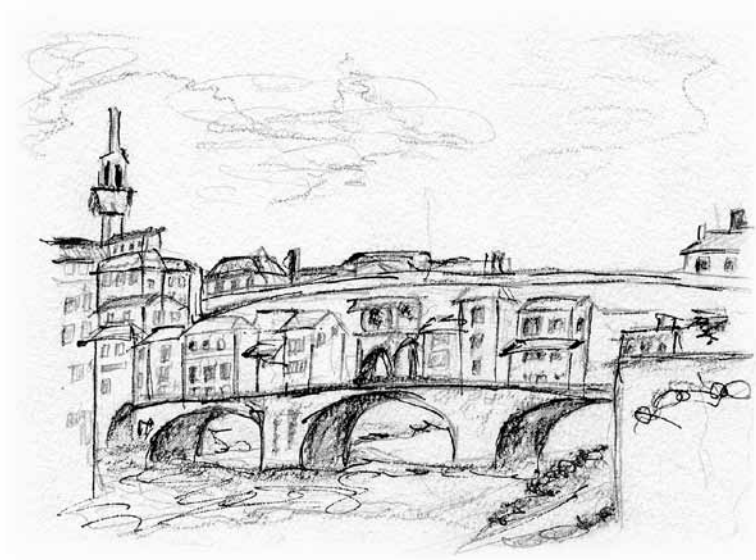
そして、怠け者の私の心を見透かしたように、「何とかなるさ」だけ覚えて、その前の努力を忘れる人が多いけどね、と笑って付け加えられた。

最後の最後に、一番悲しいのは、自分よりずっと年下の仲間が、相次いで鬼籍に入ったこと、と目を潤ませ、悲痛な声で訴えられた。

「私より先に逝かないでくれ！」

不肖の弟子の私だが、せめてこのご希望には添いたいものである。

# 創作短編



フィレンツェの橋 児玉 忠雄

## 泣きやまぬ初夜

大西 宏

■川崎等々力サッカー場、隣の席は、若い女性が一人だけ、横目で想像するとキュートな美人らしい。綾子といった。隣同士の若い男と女——はた目にはきつと恋人たちに見えただろう。

ハーフタイムにとうとう正雄が

「札幌のご出身ですか？」

「ええ」

「ほくもです」

ゲームはコンサドーレの快勝となり、熱くなった二人は人の波の中で並びながら流されていった。

■武蔵小杉の駅前のスターバックスの前で、

「お茶でも飲みませんか」

時の成り行きが言わせた義務のような常套句だった。

カフェのなかで、二人の会話はゲームのときよりも弾んだ。

好きな歌手、俳優、作家、ブランド、映画はては政党まで——あまりの一致にたがいに驚きあったが、ポタンは一つ掛け違わなければすべて掛け違わないということにすぎないことであつたのかもしれない。

しかし、正雄と妻の蓉子とでは、話題にならないことが多かつた。

この男女が引き合つて、すくなくとも恋愛までは発展しても何のふしぎはなかつた。もし正雄が独身だったなら……。

彼が、この場で妻子を持っていることを告げるには余りにも雰囲気が親密になりすぎていた。

それに正雄には、結婚した今も「ヤングレディ」にもできるのか？」について試したいという命題があつた。

■綾子が正雄に妻子があることを知つても、二人は、カフェを転々として逢瀬を楽しむこととなつた。

ところが、そのうち、その光景を目撃した蓉子の友人朱美が彼女に注進に及んだのである。

蓉子が衝撃を受けたのはもちろんだが、そこは、売り場



のチーフとして修羅場をくぐった彼女のこと、

「もうちょっと泳がしてみるわ。悪いけどもう二、三度見たらいつてくれない？」

三回目のとき、

「次は火曜日に新宿南口のスタバに現れるのでないかな。あの近くのホテルの前でも見たような気がするから」

という朱美の、場所まで特定する情報に対して、蓉子はやっと動いた。

■たしかに仲むつまじそうな正雄と相手の綾子が居た。

「ずいぶん何回も密会しているのね。それもホテルまで行って！」

と蓉子が低い声だが毅然として言った。

「ちがうそれはちがう！」

と蒼くなつて否定する正雄。

「あなたたちに提案があるの」

おののきながら身構えた綾子に対して、蓉子は意外なことを言い出した。

「あなたたち二人の愛がほんものの愛なら、この人をあなたに譲ってもいいと思うわ」

「……………」

「提案というのはね。一週間私たちのマンションでいっしょにくらしてほしいの。その結果で、どうするのか三人で判断をしましょう」

正雄も綾子もまるで制御されるロボットのように蓉子の提案に従った。

■次は、正雄と綾子の「試験結婚」の事件簿である。

初夜。三年保育の四歳の玲子の大泣きから始まった。

正雄も手のつけようがなく、なき疲れて眠りこけたのは、日付が変わってしばらく経ってからだった。

次の朝。また泣き出した玲子をいつも通りクルマで託児所で降ろし、「手渡すのは綾子でよいだろう」という読みが誤算でどうしても引き取ってくれない。

泣き叫ぶ玲子を抱いて出勤できず途方にくれた綾子。会社から正雄が引き返したのはその二時間後だった。

第二夜。玲子がまた泣きやまない。食事もほとんど受けつけない。

第三夜。蓉子の父親が突然やってきて、綾子をじろじろ眺めて怪しんだ。「出張中の蓉子の友達」と必死でごま

かした正雄の懇願でとうとう綾子は、ブーツと膨れながらホテルへ。

第四夜 綾子はすっかり消沈して、蓉子とのバトルを覚悟の上で自分のマンションに逃げ帰る。蓉子がいないこともあって自分の部屋について無断「外泊」。  
次は二人の成績簿。

①家事 毎日がコンビ二弁当。洗濯、掃除に手がまわらず綾子は落第。 正雄は家事について少々腕をあげた。

②育児 ともに落第。

③愛情 これくらいのことでは冷え切ってしまった。落第。

④夜の営み それどころでなかった。棄権。

■最後に、バランスシート。

そのころ。蓉子は生まれて初めてのニューヨークのデパートやインテリアの専門店を巡り歩いていた。イデパートで担当する雑貨の売り場を見て、これまでに仕入れていない掘り出し物がないかを探すためだった。いくつもあった。クリエーターとも知り合った。

この旅行は、蓉子に近い将来、念願の一級のバイヤーになる夢への確かな架け橋となった。

■あれから五日目、帰国した蓉子が綾子のマンションにもどったら彼女がいた。

「あらっ！ルール違反だわ。一週間まであと二日あるのだから、この部屋はまだ私のものよ」

「もうお願いだから勘弁してください」

綾子は五日間のトラブルと、トラジディを説明した。

「そう！たいへんだったのね」

「すべて私が悪かったと思います。どうもすみません」

「……………」

「でもね。私たちキスもしていないの。なのにもう愛は冷えてしまったわ。今はご夫婦の愛情が戻ってくれることをただ祈るのみです」

「……………」

「でも私、すごく現実世界の勉強はできたわ」

綾子が電話を入れて、正雄と玲子呼び寄せた。

蓉子は真っ先に玲子を抱きしめた。玲子は泣きじゃくりながら蓉子にしがみついて放さなかった。

すべてが、蓉子の思惑通りになることが運んだように見える。しかし、最も駭かれたのは彼女かもしれない。

## 悪魔のたくらみ (お年寄りのための童話)

新山 章一郎

みなさん、この頃の人間ども、そして日本はどうです。上は政治家、官僚の無為無策、無責任に始まってなだたる老舗、有名会社の虚偽偽装、淫猥教師にモンスターペアレント。はたまた親殺し、イライラ殺人で犬も歩けば殺しに当る世の中、大きく見れば我々が住む地球自体が壊れかかっている。目茶苦茶でございますな。どうしてこんな社会になってしまったのでしょうか。もしこれが我々の知り得ぬ誰か、いや、何物かが仕掛けた罠だったとしたら……。

ここは天界でも永久に日のあたらないダークコーナ―。薄暗がりには茂る大木、その大枝から垂れ下がり辺りを這い回る太い蔦の木、遠くに紅蓮の炎を上げ、暗い空に怪しくたなびく雲を照らす鋭く聳える火の山。その麓に岩を嘔む激流。川淵の崖にぽっかり口を空けた薄気

味悪い洞穴。これぞまさしく悪魔族の王、最も狡猾な天界の悪魔たちの巣窟です。洞窟のなかでは尖った鷲鼻の、骨ばかりに瘦せたひよろ長い四肢に三本指の悪魔たちが何やら奇声を上げて大騒ぎ。

悪魔A「おい、なんか面白えこたあねえかい」

悪魔B「ねえでもねえな。人間界じゃ俺なんか四、五十年前に撒いた種がようやく実り始めたようだな」

悪魔C「なんだ、あの食品偽装とか耐震偽装とかはお前えが仕組んだものなのか」

悪B「そうよ、大体あの人間とかいう、神さんが創ったペットが気に食わねえ。万物の霊長なんてぬかしやあがつて、くそ面白くもねえ。今にあいつらメチャクチャにしてやろうと思つてな。それも、外からぶつ壊すんじゃないくて、あいつ等の性質を利用して、内側からじわじわとな、自分たちでも気がつかねうちによ」

悪A「お前え、なかなかやるじゃねえか。そういうのを知能犯ていうんだってよ」

悪B「知能犯なんてほどのもんじゃねえけど、人間なん

て欲張りで自惚れで、頭が空回りに良いくせに馬鹿な奴らだから、ちよつと仕掛けりゃあ、すぐに乗ってくらあな。早え話はその昔、ちよつと殺しの技術を教ええたんだが、見てみねえ。奴らの殺しの技術の進歩を。原子爆弾だ、地雷だ、クラスター爆弾などと、近頃じゃ俺たち悪魔でさえも驚くような残忍非道、大量虐殺の方法を考え出しやがって、今じゃ俺たちの殺しなんて可愛いようなものだ」

悪A「だけどあいつら、うじょうじよ増えやあがるから、ちよつとやそつとのことじゃあ追いつかねえだらう」

悪B「抜かりはねえよ。前にも科学技術てえのを教えてやったんだ。その昔、天国で使つて便利だったけど弊害のほうが多いってんで止めたのが、ゴミ捨て場にあったから、こいつで何かいたずらできねえかと思つて人間どもにくれてやったんだ」

悪A「なんだお前え、そんなことを教えちゃつて。手前、奴ら嫌いじゃなかったのか」

悪B「だからよ、そこが俺たち天界の悪魔の凄いところ

よ。初め喜ばせておいて、後で飛んでもねえことになるのよ。そんなことも露知らず、奴ら随喜の涙流して使つてらあな。最初の頃は産業革命だ、イノベーションだ、ハイテクだなんて喜んでやあがつたが、最近じゃその便利さに追いまくられてひいひいしてらあな。あの技術は両刃の刃でな。うまく使いこなせねえと飛んでもねえことになるんだ。人間てのはなんでもとことんまでやる癖があるから、どんなことになるか後のお楽しみつてえとこだ。猿にマスターベーション教えると死ぬまで「やっちまうてやつだな、ケケケ」

悪C「で、どうなつてるんだ、今」

悪B「早え話が奴ら、産業ロボットなんて造りやあがつた。こりゃ、本来人間のやることを代りにやつたり、人間の百倍も千倍も能率よく仕事ができる機械だから、奴らその分、百倍も千倍も楽しんで左団扇でのんびり生活できたはずだった。ところがどうだ。奴らは前よりずっと多く、必死に働いても、楽になるどころか、過労死とかワーキングプアとか、かえつて、生活しにくくなつたもんだ」

悪A「うーん、しかし人間どもの生活水準が上がっていることは確かだぞ。テレビがより薄く、奇麗に映るようになったし、見たい映画がいつでも見られる。携帯でいろいろなことができるようになったし。奴らの世の中ずいぶん便利になったことだぞ」

悪B「そこがポイントよ。科学技術などというものは、進歩と称して、新しい便利さを無制限に生み続けるようになってるんだ。人間どもは次々に現れる進歩を追いかけるのに手一杯で他のことは考えられなくなる。丁度、早すぎる自動車に乗せられて、ハンドルを切るのが目一杯で、自分がどこを走っているのか、どこに向かっているのか、外から見たらどんなふうなふうな運転をしているのか分らねえ状態になっちゃったんだ。だから、奴らは今いったいどうしてそんなに便利になる必要があるのか、見たい映画がいつでも家で見られる、携帯電話ですぐに写真を撮って送れることがどこで自分の幸福に結びつくのかなど考えるなんてことはできなくなっている。そんな心理状態に追い込めばもうこっちのものだ。後はとんでもねえストレス社会の到来だ。奴らその中で道徳の腐

敗、社会秩序の無視、自己抑制の喪失など、内面からも自壊の一途だ。ましてその便利さを得る過程で、奴らが生息する地球そのものが破壊され、奴らは地球ごと滅亡するなんて、嬉しいじゃねえか。ざまあ見ろだ」

悪A「彼らは今すでに、便利になることが幸福だと錯覚している。奴らは幸福になろうとすればするほど滅亡に近づくと、というわけだな。お前も相当な悪だな」

悪B「まあな。最近でも金儲けの術をちよつと教えてやった。そうしたら、半世紀も前ならよほどの悪でもなければ考えられないような金儲け技法を編み出して、臆面もなく『こんなに儲かっていいのか』なんてぬかしやあがつて、何でも金、金。金のためならどんな破廉恥なことでもする世の中にしてしまった。馬鹿な奴らだ。奴らは己の賢<sup>さか</sup>しきで滅びるんだ。奴らは行先に大きな滝が待っている急流を下っているようなものだ。気付いている者もいるが遅すぎる。まあ、人類の前途に乾杯さ」

天界の悪魔どもは顔を見合わせ、ケラケラと大笑いしましたとき。

## 危険な商い

古川 さちお

一九七二年、世界中が目を見張るのを尻目に米中交流再開が実現しました。両国の握手に一番驚いたのは日本政府です。ところが、ちっとも驚かない日本人がいました。総合商社Z社の平川課長とその上司、白木部長と猪谷社長です。平川はそれ以前に、米中二国間で現代の忍者もどき体験をしていたのです。

一九七一年春、平川二回目の参加となる広州交易会でのホテルは広州賓館でした。三日に一度程度の中国側会社のアポイントを待ちながら、ホテルで暇をもてあましている或る朝のことです。珍しく機械第三会社の担当者自ら広州賓館の部屋を訪ねてきました。

「私は孫（ソン）と申します。フランス語を話すという平川幸二郎先生はあなたですか」

思いもよらないフランス語に驚きながら、彼もフラン

ス語で応じます。

「平川は私ですが、どうしてフランス語が分かるかとご存知なんですか」

「そのご質問には後で答えるとして、今は急用です。私どもの上司、周が急いであなたに会いたいそうです。よい話があるそうですから一緒にご足労願えますか」と言うのです。

平川は急ぎ外出支度をして孫氏の後に続きました。連れていかれたのは交易会場の特別室です。周主任は笑顔を見せ、日本語でいきなり用件を切り出しました。

「失礼ながら、あなたの経歴を全部知った上で、是非協力をお願いしたいことがあるのです。今は日本時間の午前十一時ですね。話を分かりやすくするために、ここからあなたの上司である白木部長に国際電話しますので、あなたが受話器を取ってください。白木先生は全てを心得ておられますから、直接話をお聞きください」

当時中国から日本への国際電話は、繋ぐだけでも大変な時間が必要だったのに、この特別室からは、市内電話並みにすぐ通じたのに驚きました。

「はい！ Z社の白木です」。

間近で聞くように明瞭な声です。

「こちら広州から！ 平川です！ 今、機械第三公司周主任という方の特別室から掛けています。突然ホテルからここに連れてこられました、どのような要件なのか全くわかりません。白木部長から話を聞くようにとのことです。……」

「分かった。平川君、こちらは猪谷社長のご自宅なんだよ。これから話すことは、国家機密にも匹敵するようなもので、わが社、いや日本人では、社長と私しか知らない、トップ・シークレットだ。当事者以外には家族といえども口外してはならないことを心得て欲しい。遠い広州に居て不安を感じるかも知れないが、全然心配は要らない。安心して話を聴いてくれ」。

白木部長が落ちついた声で要領よく、次のような話をしたのを思い出します。

——先日、Z社が極東総代理店を努める米国GMC社副社長ウッドループ氏が来日したという。GMC社製『BGC機（重要部品製造用超精密工作機械）』を中国に売

る話をするためだった。周知のように、BGC機の共産圏向け輸出はココムに抵触するので、表向きには売れないが、裏取引で中国に供給することを、米中両政府がすでに認めているとのこと。たまたま広州に出張中の平川課長は、BGC機を熟知しており、英・仏語を解し、中国語も若干話すことから、このプロジェクトに協力できる者は君しかないとなった——。

というわけで、平川はこの秘密プロジェクトに携わることになりました。彼が、かねて機械公司に見積書を出していた日本製工作機械は、中国側配慮によって即刻十台まとめた注文をもらえることになりました。よって、彼は翌日から日本の交易団を離れ、目立たぬように中国機械第三公司に協力 (collaborate) することになりました。

コラボレーション作業は、会話も文書も双方すべてフランス語でしたから、たとえ第三者に聞こえても分からなかったはず。す。

コラボレーションで、先ずやらされたことは、広州市

からおよそ二百キロも離れた名も知れぬ町の機械工場を訪ねることでした。黒いカーテンで覆われた公用車『紅旗』は、舗装道路を延々三時間も走ったでしょうか。孫氏の他二名の技術者と共に案内されたのは、工場の研究室と思われる部屋にある二基の古ぼけた工作機械の前です。すっかり驚いている平川に、同席したメニエ氏というベルギー人が「ムツシウー・ヒラカワ、これは何の機械か分かるでしょう」と言いながら片目をつぶります。それはG M C製品でした。

平川も軽くウインクを返して「よく分かりますよ。コム禁輸機械だ。あなたが仲介輸入しましたね。大したものだ」と驚いてみせたものです。

一同は工場見学と技術談義の後、次の打ち合わせに入りました。機械第三公司以訪米ミッションを組み、クリーブランド市にあるG M C社工場を訪ねるといのです。メンバーは、周主任、孫氏のほか中国技術者二名、計四名に加えて、メニエ氏と平川がオブザーバーとして入ることになりました。

ベルギー経由で輸入予定のG M C製品の米中詳細打ち

合わせに、同席するオブザーバー二人は、適宜コマースシャル・アドバイスを行なうことになりました。

米中両国政府間で極秘裏に合意手配された、訪米団六名の渡航手続きは実に迅速でした。一行は四日後の夕刻には、香港、マニラを通り、ウエーキ島経由の米軍用機でクリーブランド空港に降り立ちました。

G M C社での複雑な商談詳細は省略しますが、二日間にわたる会合は無事終わり、B G C機二十基購入という大型契約がまとまりました。平川も米米時と同じルートで広州に立ち寄った後、無事帰国できました。

二年後、機械納入が終わったらしく、Z社には中国からサービス・エンジニア派遣の要請がありました。G M Cの機械は、その後中国の自動車工業発展に大きく寄与し、三十数年を経た今では、少なくともロシアの技術レベルを凌いでいることでしょう。

現役を引退し悠々自適の現在、平川はあの米中間極秘取引に加担したことを思い出す度に、今更ながら冷汗三斗の思いなのです。



## ペン俳句のこの一年 佳句鑑賞

西川 知世

この年は大きな変動があった。ペン俳句会発足当時から会を指導された平間真木子氏が平成十九年三月七日逝去された。二月の句会までご出席を得て、その指導の下で一六三回のペン俳句会の句会が開かれたことになる。そのすぐ後、句会発足提案者の北田純一氏が逝かれた。ペン俳句会のあしかけ十四年の歩みが大きく傾いたことは事実である。しかし、その歩みは止まることなくこの一年を乗り切った。会員それぞれの俳句にかける思いが、真木子先生はじめ逝かれた方たちから受け継がれたものであることを心強く思う。句会場も学士会館から代々木に移り、心機一転新たな句会に育つことを願っている。

句会の進行役を引き受けた。力量の伴わないことに目をつぶっていただいて、今年の成果の発表と鑑賞をさせていただく。

掌の大き素描のイエス水温む  
堀端や花房の揺れ人の揺れ  
人逝くと聞く花過ぎの風の中  
春帽子友待つ黄泉へ発たれけり  
螢籠揺すりこころの乾ききる

西川 知世

逝きし子の面影となる雛かな  
花待たで旅立ちし人偲びをり  
螢や長良の灯火遠く見て  
生きめやも南風の頬に伝へ来る  
浴衣着て若返りたる心地せる

石川 素屯

「逝きし子の」は亡くされた娘さんを偲ぶ慟哭の句。俳句を作る作業は癒しに繋がると言われる。悲しみや痛みを詠いとめることにより、それを直視し立ち上がる力を得る。闊達な若々しい素屯さんを支える一つが俳句であることは、私にとって励まされることである。

学び舎の二階に触るる若桜  
母見舞ふ車窓に明かし柿若葉  
陶芸展茄子紺絵柄涼しかり  
秋晴れの領主の館旅装解く  
マルセイユ秋空に建つ大伽藍

大泉 子泉

今年の秋、作者はラグビーのワールドカップのためにフランスに行かれた。そのときの句が終わりの二句。二句とも、作者の旅行先での心の弾みが表現されていて、読むものも心解き放たれる思いがする。いつも実体験、実感覚を句に詠みとめる努力と姿勢に共感する。

山眠る溪の深きに獣みち  
薄氷や田の面をわたる風の音  
若葉濃し夜来の雨の雫あり

亀井 弘次

今年には異常気象の年であった。この文字を目にしない日はないくらいであった。「雹降るや」の句は、その異常気象の一つとしてニュースになったことを詠いとめられた。忍び寄る言い知れぬ不安を、天が狂った、恐ろしい

雹降るや狂へる天の恐ろしき  
夏帽子目深に島の丘に立つ

と的確に捉え、俳句に詠うことに挑戦された。

岩手山のつそりと坐し若葉映ゆ  
堀端に亡き師を思ふ夏立つ日  
将門の霊のいづくに望の月  
大潮の木材置場初時雨  
山茶花に宇喜多の殿を偲びけり

関谷 裕彦

いつも句会で私の知らないことを教えていただく。特に歴史上の人物や土地である。将門しかり、宇喜多の殿しかり、それぞれの人物の背景があつてこれらの句は成立する。一方、「大潮の」句は、景を詠って格調高い。貯木上の水面が膨れ、材木の揺らぎが読み手にとどく。

雨の日の十葉一輪挿しにけり  
熟れ柿を採る人もなし過疎の駅  
弱りゆく命を知るや風凍り  
松過ぎの屈伸運動繰返す  
花リラのこぼれ落ちくる交差点

玉山 和夫

第二句、ふるさとなのであろうか、降り立った駅舎にたわわな柿が色づいて目をひく。しかし、収穫の時期はとつくに過ぎていることに、その土地に対する作者の悲しみをみる。以前は通学の子供たちの姿があつたかもしれない。原風景の衰退という、日本の現実が句にある。

元日といふ虚しさの中にあり  
雛納め樟脳の香の部屋に満ち  
文机に母の折りたる紙の雛  
ヨット疾走恋の季節の始まりぬ  
夏雲や緑濃くなるゴルフ場

都甲 昌利

第四句。今は海のスポーツとして様々な乗り物を見るが、ヨットはその中で別格。若いころの憧れや華やきが心に湧く。作者は沖を行くヨットを見て、ふいに恋の季節の始まりであると感じる。ヨットが引き起こす感慨である。ヨット疾走と上五に据えて、力強い若さを表出した。

おぶりの膝ゆたかなるをとこ雛  
大南風や千年杉の洞暗し  
ペランダの初茄子を採り供へけり  
秋澄むや嬬白寿の祝ひの座  
初時雨深山幽谷熊野道

中村 雅道

今年は何かのまとめ役として、一段とご苦労があつたろうと推察する。しかし句柄は多岐にわたり、句座を盛り上げてくださった。「初時雨」の句、(しんざん)と読むか(みやま)と読むか大いに議論し、楽しかった。それはともかく、熊野道に降る初時雨は絵画を見るよう。



## 今年一年の川柳勉強会の成果

川柳勉強会 世話人 平尾富男

平成十六年六月に新橋の割烹「森田」の座敷を借りて初めた月例川柳勉強会も、今年平成十九年の十二月で四十三回を数えました。昨年末以来三ヶ月に一度、横浜の中華街の中華料理屋でも勉強会を開催。八月には横浜赤レンガ倉庫のレストランで納涼勉強会も楽しみました。

四十回を迎えた今年九月からは、毎月の会場を銀座四丁目黒薩摩総本店に移して勉強・懇親会を続けることになりました。気持ちだけは若振っていても、足腰の衰えた老人(?)たちの集まりですから、長時間座敷に座っていることは苦痛です。新しく開拓した銀座では、掘り炬燵式の座敷で勉強します。懇親会はテーブル席に移って、思う存分足を伸ばして美味しい酒肴を楽しめるようになりました。何よりも女将の心温まる笑顔のもてなしがメンバーの忘れかけた「青春」の血を騒がせて創作意

欲に火をともします。

三年半を超える長期継続を記念して、せめて五十回目を迎えるまでには柳の下に泥鰌を狙うべく、昨年出版した『不良老人たちの溜息』に続く出版企画案を目指そうと意気に燃えて頑張っています。

今年は、昨年末にお亡くなりになった初代宗匠の小林正憲さんに続いて、常に洒脱なお色気を適当に滲ませて企業OB川柳らしい句を、昨年末に退会されるまで詠み続けられた岸本義生さんの他界を知らされたことは大変に残念でした。それでも、新しい優秀メンバーも加わり、来年も大いに躍進したいと思います。

今年一年メンバー十二名が詠んだ句から、各自が自薦した優秀(?! 三句を以下(順不同)にご紹介します。(事情により、一部世話人の独断と偏見による選句も含まれます)をご了解ください)

不言

- ① 舌先で黒を白へと変換す (舌)

- ② 総入れ歯外せば孫が泣き止まず (齒)  
 ③ 突き飛ばしやつと座れる優先席 (突く)

酔雅

- ① 枯れて今鼻にかけるは眼鏡だけ (鼻)  
 ② 着古しの背広にひめた艶話 (背)  
 ③ 結び目を解いたつもりが逆に締め (結ぶ)

井蛙

- ① 福袋俺の着る物見付からず (着る)  
 ② 魚河岸の移転はガスが抜けてから (抜く)  
 ③ 海老様は芸の肥料(こやし)に精を出し (時事)

酔深

- ① ちゃんちゃんこ着た明くる日は職探し (着る)  
 ② 背を向けて拗ねた素振りのよこ座り (背)  
 ③ 三つ指を突いて心でアカンベー (指)

周帆

- ① ライバルを抜いたつもりで先に逝く (抜く)  
 ② 結ばれぬ恋のはらいせ激太り (結ぶ)  
 ③ 蹴られても足を掴んで寝技攻め (蹴る)

昂

- ① ご苦労と誉めた裏では罪を着せ (着る)  
 ② 一本の重みを感じくし使う (髪)  
 ③ 背もたれの中と高さがモノを言い (背)

西貢

- ① 送金が目刻みで延び核どこに (時事)  
 ② 立てみつの結び緩んで金が見え (結ぶ)  
 ③ 言い訳のせりふも振りも受け継がれ (時事)

安兵衛

- ① 綱外し蹴るほうが似合つとる (時事)  
 ② 鼻ぐすり効かせりや天の声も降り (時事)  
 ③ そこ突けば敵乱れると軍師曰い (突く)

しん

- ① 夢語るOBペンに力あり (自由題)
- ② 句読点恋の余韻で打ち忘れ (音)
- ③ 忍と苦を皺に刻んで笑う祖母 (笑う)

零門

- ① 虫干しの代わりに着てると妻皮肉 (着る)
- ② 俺持てたつもりがいつか鼻つまみ (鼻)
- ③ 妻と子は平気で本音オレ無言 (音)

だし

- ① 宮仕え手抜き加減の難しさ (抜く)
- ② 日の丸は背中ばかりを見て走り (背)
- ③ 待つ宵に忍び音もれる安普請 (音)

繭球

- ① 若後家のうなじまばゆい幕参り (自由題)
- ② 自分史の記録でわかる加入もれ (自由題)
- ③ 安月給胸突き坂に建つ我が家 (突く)



## 追悼

北田純一さん



平成19年4月10日 ご逝去  
78歳  
平成10年から18年迄、当ク  
ラブ会長。

## 北田純一君の死を悼む

亀井 弘次

「へたやなあ。なんであんなに、ぼろぼろボール落とすんや」と言う大阪弁を聞きとがめたラグビー部員がいた。

「えらそうなことを言うな。ラグビーの経験あるのか？」

「ラグビーの経験は無いけど、ハンドボールで西日本で優勝した

ことがある」

「それならラグビーをやれよ」

「よし。やってやろう」

という経緯で、彼はラグビーを始めた。

終戦により海軍兵学校がなくなり、京都の第三高等学校に入学したところのことである。バックスのスタンド・オフ。よく司令塔と言われるのが彼のポジションだ。時として、地面すれすれのボールを受ける事があるが、彼はその楯円球を片手ですくい上げる信じられないようなシーンがあった。

ラグビーを始めて三年目には、関西地区優勝の中心選手を務めるほどに上達した。

最初に言葉ありき。不言実行な

らぬ、有言実行が彼のパーソナリティである。三菱商事時代の先輩、八木大介氏と共に企業OBベークラブを立ち上げて以来、クラブでの彼の言動は皆さまよくご存知の通りであるが、有言実行を文字通り発揮したのが、クラブ創立十五年記念出版の時であろう。

折柄の出版不況の中で、彼はブロマネとして、二年越しで悪戦苦闘した。しかし終始絶対成功させると言う言葉は変えなかった。

「サラリーマンたられば物語」

「団塊の世代へ」更には「新年金経済学」にと企画を変更されたが、洋泉社の協力を得て、最終的には「年金暮らし心得帳」として出版された。クラブとしては一九九八



年以来七年振りの出版本となった  
と「悠遊」に記されている。

この強い彼が、俳句では平間先生と特に仲良しであった。先生の傘寿のお祝いに頭を悩ましていたのを思い出す。俳句では時に激論を戦わした後で、帰りには同じ方  
向へ仲良く二人連れであった。

俳句の作風は軽妙洒脱、人の意表をつく感じで、いつも高得点を  
得ていた。先生の批評にも「勉強もさりながら、いつも巧みな弁舌にて一同を煙にまく方である」とあり、「胡太鼓を打ち韓人の梅まつり」の句を激賞されている。この二人が時を経ずして、この世を去るとは誰が予想したのであろうか。

彼は世を去る直前の年頭に体調も良く千葉の沖で、初日の出の写真を撮り年賀状にして送ってくれた。こんな、したたかな彼も、天寿には勝てなかった。悠遊第十四号にある彼の最後の文章「今年は良い年」に見られる様に、七十八歳の彼が八十歳を越すことを待ち望んでいたのは明かである。彼の言葉を借りると、「老け込むには早すぎる、しゃしゃり出るには遅すぎる、七十八歳とはまことに厄介な年回りです。人は八十歳になるとなかなか死なくなると聞きます。さらに七十九歳ではただの老いぼれですが、八十歳になった途端、世間が尊敬の眼差しを向けてくれるそうです」とある。



最後の言葉を実行出来なかった彼の無念を思いやると、文字通り断腸の思いに駆られてやまない。

合掌

## 追悼

平間真木子さん



平成19年3月7日 逝去  
81歳  
平成5年俳句の会を発足  
させ、昨年まで主宰。

## ニコライの鐘の下に

西川 知世

平間真木子氏が逝かれた。平成十九年三月七日の夕刻であった。暖かい日が二、三日続いたあとの肌寒い一日。その数日前にお茶の水の日大病院に見舞ったのが最後であった。

私が平間真木子氏と出会ったのは、企業OBペンクラブ発足当時

である。平間氏は機械輸入協会勤務の縁があり会員に名を連ねられていた。私は事務局を手伝うことになった。

俳句の先生がいらつしやるのだからと、平間氏を担いで句会が誕生したのは、平成五年の八月のことである。

始めての句座に積まれし青蜜

真木子

私は事務局として参加を促され、翌月二回目の句会から参加した。学校の授業以外で俳句を読んだこともない私にとっては仕事の延長気分であった。平間氏が男性陣に囲まれ、艶然と座っていらつしやうった姿がまざまざと目に浮かぶ。

そのとき初めて、私は句会を経

験し、真木子俳句に触れた。

白萩や夕日ななめに天守閣

真木子

厨房に二百十日の灯を点す

々

俳句のはの字も知らない私には、新鮮で衝撃的な一日であった。そのときから企業OBペンクラブ会員平間氏というより、私には真木子先生になった。帰ってさつそく小さな季寄せを買ったことを思い出す。その後、ペン俳句会という名で現在まで句会は続いている。

最後に真木子先生と句会を共にしたのも、昨年二月一日のペン俳句会であった。

今日よりやきさらぎの語のひびき合ひ

真木子

鬼やらふ縁うすかりし父のこと

〃

あれほどきちんと会報を作り続けていらした先生がこの回の会報を作っていらっしやらない。お身体が私の想像するより以上に大儀であつたのだろうと推察する。

しかしその句会で、私の記憶に残っている先生は毅然としていて、艶然としている。私の傍を通り過ぎるとき、私の耳元に小さな声で「抗がん治療をやめたの」と言われた衝撃は、私の中にまだ処理しきれない。

きざらぎやまぶしきものに空の青

真木子

木霊してまたぎの径を見失ふ

〃

句の講評はいつものとおり、切り口鮮やかであつた。二次会では一杯のグラスワインを持って余されているように私には見えた。四日後に会う約束をしたが果たされないうままに過ぎた。

入院を知り、病室に入ると「待っていた」と手を伸ばされて、二人でしばらく手を握り合っていた。喜んでくださった。「面会は五分よ」と言われながら、もっと長く手を握ったまま放してくださらなかった。あんなに柔らかな真木子先生の手は私の想像のほかであつた。私の俳句に対する姿勢を励まし、もっとたくさん俳句を作るように、自分を強く出して行くようにと心配してくださった。そればかりを言われた。手を

ほどこいて別れるまで私の先生として振舞ってくださった。苦しかったであろうにと思う。見舞いを終え帰る道々、私と真木子先生の最後であると覚悟した。数日後計報が届いた。

ペン俳句会に入った一年後、平成六年八月、真木子先生に誘われて先生が編集人をされている「青山」という結社に入会した。真木子先生は俳句を始める誰にもそうであるように、私にもよく声をかけてくださった。どこにでも誘ってくださった。私は時間や生活の許すかぎり、どこへでもついていった。楽しかった。俳句は歩いて作るものと言われて、吟行によく連れて行ってくださった。その縁があり、ペン俳句の吟行にも青

山の女性陣が参加してくださった。

事務局を辞めたり、親の世話などでペン俳句を休むこともあったが、真木子先生とはひと月に一度、二人で飲むということが続いた。渋谷、新橋、最後のころはお住まいの西葛西の駅前周辺に変わった。三、四時間の間に話すことはたくさんあった。俳句のこと、吟行のこと、生活のこと、いろいろ話題は尽きなかった。私も負けじと話したが、真木子先生は饒舌であった。よくお母様のことを話された。OL時代のことを話された。食べることが好きでこだわりをもっていらしたお母様に、いろんな物を食べさせられたので、今嫌いなものが多いのと笑い

ながら、私の皿にピーマンや茸を移した。好きなものは私の分まで食べられた。楽しかった。少しビールを口にして、あとはワインであった。お若いころの句にお母様を詠んだ句が多くある。

母とゐて母との距離や灯取虫

真木子

身に近く母あり春を待つとなく

春炬燵母の涙を見てしまふ

新橋で飲む時期が一番長かった。もう店を閉められたが、真木子先生のお友達のお店があり、小さな店内は笑い声に満ちた。焼酎と蚕豆をことのほか好まれたが、いつも季節の好物が揃えられていた。懐かしい。好みをあげつらつ

て三人でよく笑った。立原正秋が好き、格好良い人が好きとよく話された。自註句集に正秋への追悼句を見つけた。

含羞の遺影野分を聞くごとし

真木子

蓮の露光りウインナワルツかな

あのカウンターの隅の椅子にまた二人で座りたい。さんざん笑ったあと、私の俳句や俳句に対する姿勢を叱咤激励して、お開きとなるのが常であった。国鉄が好きと言われて、新橋の駅で手を振りながら改札を入っていたいかれた。

真木子先生は周りの人と、大勢の中のひとりではなく「あなたと私」という直線的な関係を作られる方であった。鳴澤宏英氏、岸本

養生氏、北田純一氏などなど、ペン俳句会の懐かしい顔ぶれが思い浮かぶ。みんな俳句を通して真木子先生の人柄に魅せられていた。天国で句会を開いていらっしやるかもしれない。

逝く人にニコライの鐘春深し

知世

俳句に誘って頂いたことは感謝を越えている。ペン俳句会のメンバーと俳句を深めていくことができたらと願っている。

俳句を一から教わって

石川 素屯

企業OBペンクラブの俳句会は平成五年（一九九三年）八月五日平間真木子先生のご指導によって

始まった。第一回句会は東京駅近くの三菱養和会の入っているビルであった。

青みかん掲げて回転ドアに入る

真木子

当日の参加者は、先生が出されていた句会報によると浅野正春、

亀井弘次、北田純一、小林正憲、

三枝 亨、桜井清治、佐分利治、

吉井米三郎と私。それに先生を入れて十人。亡くなった人も多い。

句会は先生の持参された夏みかんを頂きながら「俳句とは何か」から学びはじめた。俳句の定型の五・七・五の十七音は約束ではなく俳句の前提であること、「や、かな」の切り字など初歩から教わり、夏の季語を使って各人三句ずつ作らされ、句会における選句の

ことなどを教えられた。

まず作ってみましょうということになって、私の「初めての渋谷にはしゃぐ孫娘」に対して「季が入っていませんね。孫をつかうと点が甘くなります」と注意を受け「はじめての浴衣にはしゃぐ孫娘」と直して頂いた。

それから毎月一回の句会が始まった。吟行も千鳥が淵のサクラ吟行に始まって、酉の市や羽子板市の浅草をはじめ飛鳥山、愛宕山、両国、本所（吉良邸）と、季節と場所を選んで、「青山」の女性陣にも声をかけて頂き、先生の懇切な添削、指導によって句作を楽しく学んできた。また「悠遊」に掲載される俳句メンバー各人に対する愛情の籠った講評も心に残

る。

俳句会の会場が学士会館のころ、句会を終わって、大泉子泉がメンバーの一ツ橋会館に席を移し、ワイン・グラスを傾けられるのが、句会后のお楽しみであったようだ。

それが突然の病魔。あつという間に先生を奪われた。亡くなられて、先生の句集を読み直した。恩師の岸風三樓、またお母さまを見送られてか「死」をめぐる句が多くあるように感じた。

死やそこにちろろの闇のあるばかり  
真木子

こうして旅立たれたのだろうか。

昨年（二〇〇七年）五月末に京王プラザホテルで「偲ぶ会」が催

された。百人を超す大勢の方が平間真木子先生を偲んだ。季節は甘い香りの椎の花が咲き始める頃であった。

冥府より風の冷たき椎の花

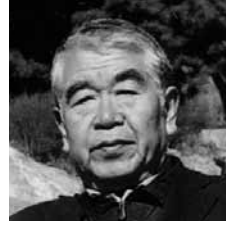
真木子

どなたを偲ばれたものか。私はいま、平間真木子先生を偲んでいゝる。ご冥福をお祈りする。



## 追悼

山下春夫さん



平成19年10月21日 ご逝去  
69歳  
平成18年2月、当クラブ入会。

## 八時半の電話

大平 忠

朝の八時半に我が家で電話が鳴ると、「山下さんから電話ですよ」と家内が言うのが常であった。

山下君からの電話は、朝の八時半といつも決まっていた。月に数回はあった。いつの間にか私も彼への電話は、八時半にするようになってしまった。

最後の電話は十月十九日、高校の同期会の幹事会に行ってくれないかと私が頼み、快く応じてくれた。山下君と私は日比谷高校でクラスが一緒であった。その電話でほかに話したのは、十二月三日に旧友の展覧会を見がてら鎌倉を歩いて一杯やろうという内容だった。「悠遊」の原稿はまだ時間があるなとも話していた。じゃあ、今度は十一月八日「何でも書こう会」で会おうと言って電話を切った。それが彼と交わした最後の会話になった。

高校時代の彼は、一年の時から新聞部で活躍していた。高校生が作るにはかなり骨のある新聞であった。真面目な顔をして部室

へ歩いていく姿を覚えている。いつも自分の頭で考えて発言する男だった。ときに、思いもよらぬ意見を吐くので、それなりに周囲から一目置かれる存在でもあった。

高校卒業以来、会う機会は減った。ただ、彼は日東化学、私は三菱化成と同じ化学系の会社に勤めたところから、たまに会ったときには、共通している仕事の話をした。ゴルフ場でゴルフそっちのけで話をしたこともある。彼は購買担当だったこともあり、エネルギー全般に詳しかった。そして、エネルギー問題はその後も追いかける彼のテーマの一つになった。

彼となにかと頻繁に顔を合わせようになったのは定年後のこと

である。そして、朝の八時半に電話がときどき鳴るようになった。

彼はリタイアーしてからエネルギー問題のフォーローと共に、新しい勉強を始めた。自身では、自分は学生時代からノンポリであったと言う。しかし、ここ数年は現代史それも東北アジアと日本との係わりの歴史に首を突っ込み、熱心に勉強をしていた。終生のテーマのナンバーワンはこれだったようだ。会う度に、あるいは電話でもよく話を聞いた。

そんな彼を、企業OBベンクラブに誘い、「何でも書こう会」で、東北アジア史とエネルギー問題を書いたらどうだと勧めたのである。入会したのは平成十八年二

月であった。

「何でも書こう会」にはよほどのがない限り参加した。自分で書くのも好きだったし、会のわいわいやる雰囲気が入った様子であった。やはり、ユニークな発言には最初はらはらしたし、びっくりした人もいたと思う。やがて山下節とメンバーから理解され親しまれるようになった。

家は茅ヶ崎で、クラブの会場オリンピックセンターからは遠い。「何でも書こう会」、「月例会」が終わって懇談に参加すると帰宅は遅くなる。そこで晩飯代わりに駅前の蕎麦屋で一杯飲んで帰るというのが決まったコースになった。山下君は、蕎麦屋の集まりを作った功労者といえよう。

告別式の会場に、「思い出の品々」が置かれていた。

将棋二段の立派な免状（実力は四、五段だったという）。酒のつまみや料理の本（読み込んだ痕跡がある）。ご家族との旅行の写真（まめに家族サービスをしていたのだ）。海外からの奥様やお嬢様方への絵葉書。中央に「悠遊」十四号が置かれ、彼の書いたページが開かれていた。その横に「何でも書こう会」の原稿もあった。

突然のあまりに早い別れであった。午前八時半になると、もう鳴らない電話を眺めて、無性に哀しくなる。



# 「企業OBペンクラブの本年の歩み」

平成十九年(二〇〇七年) 〓

## 年表 (会員への敬称略)

一月例会(十八日)

・新入会員 〓 田谷英浩

・会員講演 〓 佐久間直正

「Crise事始」

・新年パーティ 〓 会員参加 二十九名

招待参加 五名

二月例会(十九日)

・新入会員 〓 浜田道雄

・会員講演 〓 大西宏

「松下幸之助と本田宗一郎／生きかたと働き方」

・『悠遊』第十四号の完成・配布

三月例会(二十六日)

・名誉会長 〓 深田祐介氏のクラブ名誉会長就任

・新入会員 〓 牛坊貞夫

・退会会員 〓 平間真木子(物故 合掌!)

・会員講演 〓 垂水健一

「台湾はどこに行くのか―体験的「中台論」―」

・お花見 〓 代々木公園(二十二日)

四月例会(二十日)

・退会会員 〓 若林支郎、北田純一(退会後物故合掌!)

・ゲスト講演 〓 牧山ひろえ氏(弁護士)

「参議院選挙に応募した理由」

五月例会(十七日)

・『悠遊』第十四号の合評会の開催

六月例会(二十一日)

・新入会員 上田信隆

・ゲスト講演 深田祐介氏(作家、クラブ名誉会長)

「最新作『歩調とれ、前へー』フカダ少年の戦争と恋」の出版に際して」

七月例会(二十日)

・会員講演 山下春夫

「嫌中と抗中、私の中国認識」

八月例会(夏休み)

・新入会員 稲宮健一

九月例会(二十一日)

・ゲスト講演 マークス寿子氏(作家、秀明大学教授)

授)

「昭和と平成、イギリスと日本を生きて」

十月例会(十九日)

・退会会員 山下春夫(物故 合掌！)

・会員講演 大月和彦

「非正規雇用問題の一面」

・懇親会 本年度入会の会員を中心に有志による懇親会を開催

・選挙管理委員 来年度の理事選出のために委員(大泉潤、浜田道雄)が任命された。

十一月例会(十三日)

・ゲスト講演 石井陽一氏(神奈川大名誉教授)

「汚職・腐敗を国際比較すれば」

十二月例会(二十日)

・新理事 来年度の新理事・役員を選出完了

・ゲスト講演 日米学生会議

「恒例の現役大学生による活動報告」

一、役員人事

一昨年選出された理事・役員が任期最後の年を迎える二〇〇七年度を継続担当した。

会長 (出版担当)	西川 武彦
副会長 (運営委員長)	松谷 隆
副会長 (事務局長)	平尾 富男
理事	中川路 明
理事	都甲 昌利
理事	金京 法一
理事 (会計担当)	大泉 潤
監事	山縣 正靖
会計担当 (準役員待遇)	清水 勝

二、二〇〇七年度の方針

二〇〇六年度に策定された方針を継続。

①全ての会員が何らかの活動に参加する (参加できる) 運営を心掛ける。

②物書き・物言うユニークな集団として、出版活動の一層の拡充を図る。

③ホームページの更なる活用を通し、会員のITレベルと広報活動の向上を目指す。

④団塊世代を視野に入れた会員獲得への取り組みを行う。

三、会員数 (五十九名)

二〇〇六年末の会員数は五八名。本年度中に五名の新入会員があった一方で、物故者二名を含む四名の退会者が出た。従って二〇〇七年末の会員数は五十九名となった。

・退会会員 〓 平間真木子 (物故 合掌!)、若林支郎、北田純一 (退会後物故 合掌!)、山下春夫 (物故 合掌!)

・新入会員 〓 田谷英浩、浜田道雄、牛坊貞夫、上田信隆、稲宮健一

四、月例会会場の安定確保と活動拠点化

・二〇〇六年度一月から、代々木の「国立オリピック記念青少年総合センター」を月例会他の会合の基地とし、安定的な活動拠点の確保が継続的に出来ている。

## 五、出版プロジェクト

(一) 「悠遊」第十四号が、新編集世話人の努力により、二〇〇七年二月に発行された。委員の地道な貢献と会員の協力により、無事出版された。(編集世話人〓大平忠、安藤晃二)

第十五号からは安藤委員に代わって浜田道雄が新しく編集委員に加わり、大平委員と二人三脚で「悠遊」の発行を担当することになった。

(二) 電子雑誌「ベストライフ・オンライン」には前年引き続き「政治・経済・社会の目」および「年金」のコラムに継続掲載され、好評を博している。新入会員の積極的投稿も実現し、コラムの充実が維持発展されている。(プロマネ〓大泉潤)

(三) 電子雑誌「ナムコトラベル」への投稿参画活動

は成功裏に終了したが、来年度からの新しい試みについて同社との話し合いが続行中。(プロマネ〓松谷隆、大月和彦)

(四) 川柳勉強会も今年末で三年半を迎えた。昨年の出版『不良老人たちの溜息』に続き、勉強会第五十回目までには、具体的な出版企画案策定を實現できるようにメンバーが一丸となって努力中。

(五) 昨年経験した電子出版に引き続き、新たな出版を模索中。(プロマネ〓松谷隆)

(六) 「何でも書こう会」から生まれた「800文字学館」の公開ページ掲載により、将来の出版に向けた体制作りが整った。

(七) 本年度より発足した「掌編小説勉強会」によって新たな文芸作品の出版に対する希望が湧き上がった。

## 六、ミーティング・勉強会

(一) 「英語を読もう会」

発足以来七年目を迎えた長期継続勉強会は、新

しいプロマネを迎え、時事問題を中心に英文記事の講読を通じ、読解力向上と国際事情の理解に努めている。

開催日程も、「何でも書こう会」とは独立し、「サロン21」と同日の開催に変更されることになった。(プロマネ≡佐久間直正)

(二) 「何でも書こう会」

八〇〇字の文字制限で、エッセイ・論説・超短編小説等を勉強会の場で音読発表し、出席者全員で自由闊達に批評し合う楽しい文章力向上の勉強会は、新入会員の参加により、楽しい雰囲気の中で発展中。(プロマネ≡野瀬隆平)

ここでの批評・修正提案を得て更に作品を推敲したものを、「800字文学館」として再構成して会員専用ホームページへの掲載を経験した。

九月からは外部公開ページに掲載発表を開始し、ホームページの活性化にも寄与し始めた。

(プロマネ≡野瀬隆平)

(三) 「サロン21」

国際的にはイスラエルからアフガニスタンにいたる地域の不安定、ロシアの台頭など冷戦後の枠組み変動の兆しがあり、国内的には衆参両院のネジレ現象や突然の首相辞任などがあったが、当サロンでは憲法改正・格差社会・NHK問題・アメリカの宇宙戦略・東アジア共同体構想など基本問題を中心に勉強した。来年は日本の近現代史を集中的に勉強する予定。(プロマネ≡金京法一)

(四) 「IT勉強会」

新しく入会される会員は、基本的にホームページでの閲覧・投稿が可能であり、IT登録会員は増加中。現在会員の大半が従来のメールによる情報交換活動に代えて、年末には立ち上げ二年半を向かえたクラブのホームページを通して、会員相互のフォーラム形式の交流の場が活発化されつつある。対外的にも従来からのエッセイ・コラム及び会員写真館のウェブ投稿以外に、「800字文学館」が本年九月から公開ページに移行され、活動が更に広がりを見せた。

会員の投稿活動を更に推し進めるために、毎月一回パソコン操作の基礎的勉強、及びホームページの利用法についての勉強を継続している。(プロマネⅡ松谷隆、平尾富男)

(五) 「ペン俳句会」

今年二月に会員として悠遊ペン俳句会で長年指導を続けてこられた平間真木子先生が急逝。さらには岸本義生氏、北田純一氏と会の立ち上げ期からの有力メンバーを相次いで失ったことは、ペン俳句会にとって大きな打撃となった。

一方で、俳句会のメンバーである西川知世さんを指導者として迎え、会場も従来の学士会館から代々木のオリンピック・センターに移し、来年度の更なる発展を目指している。月例歳時記のクラブのホームページへの公開掲載も平成十六年一月以来続行中。(世話人Ⅱ中村將陸)

(六) 「川柳勉強会」

二〇〇四年六月より新橋の割烹を借りて毎月勉強会を開催して以来、二〇〇七年末で第四十三回

目を迎える長期継続勉強会になる。出席者全員による和氣藹々とした雰囲気の中で選句・句評を行い、企業OBらしい川柳を模索・研鑽している。九月以降、勉強会会場を新橋から銀座に移し、新たな出版企画への情熱を失わずに楽しんでいく。(世話人Ⅱ平尾富男)

(七) 「掌編小説勉強会」

今年初めに立ち上がった最も新しい勉強会は、一年経った十二月現在で、既に七人のメンバーによる四十作品近くの力作小説が完成し、会員向けホームページに掲載されるという快挙となった。(プロマネⅡ濱田優、西川武彦)

七、来年度新役員人事

十二月末で現役員体制の二年目が終了し、任期満了となり、二〇〇八年・二〇〇九年の二年間を勤める理事・役員が選出された。

会長(出版企画担当) 西川 武彦

副会長(運営委員長・IT委員長) 松谷 隆

副会長（事務局長・会員維持増強担当）	平尾 富男
理事（渉外担当）	都甲 昌利
理事（財務担当）	大泉 潤
理事（会員維持増強担当）	大平 忠
理事（会計担当）	清水 勝
監事	山縣 正靖

## 八、まとめ

二〇〇七年度に、企業OB作家の深田祐介氏を名誉会長として迎えたことは、このクラブの歴史に画期的な一ページが刷り込まれたといつて過言ではない。年初から立ち上がった「掌編小説勉強会」に加えて、クラブ活動の中で文藝志向の要素が強まった印象も内外にアピールできたと言えよう。

二〇〇八年からクラブ運営を新しく担当する役員への改革路線の橋渡しをするべく、予算制度の導入による財政健全化を計りながら、更なる発展に向けての土台強化を目指した。幸いにして、優

秀な新入会員も加わり、新しい意識と意欲の兆しが見えてきた。一方で、年初に発足した会員増強プロジェクトの成果は、女性会員獲得を含め、必ずしも満足の行くものではなかった。新年度から一層の努力と会員全員による協力体制の推進が課題となる。

今後とも、時代の流れに後れを取ることなく、「企業OBペンクラブ」の在り方と目的に対して、会員の総意を問い直しながら、過去に囚われず、クラブの改革と前進を、会員全員の参加によって実現することが要求される。その為の雰囲気作りは今後の新しい役員体制でも認識・確認されることになった。二〇〇八年度以降も、新理事・役員体制の下、意欲ある新会員の増強と、より多くの会員が更なる活動に向かつて一丸となり努力することに期待が掛かる。

（文責・事務局長）

## 執筆 者 名 簿 (五十音順)

氏 名 (カッコ内は本名)	出 身 会 社	
阿部 洋己	あべ ひろき	キリンビール キリンビバレッジ
安藤 晃二	あんどう てるつぐ	三菱商事
石川 正達	いしかわ まささと	毎日新聞社
稲宮 健一	いなみや けんいち	三菱電機
今川 確郎	いまがわ かくろう	兼松
岩崎洋一郎	いわさき よういちろう	三菱レイヨン
上田 信隆	うえだ のぶたか	東芝情報システム
上原 利夫	うえはら としお	住友商事
鵜飼 直哉	うかい なおや	富士通
遠藤 俊也	えんどう としや	東京銀行 丸紅
大泉 潤	おおいずみ じゅん	三菱化学
大塚 滋	おおつか しげる	国鉄
大月 和彦	おおつき かずひこ	労働省
大西 宏	おおにし ひろし	松下電器
大野 晔	おおの ただし	三井物産
大庭 定男	おおば さだお	三井物産 野村総研
大平 忠	おおひら ただし	三菱化学
亀井 弘次	かめい ひろじ	キリンビール
木下 洋介	きのした ようすけ	文化放送
金京 法一	きんきょう ほういち	三菱商事 三菱総研
黒崎 昭二	くろさき しょうじ	新日鉄
児玉 忠雄	こだま ただお	三菱銀行
牛坊 貞夫	ごぼう さだお	三井物産
佐久間直正	さくま なおまさ	日本郵船
清水 勝	しみず まさる	明治安田生命
莊司 忠志	しょうじ ただし	石川島播磨重工業
杉浦 右藏	すぎうら ゆうぞう	N T T 三菱電線工業
関谷 裕彦	せきや ひろひこ	ローヤル・ネドロイド・ラインズ
高橋 孝藏	たかはし こうぞう	丸紅 松竹
玉山 和夫	たまやま かずお	通産省 日英協会
田谷 英浩	たや てるひろ	神鋼電機



氏 名 (カッコ内は本名)		出 身 会 社
垂水 健一	たるみ けんいち	中日新聞 (東京新聞)
都甲 昌利	とこう まさとし	日本航空
鳥海 博	とりうみ ひろし	山一証券
中川路 明	なかかわじ あきら	ダイセル化学工業
中村 爽	なかむら そう	日本工営
中村 将陸	なかむら まさみち	富士通
新山章一郎	にいやま しょういちろう	在日米海軍基地統合人事部
西川 武彦	にしかわ たけひこ	日本航空
西川 知世	にしかわ ちよ	
野瀬 隆平	のせ りゆうへい	石川島播磨重工業
橋本 政彦	はしもと まさひこ	日商岩井
浜田 道雄	はまだ みちお	労働省
濱田 優	はまだ ゆたか	三菱化学
平尾 富男	ひらお とみお	キヤノン
藤岡 豊	ふじおか ゆたか	三菱商事
古川さちお(幸雄)	ふるかわ さちお	安宅産業 石川島播磨重工業
松浦 武弘	まつうら たけひろ	伊藤忠商事
松谷 隆	まつたに たかし	富士通
三宅 劭	みやけ たかし	信越化学
森田 茂	もりた しげる	出光興産
山縣 正靖	やまがた まさやす	三菱銀行
吉寄 清巳	よしざき きよみ	関西ペイント
吉田 邦彦	よしだ くにひこ	安田生命

本号で一番力を注いだのは、会員皆さんに一人でも多く書いて貰おうとしたことである。メールと電話の督促で、なかには、これぞ流行作家の心境かと言われた人もいた。お蔭様で投稿数は目標に達したと思う。

編集作業はパソコン無くして考えられないが、ビル・ゲイツのわがままにも、前号に引き続きいやというほど振り回された。VISTAなる新製品の登場で混乱が随所で起き、頭を掻きむしった。顧客に対してこれほど傍若無人な供給者を他に知らない。

(大平)

企業OBペンクラブに入って二ヶ月もしないうちに、大平さんから「悠遊」の編集を頼まれた。ずいぶん人使いの荒いクラブだなど思いながら、訳も分らぬままお引き受けした。仕事が始まってみると正直いって大変なことを引き受けてしまったと後悔したが、もう後の祭り。というわけで、何も分らずながら、今日までお手伝いしてきた。しかし、今回は特集テーマ、自由テーマ、創作あわせて五十二編と執筆者数はここ数年での最高になった。そんな熱意を持った皆さんの作品を一番早く読ませてもらえろという喜びを知った。これは編集世話人冥利といふべきだろう。そんな喜びをふまえて、出来るだけいい雑誌に仕上げたいと思っている。

(浜田)

企業OBペンクラブ同人誌

「悠遊」第十五号

二〇〇八年二月十五日発行

編集・発行者 企業OBペンクラブ会長

西川 武彦

印刷所

株式会社 毎日新聞東京センター

東京都千代田区一ツ橋一―一―

TEL 〇三三三二二一五八〇

連絡先

企業OBペンクラブ事務局

平尾 富男

横浜市青葉区田奈町三三―二二 (千二二七―〇六四)

Eメール: [hira03321@041iscom.net](mailto:hira03321@041iscom.net)

クラブURL: <http://www.obpen.com>

口座

三菱東京UFJ銀行海老名支店(409)

企業OBペンクラブ 会計担当 清水 勝

(普通) 1086096